

長野県大町市借馬遺跡緊急発掘調査報告書

^{カル}借 ^マ馬 遺 跡

II

(付 トチガ原遺跡立ち合い調査報告)

1980

大町市教育委員会

長野県大町市借馬遺跡緊急発掘調査報告書

カル
借 マ
馬 遺 跡

II

(付 トチガ原遺跡立ち合い調査報告)

1980

大町市教育委員会

例 言

- 1 本書は、昭和55年度長野県中信土地改良事務所長と大町市長との契約に基づいて行なわれた県営圃場整備事業に伴う緊急発掘調査および大町建設事務所長と大町市教育委員会教育長との契約に基づいて行なわれた開発事業農具川河川改良工事に伴う緊急発掘調査の報告書である。なお、農具川河川改良工事のため一部開発されることになったトチガ原遺跡の立合調査の報告をもあわせて載せることとした。
- 2 調査結果に関しては、全般には十分検討する時間的余裕がなかった。執筆にあたっては基本的事項のみを統一した。各担当者によって表現方法等に相違があることは了解されたい。なお、本文の記述中、A地区とあるのは借馬遺跡A地区北部を、B地区とあるのは借馬遺跡B地区を、また農具川地区とあるのは農具川河川改良工事地区を示す。文責は文末に記した。
- 3 整理、接合補修作業は、丸山鈴加が主として行なった。
実測、トレース、拓本については篠崎健一郎、原田曠、荒井和比古が担当したほか、考古学専攻の大学生平林彰、篠宮正、伊藤正人、宮城孝元、寺島仁の各氏の御協力をいただき、遺跡の地形、地質、環境と石器類の石質等については、森義直が担当した。
写真関係は、白井潤が、主として担当した。
- 4 骨の出土物については、信州大学医学部第二解剖学教室西沢寿晃先生に分析を御依頼し、その所見について掲載させていただいた。
- 5 発掘調査から報告書作成にいたるまでの間、県教育委員会文化課関孝一指導主事、白田武正指導主事、百瀬長秀専門主事、土屋 稔専門主事、和田博秋専門主事、福沢幸一氏、島田哲男氏の各氏からは御指導御教示をいただいた。
- 6 本報告書関係の遺物、実測図等は、大町市教育委員会に保管してある。

序

このたびの発掘調査は、長野県平地区県営圃場整備事業の実施に先だって行なわれた緊急発掘調査であり、前年度事業にひき続く借馬地籍を中心として行なわれたものである。

調査は、長野県考古学会員篠崎健一郎氏を団長とする調査団にお願いをし、圃場整備事業の施行とからみ合いの中での文字通りあわただしい発掘調査であった。

当初予定されていた借馬遺跡A地区北部及び借馬遺跡B地区の調査の進行中、新たに農具川河川改良工事地区の河川敷予定地内からも遺構検出及び土器の出土がみられ、急きょ県文化課及び大町建設事務所立ち合いのもとに、この地区の調査もとり込むことになった。

発掘調査にあたっては、地主の方々からは快く御理解と御協力をいただき、また長野県中信土地改良事務所をはじめ、地元大町市土地改良区からもそれぞれ、御理解と御協力をいただいた。

さらに、調査の実施にあたっては、長野県教育委員会文化課の担当者はじめ諸先生方からは適切なご指導ご援助をいただいた。

長期間に及ぶ現場での発掘に当っては、市民の皆さん、中学、高校の生徒諸君をはじめ、大勢の方々の献身的なご協力によりなすとげられたものである。ここに、これらの諸機関、団体はじめ多くの皆さんの御苦勞に対し、深じんなる謝意を表するものである。

調査内容については、報告書に詳述されているので省くこととするが、5世紀を中心として、弥生期から平安期に及ぶ数百年にもまたがる一大集落跡であることが前年度調査にひきつづき確認され、この地方における古代の生活や集落のなりたちを知る上に、実に貴重な成果をもたらした。今後これらの資料を十分に生かし、当地の古代史の解明に資したいと念願するものである。

この報告書の発刊にあたっては、調査団の先生方の幾日もの献身的な努力によって完成されたものであり、ここに重ねて謝意を表するしだいである。

昭和56年3月25日

長野県大町市教育委員会

教育長 横 沢 茂

本文目次

序	
例言	
第I章 調査状況	1
第1節 調査にいたるまで	1
1 大町市圓場整備事業の経過	1
2 借馬遺跡緊急発掘調査団	2
第2節 調査の実施と経過	3
1 調査の経過	3
2 発掘調査の経過	3
3 発掘調査協力者	5
第3節 発掘調査の方法と発掘区の設定	6
1 発掘調査の方法	6
2 発掘区の設定	6
第II章 借馬遺跡の概要	11
第1節 農具川流域の遺跡	11
第2節 遺跡の位置と環境	15
1 借馬遺跡の位置	15
2 借馬遺跡の地形・地質・環境について	15
第III章 遺構と遺物	19
第1節 竪穴住居址と竪穴住居址出土遺物	25
第2節 建物址と建物址主柱ビット内出土遺物	80
第3節 その他の遺構と遺物	92
1 14号住居址出土骨類について	92
2 炭化物について	93
3 用途不明の池状遺構	94
4 住居址外の大型ビット	95
5 河川址と溝状遺構について	97
6 人の足跡と推定される模様について	99
7 発掘区域外表層の遺物	100
第IV章 まとめ	102
1 竪穴住居址	102
2 建物址	103
第V章 トチガ原遺跡立ち合い調査	121
第1節 遺跡の位置と環境	121

第2節	調査区の設定と調査の経過	121
1	発掘区の設定	121
2	発掘調査の経過	121
第3節	遺構と遺物	123
1	竪穴住居址	123
2	竪穴住居址出土遺物	123

目 次

第I章～第II章

図1	借馬遺跡A地区北部、B地区農具川河川改良工事地区 付近の地形と発掘区、メッシュ設定及び遺構	7
図2	農具川流域の遺跡	14
図3	借馬遺跡の土質柱状図	16
図4	借馬遺跡A地区地質概念図	17

第III章 遺構と遺物

図1	借馬遺跡A地区北部南半分全景	19
図2	借馬遺跡A地区北部北半分全景	20
図3	借馬遺跡A地区北部東側と農具川河川改良工事地区南部全景	21
図4	農具川河川改良工事地区南部全景と簡易水路部全景	22
図5	借馬遺跡B地区全景	23
図6	借馬遺跡B地区河川址・礎・溝状遺構	24

第1節 竪穴住居址と竪穴住居内出土遺物

図7	45号住居址	26
図8	45号住居址埋壺炉	26
図9	45号住居址出土遺物	27
図10	15号住居址	29
図11	15号住居址遺物出土状況	29
図12	15号住居址出土遺物	30
図13	23・25号住居址	31
図14	25号住居址出土遺物	32
図15	24号住居址	32
図16	24号住居址埋壺?炉	32
図17	24号住居址出土遺物	33
図18	26号住居址	34
図19	26号住居址出土遺物1	34

图20	26号住居址出土遗物 2	35
图21	29号住居址	35
图22	29号住居址出土遗物	35
图23	30号住居址	36
图24	30号住居址出土遗物	37
图25	31号住居址	38
图26	31号住居址出土遗物	38
图27	32号住居址	39
图28	36·37号住居址	40
图29	36号住居址出土遗物	41
图30	37号住居址出土遗物	42
图31	46·47号住居址	43
图32	46号住居址出土遗物	44
图33	47号住居址出土遗物	44
图34	48号住居址	44
图35	48号住居址出土遗物	44
图36	49号住居址	45
图37	49号住居址出土遗物	46
图38	53·56号住居址	47
图39	53号住居址出土遗物	47
图40	56号住居址出土遗物	48
图41	54号住居址	48
图42	57号住居址	49
图43	57号住居址出土遗物	49
图44	59号住居址	50
图45	59号住居址埋葬炉	50
图46	59号住居址出土遗物	50
图47	13号住居址	51
图48	13号住居址出土遗物	52
图49	27号住居址出土遗物	52
图50	27号住居址	53
图51	34号住居址出土遗物	53
图52	34·35号住居址	54
图53	35号住居址出土遗物	54
图54	38·39·40·41号住居址	55
图55	39号住居址出土遗物	55
图56	41号住居址出土遗物	56

図57	42号住居址	57
図58	42号住居址出土遺物	57
図59	43号住居址	57
図60	43号住居址出土遺物	58
図61	44号住居址	58
図62	44号住居址出土遺物	58
図63	52号住居址	59
図64	52号住居址出土遺物	59
図65	58号住居址	60
図66	16号住居址	60
図67	16号住居址出土遺物	61
図68	18号住居址	62
図69	18号住居址出土遺物	62
図70	19号住居址	63
図71	19号住居址出土遺物	63
図72	33号住居址	64
図73	33号住居址出土遺物	64
図74	11号住居址	65
図75	11号住居址カマド	65
図76	11号住居址出土遺物	66
図77	12号住居址	66
図78	12号住居址出土遺物	67
図79	14号住居址	69
図80	14号住居址出土遺物	71
図81	17号住居址	73
図82	17号住居址出土遺物	74
図83	50号住居址	74
図84	50号住居址出土遺物	75
図85	60号住居址 (B地区1号)	75
図86	20号住居址	76
図87	20号住居址出土遺物	77
図88	51号住居址	77
図89	51号住居址集石状況	78
図90	51号住居址出土遺物	78
図91	55号住居址	78
図92	55号住居址出土遺物	78
図93	21号住居址	79

図94	22号住居址	79
図95	28号住居址	80
第2節	建物址と建物主柱列ピット出土遺物	
図1	建物址27	81
図2	建物址27出土遺物	81
図3	建物址20	82
図4	建物址20出土遺物	82
図5	建物址5	82
図6	建物址6	83
図7	建物址7	83
図8	建物址8	84
図9	建物址9	84
図10	建物址10	85
図11	建物址11	85
図12	建物址12	86
図13	建物址13	86
図14	建物址14	86
図15	建物址15	87
図16	建物址16	87
図17	建物址17	88
図18	建物址18	88
図19	建物址19	88
図20	建物址21	89
図21	建物址22	89
図22	建物址23	89
図23	建物址24	90
図24	建物址25	90
図25	建物址26	91
図26	建物址28 (B地区建物址1)	91
第3節	その他の遺構と遺物	
図1	用途不明の池状遺構	94
図2	用途不明の池状遺構内出土遺物	95
図3	P48出土遺物	96
図4	住居址外大型ピット	96
図5	A地区北部河川址断面	97
図6	B地区溝状遺構断面	98
図7	B地区河川址礫内出土遺物	99

図8	人の足跡と推定される模様模式図	99
図9	人の足跡と推定される模様トレース	99
図10	発掘区域外表層の遺物	101

第V章 トチガ原遺跡立ち合い調査

図1	トチガ原遺跡立ち合い調査区設定図と遺構	122
図2	トチガ原遺跡竪穴住居址	123
図3	竪穴住居址出土土器	125
図4	竪穴住居址出土土器拓影図	125
図5	竪穴住居址出土土器拓影図	126
図6	竪穴住居址出土土器拓影図	127
図7	竪穴住居址出土土器拓影図	128
図8	竪穴住居址第II層内出土石器類	129
図9	竪穴住居址第I層内出土石器類	129
図10	竪穴住居址第I層内出土石器類	129

表 目 次

第I章～第IV章

表1	農具川流域の遺跡一覧	12
表2	竪穴住居址、建物址支柱列ピット、その他のピット出土炭化物一覧	93
表3	カマド施設を持つ竪穴住居址一覧	105
表4	カマド施設を持たない竪穴住居址一覧	106
表5	建物址一覧	109
表6	竪穴住居址出土図示土器一覧	110
表7	14号住居址出土土器観察表	115
表8	45号住居址出土土器観察表	116
表9	45号住居址出土土器片製品観察表	117
表10	建物址20・27出土土器観察表	118
表11	竪穴住居址内出土石器類一覧	119
表12	竪穴住居址内出土鉄器類一覧	119

第V章 トチガ原遺跡立ち合い調査

表1	竪穴住居址出土土器一覧	130
表2	竪穴住居址出土図示土器一覧	130
表3	竪穴住居址出土図示石器類一覧	131

写 真 目 次

- 写真1 1. 借馬遺跡A地区北部全景
- 写真2 1. 借馬遺跡A地区北部全景及び農具川河川改良工事状況 2. 借馬遺跡遠景 3. 借馬遺跡近景
- 写真3 1. 11号住居址 2.3.4. 11号住居址カマド 5. 11号住居址土器出土状況 6. 12号住居址
- 写真4 1. 13号住居址 2. 13号住居址P4内土器出土状況 3. 13号住居址土器出土状況 4. 14号住居址 5.6. 14号住居址カマド
- 写真5 1. 14号住居址骨片出土状況 2.3. 14号住居址土器出土状況 4. 15号住居址 5.6. 15号住居址土器出土状況
- 写真6 1. 16号住居址 2. 17号住居址 3.4.5. 17号住居址カマド
- 写真7 1. 18号住居址 2. 18号住居址土器出土状況 3. 19号住居址
- 写真8 1. 20号住居址 2. 21号住居址 3. 22号住居址
- 写真9 1. 24号住居址 2. 24号住居址礫流入状況 3. 24号住居址埋燧炉(?)址
- 写真10 1. 23・25号住居址 2. 23号住居址 3. 25号住居址
- 写真11 1. 26・27号住居址 2. 26号住居址 3. 26号住居址炉(?)址 4.5. 26号住居址土器出土状況 6. 26号住居址切り合いピットP282
- 写真12 1. 27号住居址とP282 2. 27号住居址集石状況 3. 28号住居址
- 写真13 1. 29号住居址 2. 30号住居址 3.4.5.6. 30号住居址遺物出土状況
- 写真14 1. 31号住居址 2. 32号住居址 3. 32号住居址集石状況
- 写真15 1. 33号住居址 2. 33号住居址カマド 3. 33号住居址土器出土状況
- 写真16 1. 34・35号住居址 2. 34号住居址 3. 34号住居址埋燧炉(?)址
- 写真17 1. 35号住居址 2. 36・37号住居址 3. 36号住居址
- 写真18 1.2. 36号住居址土器出土状況 3. 同上壺口縁をとりのぞいたところ 4. 36号住居址集石状況 5. 37号住居址 6. 37号住居址炭化物土器出土状況 7.8.9. 37号住居址土器出土状況
- 写真19 1. 借馬遺跡北西角簡易水路部全景 2. 38・39・40・41号住居址 3. 38号住居址
- 写真20 1. 39号住居址 2. 40号住居址 3. 41号住居址
- 写真21 1. 42・43号住居址 2. 42号住居址 3. 43号住居址
- 写真22 1. 42・43号住居址切り合いピットP439 2. 43号住居址切り合いピットP440 3. 43号住居址切り合いピットP441
- 写真23 1. 借馬遺跡農具川河川改良工事地区GNoニO L22付近 2. 44号住居址 3. 45号住居址
- 写真24 1. 45号住居址礫流入状況 2.4. 45号住居址埋燧炉 3. 45号住居址土器出土状況 5. 45号住居址集石状況 6. 46・47号住居址
- 写真25 1. 46号住居址 2. 47号住居址 3. 48号住居址
- 写真26 1. 49号住居址 2. 49号住居址土器出土状況 3. 借馬遺跡農具川河川改良工事地区GNoニ40R10付近全景

- 写真27 1. 50号住居址 2. 51号住居址 3. 51号住居址集石状況
- 写真28 1. 52号住居址 2. 53・56号住居址 3. 54号住居址
- 写真29 1. 55号住居址 2. 57号住居址 3. 58号住居址
- 写真30 1. 59号住居址 2.3. 59号住居址埋燬炉
- 写真31 1. 建物址5 2. 建物址6 3. 建物址7
- 写真32 1. 建物址8 2. 建物址9 3. 建物址10
- 写真33 1. 建物址11 2. 建物址12 3. 建物址13
- 写真34 1. 建物址14 2. 建物址15 3. 建物址16
- 写真35 1. 建物址17 2. 建物址18 3. 建物址19
- 写真36 1. 建物址20 2. 建物址21 3. 建物址22
- 写真37 1. 建物址23 2. 建物址24 3. 建物址25
- 写真38 1. 建物址26大型ピットP405 2. 建物址27 3.4. 建物址27P405内土器出土状況
- 写真39 1. 簡易水路部検出使途不明の池状遺構 2. 池状遺構土器出土状況 3. 池状遺構切り合い大型ピットP442
- 写真40 1.2. P330 3. P43 4. P336 5. 借馬遺跡A地区北西角大型ピット群 6. P431・P432・P433・P434・P435・P436・P437 7. P436内土器出土状況 8.9. P405・P405
- 写真41 1.2. 人の足跡と推定される模様
- 写真42 1. 溝址2断面 2. 河川址2断面 3. 溝址1断面
- 写真43 1. 借馬遺跡B地区全景
- 写真44 1. 60号住居址(B地区1号住居址) 2. 60号住居址カマド 3. 建物址28(B地区建物址1)
- 写真45 1. 借馬遺跡B地区河川址礎状況 2. 同上(屈曲部より南方を望む)
3. 同上(屈曲部より北方を望む)
- 写真46 1.3. B地区河川址と溝状遺構切り合い断面 2. 河川址ピット切り合い断面 4. 河川址断面(礎確認前)
- 写真47 1. 11号住居址出土土器 2. 12号住居址出土土器
- 写真48 1. 13号住居址出土土器
- 写真49 1. 14号住居址出土土器
- 写真50 1. 15号住居址出土土器
- 写真51 1. 16号住居址出土土器 2. 17号住居址出土土器 3. 18号住居址出土土器
- 写真52 1. 19号住居址出土土器 2. 20号住居址出土土器
- 写真53 1. 24号住居址出土土器 2. 25号住居址出土土器
- 写真54 1. 26号住居址出土土器
- 写真55 1. 27号住居址出土土器 2. 30号住居址出土土器
- 写真56 1. 31号住居址出土土器 2. 33号住居址出土土器 3. 34号住居址出土土器
4. 35号住居址出土土器
- 写真57 1. 36号住居址出土土器

- 写真58 1. 37号住居址出土土器
- 写真59 1. 39号住居址出土土器 2. 41号住居址出土土器 3. 42号住居址出土土器
- 写真60 1. 43号住居址出土土器
- 写真61 1. 45号住居址出土土器 2. 45号住居址出土土器片製品
- 写真62 1. 46号住居址出土土器 2. 48号住居址出土土器
- 写真63 1. 49号住居址出土土器
- 写真64 1. 52号住居址出土土器 2. 53号住居址出土土器
- 写真65 1. 55号住居址出土土器 2. 56号住居址出土土器
- 写真66 1. 57号住居址出土土器
- 写真67 1. 59号住居址出土土器
- 写真68 1. 建物址主柱列ピット内出土土器 2. 使途不明の池状遺構内出土土器
- 写真69 1. 14号住居址出土骨片 2. 竪穴住居址出土鉄器
- 写真70 1. 竪穴住居址出土石器類他
- 写真71 1. 発掘区域外表層の遺物 2. B地区河川址礫内出土遺物
- 写真72 1.2. トチガ原遺跡近景 3. トチガ原遺跡竪穴住居址
- 写真73 1. トチガ原遺跡竪穴住居址 2.3. 竪穴住居址土器出土状況
- 写真74 1.2.3. 竪穴住居址出土土器
- 写真75 1.2.3. 竪穴住居址出土土器
- 写真76 1.2.3. 竪穴住居址出土土器
- 写真77 1.2.3. 竪穴住居址出土土器
- 写真78 1. 竪穴住居址出土石鏃 2.3. 竪穴住居址出土石器類
- 写真79 1.2.3. 竪穴住居址出土石器類

第1章 調査状況

第1節 調査に至るまで

1 大町市圃場整備事業の経過

県営圃場整備事業は土地改良法に基づいて施行される大規模な農業基盤整備事業である。この事業の目的は、大型機械の導入により農業の省力化を進め、農家経営の合理化を図ることにある。土地改良法によれば、受益者15名以上の申請に基づき、受益面積60ヘクタール（60町歩）以上にわたる基盤整備事業については、事業主体は県営によることになっているものである。

事業は昭和52年度から着手し、昭和60年度までの9年間の計画で、大町・平地区については、昭和52年度と53年度に大町三日町地籍を、昭和54、55、56年度には平借馬地籍を中心に一部木崎地籍に及び、57年度稲尾地籍、58年度大町上花見地籍を実施する計画である。これらの事業により対象となる面積（主として水田）は132ヘクタール、対象農家戸数は354戸、総事業費4億8千7百万円（当初計画）といわれている。

また大町市の南部、社地区については、昭和54、55年度岡田地籍、56年度宮本の一部、57年度曾根原地籍、58～60年度に宮本地区を以って終了する計画である。

社地区の対象面積は189ヘクタール、対象農家戸数は368戸、総事業費9億円（当初計画）とされている。

大町、平、社地区の全体計画では、対象面積は321ヘクタール、農家戸数は722戸総事業費13億8千7百万円に達する大事業である。これらの地域では、水路や幅員4mの農道が野登の目的のように整備され、水田一区画はほぼ3,000㎡（3反歩）に区画される。

こうした事業とともに、かつての地形や、水田の機は一変する。大小無数にあった小せぎやあぜ道は姿を消すことになる。

なお事業費負担の区分は、国庫45.0%、県費27.5%、地元（農家）負担27.5%となっているが、地元負担のうち、9.5%ほどの市補助があるので、農家負担は18%ほどにあたる。

そこで、これらの事業に伴って、開発地域内での埋蔵文化財緊急発掘調査が実施されることになった。発掘調査には市独自の組織が持たないので、緊急発掘調査団を組織し、同調査団に委託して調査事業を遂行している。

(1) 三日町米見原遺跡緊急発掘調査

昭和52年10月発掘調査に着手。出土遺物は2～3世紀の弥生式土器、9～10世紀とみられる須恵器、土師器、鎌倉期とみられる灰釉陶器など69点ほどの出土にとどまった。住居址と思われる遺構が1カ所検出されたが、対象地区をややはずれるため調査するにはいたらなかった。

(2) 三日町分水遺跡緊急発掘調査

昭和53年5月3日発掘に着手したが、途中で一部地域が圃場整備対象区域から除外されたため、調査は小範囲にとどめ中止した。土師器と須恵器の小片が一片ずつ出土したのみであった。

第1章 調査状況

(3) 借馬遺跡緊急発掘調査

昭和54年5月3日着手、同8月20日終了。南北100m東西60m、6000㎡を全面発掘。竪穴住居址10(5世紀後半2、8世紀前半4、9世紀4)建物址4、溝状遺構1、河川址1、欄状遺構1などを確認した。出土遺物は弥生式土器片1、土師器109個体以上、黒色土器7個体以上、須恵器173個体以上のはか砥石など石器3、刀子など鉄器7、獣骨少量などで、土器片はおびただしい量にのぼった。

調査結果によれば、5世紀から9世紀にまたがる長い年代にわたって営まれて来た集落の一部とみられ、次年度発掘地域への広がり注目された。

2 借馬遺跡緊急発掘調査団

発掘調査にあたっては、圃場整備事業に伴うものについては、昨年度と同様に、長野県中信土地改良事務所長と大町市長との間で、また開発事業農具川河川改良工事に伴うものについては大町建設事務所長と大町市教育委員会教育長との間でそれぞれ委託契約を締結、さらに各受託者は借馬遺跡緊急発掘調査団長と再委託の契約を締結し、同調査団によって発掘調査が実施された。

調査団は篠崎団長を含め10名が当たったが、遺構遺物、自然科学、写真記録、測量の各分野をそれぞれ調査員が分担した。調査団の編成は次のとおりであった。

借馬遺跡緊急発掘調査団

団 長	篠 崎 健一郎	(長野県考古学会員)
主 任	原 田 曠	(長野県考古学会員)
調 査 員	森 義 直	(大町高等学校教諭)
"	白 井 潤	(社小中学校教諭、大町市文化財調査員)
"	荒 井 和比古	(白馬中学校教諭、)
"	松 倉 豊	(白馬北小学校教諭)
"	平 林 潤 郎	(松川村教育委員会)
"	荒 沢 進	(御山光測舎、大町市社会教育委員)
"	三 根 生 茂	(御山光測舎)
調査補助員	丸 山 鈴 加	

第I章 調査状況

B地区については4本のトレンチ(総延長255m)中から竪穴住居址とみられる遺構1などが検出された。

A～Bを結ぶ中間地区については、鹿島川の氾濫による厚い礫層の台地を形成しており、遺構・遺物は皆無であった。

② 調査区域の設定

試掘調査の結果をふまえ、昭和54年11月15日、県文化課、中信土地改良事務所、大町土地改良区、市教育委員会の四者により、現地において調査区域の設定を協議。A地区については南北約200m、東西80mの区域、B地区については、南北30m、東西25mの区域を発掘調査対象区域と設定することにした。

(2) 発掘調査の経過

① 借馬遺跡A地区

昭和55年3月16日及び22日の両日、調査団会議を開催。作業日程、調査の方法等現地踏査も交えて協議。上土除去は後続する作業を予測し、対象区域の全面について行うこととし、検出面の削り出しによる廃土については、ベルトコンベヤーによる効率化を採用することとした。

3月24日から31日までの間、ブルドーザー、ベルトコンベヤー、電気設備、作業員確保等々の準備に着手。4月2日、A地区北部西南隅よりブルドーザーによる上土除去に入り、6月6日までの期間、延べ66日間をついやして調査が行なわれた。

この間、住居址33、建物址21、河川址2、溝址2などのほか、450以上のピットが確認され、おびただしい土師器、須恵器をはじめ獸骨等の出土をみた。

作業は上土除去に続いて、遺構検出のための削り出し作業、遺構全体図の作成、建物址の実測と写真記録、住居址の発掘、実測、写真記録、ピット掘下げと実測、写真記録等の工程が続いた。

この間、市内小中学校、史談会、諸団体等の見学会が行なわれ、A地区北部のほぼ全容が確認できた5月25日、市民を対象とした見学会を開いた。

A地区北部での発掘面積はほぼ南北200m、東西60m、約12,000㎡に及んだ。

またA地区北西隅に接する部分には、簡易水路が開けられていたが、5月4日同水路壁から住居址とみられる落ち込み4ヵ所を確認、土器片も採集された。この地区をA地区に含め、5月29日から6月18日までの21日間発掘調査を行なった。この間、住居址6、使途不明の池状遺構1をはじめ土器片多数の出土をみた。

この区域は水路北側の帯状の部分で、東西50m、南北10mの広さであった。

② 借馬遺跡B地区

B地区はA地区から北西に約500mの距離にある。この地区については後述する農具川河川改良工事地区の発掘調査と並行してすすめられた。

発掘調査は7月28日に始まり、8月6日までの10日間を要した。この間住居址1、建物址1、河川址1、溝状遺構1、ピット15などのほか、他の調査区には見られなかった、礫の集石が検出された。しかし、遺物の出土は少なかった。

③ 農具川河川改良工事地区

農具川(信濃川水系一級河川農具川)は、圃場整備事業の進捗に合わせて、下流から改良されているが、その改良部分はちょうどA地区東北すみ付近まで延びて来た。昭和55年度改良工事に先立って、その前年河川敷計画区域の表層が除去された。

A地区の調査が進行中の5月11日、この表層が除去された河川敷計画区域の東西40m、南北200mにお

たる広範な区域で、住居址とみられる明かな落ち込みが、数カ所にわたって検出された。付近には、カマドの石組に使用されたと見られる石や、20～30点の土器片が採集された。直ちに県文化課と協議し、その指示によって5月23日、大町建設事務所担当者の現地確認を得た。ひき続いて6月5日、県文化課、大町建設事務所、大町市教育委員会三者による現地協議を持った。これらの協議の後、この地区についても発掘調査に着手することが決定された。

発掘作業は、6月19日から開始され、8月8日までの期間、延べ51日間にわたって行なわれた。遺構確認のための削り出し作業はベルトコンベヤーにより効率化をはかった。

この間、弥生期1を含む住居址16、河川址1、ピット1などのほか、ヒスイの装飾品と思われる玉1を含む多数の弥生式土器、土師器、須恵器等の遺物が出土した。

3 発掘調査協力者

発掘作業には地元借馬の主婦の皆さんをはじめ、市民の多くの方々や、中学生、高校生の皆さんなどの協力をいただいた。また、地主の皆さんには事業の趣旨を理解いただき、快よく協力いただいた。この事業はこうした皆さんの熱心な御協力に負うところが大きい。御芳名を記し厚く御礼を申しあげるしだいである。(順不同 敬称略)

(1) 出土遺物整理員

東 よしよ 黒岩かほる 真島 公男 野々山敏三 小竹 礼子

(2) 発掘作業員

伊藤 真治 海川 晴江 小日向久子 伝刀 幸子 薄井志げ子 伝刀みね子 伝刀かよ子
海川 良子 新井ひろ子 伝刀 兼一 曾根原文平 海川 公子 下田 大樹 山崎 正樹
田崎 晴彦 丸山 満枝 越山 功 北川 浩郎 海川 清子 堀内 正博 山崎 清茂
矢口 通利 山岸 和夫 平林 辰治 西沢 政敏 内山 博 飯島 栄三 古林 康江
両川 太士 中牧三七雄 伝刀 好美 勝家 徹二 高山美代子 丸山 英子 丸山 寿樹
荒沢 由紀 合津 和博 大日方寿二 遠藤 小織

大町高等学校社会科学クラブ

清野 勉 平林 盛人 大西 元晴 奥田 孝一 矢口 泰 島田 宏 太田 哲夫
望月 英司 三枝 直子 丸山 京子 中村 暁子 山岸 洋一 西沢 幹雄 古沢 慎俊
宮沢 恵子 小林 忠誓 大川 淑美 平林 和明 吉沢 鎮彰 北原 誠 宮沢 明
丸山 敏夫

大町北高等学校社会クラブ

国村ゆかり 小林 宏子 北沢 克彦 松田 透 中村 勇 石原 明 松本 達雄
栗林 武生 合津 聡 松島 国久 伝刀 文子 小野沢ハレル 川上恵理子 土屋 一男
宮沢 徳康 中嶋 辰郎 中島 保年 今水 順一 宮田香穂里 古沢 未佳 長谷川みゆき
太田 朱美 傘木紀久子 小林 勝利 両川 幸子 山崎由佳里 宮沢 弘典 浅原 誠

豊科高等学校地歴部

清水 和史 齊藤 京子 甲斐沢まゆみ 胡桃さよ子 山田 陽子 丸山 敬明 山下 泰永
松山 浩

第1章 調査状況

大町仁科台中学校郷土研究部

伊東 昇	井上 泰一	小布施光利	西沢 和保	矢口 浩	長谷川 豊	古畑 健一
滝原 裕	降旗 清	篠崎 公治	城取 信彦	高島 秀樹	奥原 雅	栗林 邦広
森島 賢一	鮎貝 悟	西沢 精一	細川 圭子	奥原 俊幸	田中 伸治	青沼 親男
大日方 勉	北沢伸一郎	黒岩 良彦	斉藤レデシリア	竹村佳代子		

白馬中学校

横田 敏郎	横川 一喜	工藤 秀洋	山岸 弘司	松沢 文二	中野 邦彦	内川 昭夫
花沢 国樹	藤沢 剛	山田 武正	柏原 廣子	津滝たか子	津滝英里子	篠崎 智子
山田 山子						

(3) 地 主

小日向一信	松村 幸平	遠藤 大八	小林 定男	金原 大八	坂井 重辰	小林 貴幸
傘木 秀省	杉谷 茂	小日向重雄	中村 文男	西沢 悦一	宮坂 学	遠藤 直澄
中村 千晴	松田 一三					

第3節 発掘調査の方法と発掘区の設定

1 発掘調査の方法

借馬遺跡の発掘調査は平地区農業基盤整備事業による全面破壊に伴う事前の緊急発掘調査であり、工事着工前に記録保存を目的として行なうものである。できるかぎり精密な記録化が望まれた。契約段階においては発掘設定区域の10分の1を調査予定面積として、トレンチ方式により実施する予定であったが、その後調査団による再度の検討を重ねた結果、契約範囲内での全面発掘をめざすこととした。しかし、この全面発掘については発掘設定区域があまりにも広範囲なためと時間的制約および労力の制約などさまざまな事情から、表土のみならず、中近世包含層も機械による除去作業にたよらざるをえなかった。また農具川河川改良工事地区については、調査設定区域外のこともあり農具川河川改良による表土除去工事が終了後、遺構が検出された地区のため、破壊されているものが多かった。

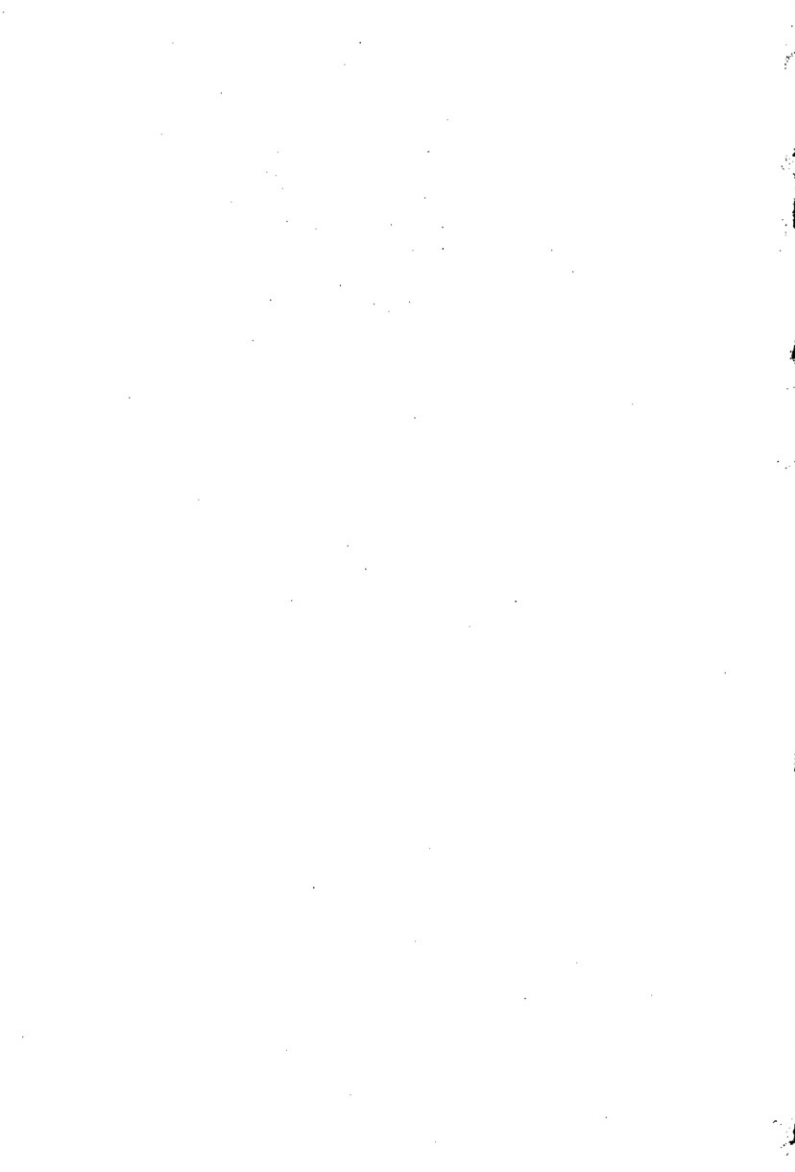
測量の方法については、発掘調査区域内については、10m間隔の方眼に区切り、各方眼をさらに1m間隔の方眼に区切った。その各方眼を基準として測量したものと、スタジア測量によるものを重ね、点検しながら用いた。全体区については、オフセット測量によった。測量の基準点は昨年発掘調査区との関連をもたせるため、昨年の最終点 110を本年度の基準点とした。レベルについては統一基準を設けた。絶対標高は大町市都市計画図の水準点を利用し、750.01mとした。方位は磁北を用いている。

2 発掘区の設定(図1)

発掘区の設定については、昭和54年度に実施されたA地区南部の緊急発掘調査の結果、遺構の分布はかなり広域にわたっているとみられたため同年の発掘調査終了後A地区からB地区の間東西 150m南北 500mについて試

掘確認調査を行なった。そしてA地区については東西80m南北200mの間に遺物の出土と遺構の検出がなされた。B地区については30m四方の水田一枚分についてのみ、遺物の出土と遺構が検出できた。A地区からB地区の間は微高地を選択し試掘を行なったが礎の山で、遺物も遺構もみあたらなかった。その結果に基づいて本調査団では、A地区北部について東西80m南北200mの区域を発掘調査区と考えたが、盛土地の関係もあり東西60m、南北200mを発掘区とした。B地区についても盛土地の関係から、東西25m南北30mを発掘区として設定した。

しかし、試掘確認調査区域を外ずれて農具川河川改良工事地区と、簡易水路部に遺構が検出されたが、時間的制約、労力的制約等さまざまな事情から、表土除去工事後に検出された遺構のみを発掘調査することとし、それ以上発掘区を拡張するには至らなかった。



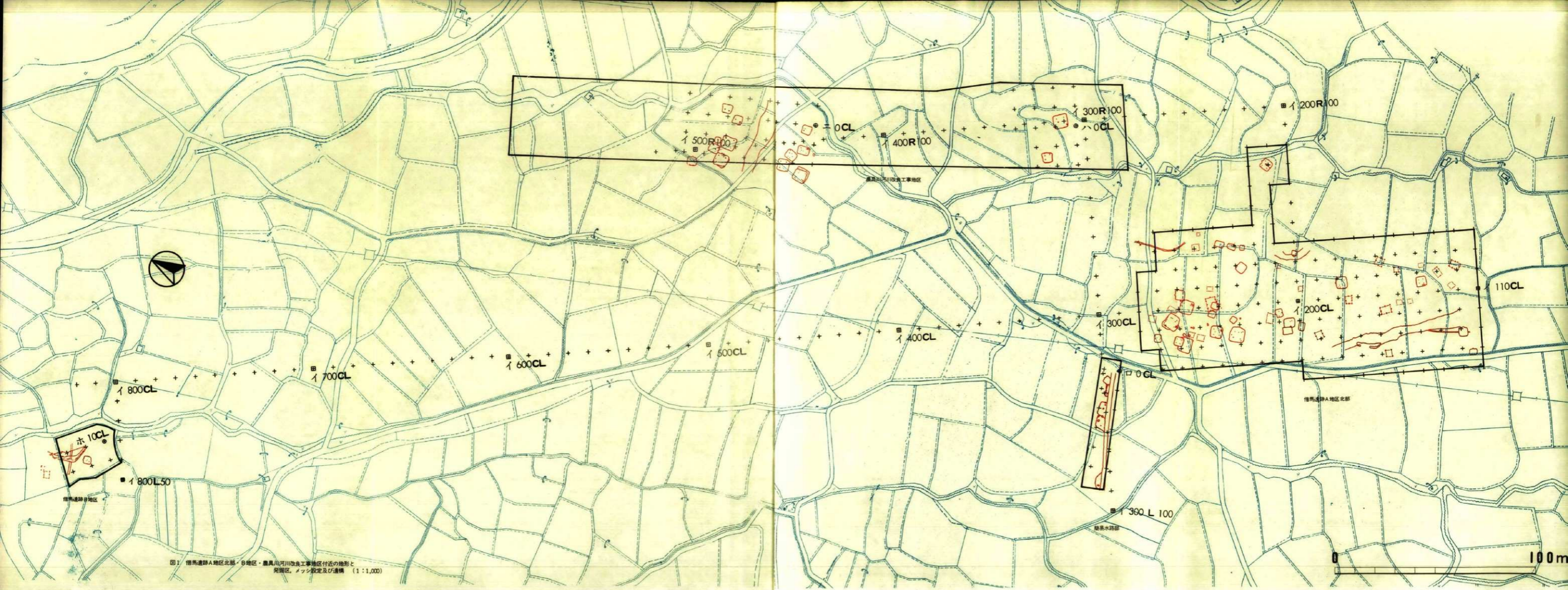
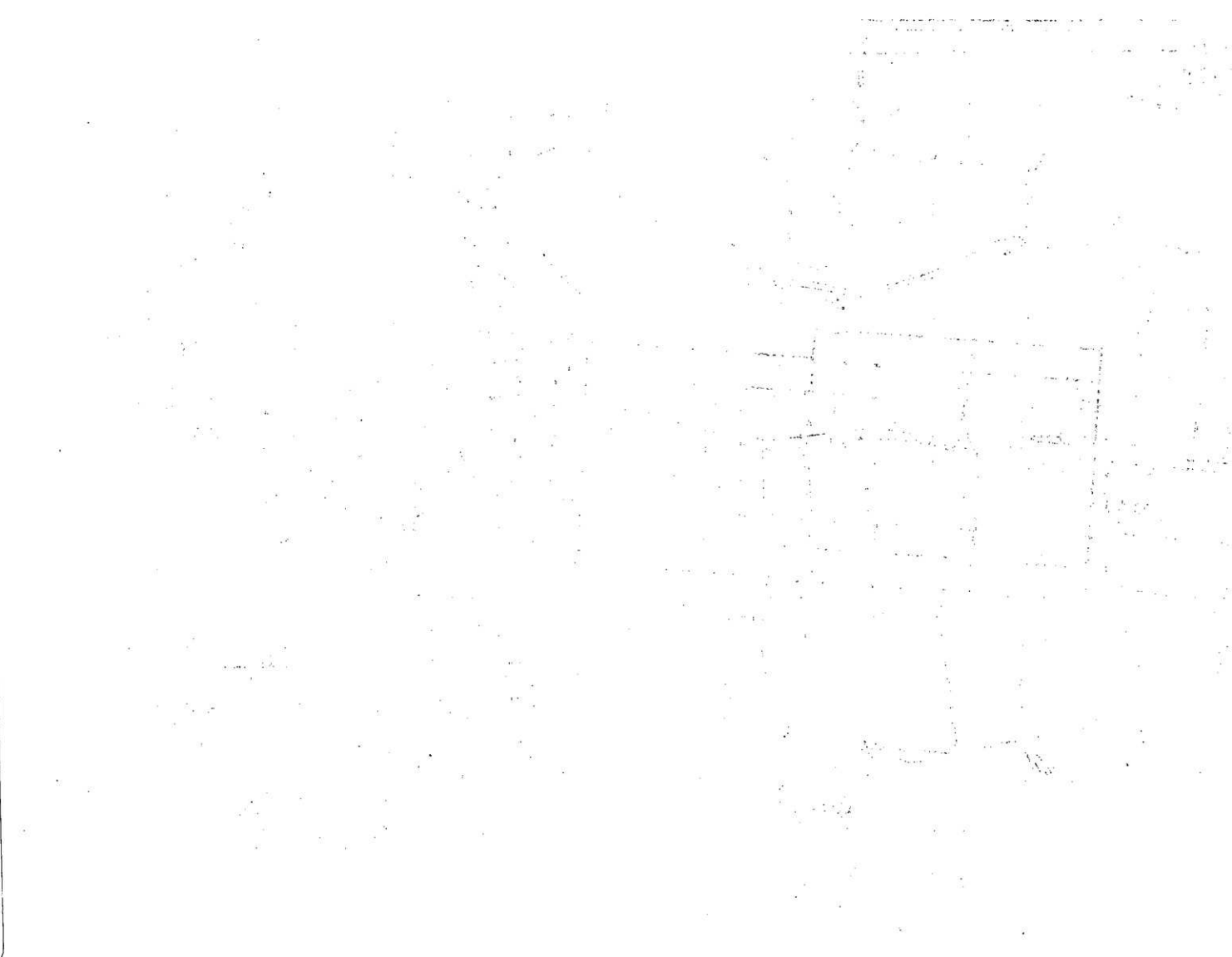
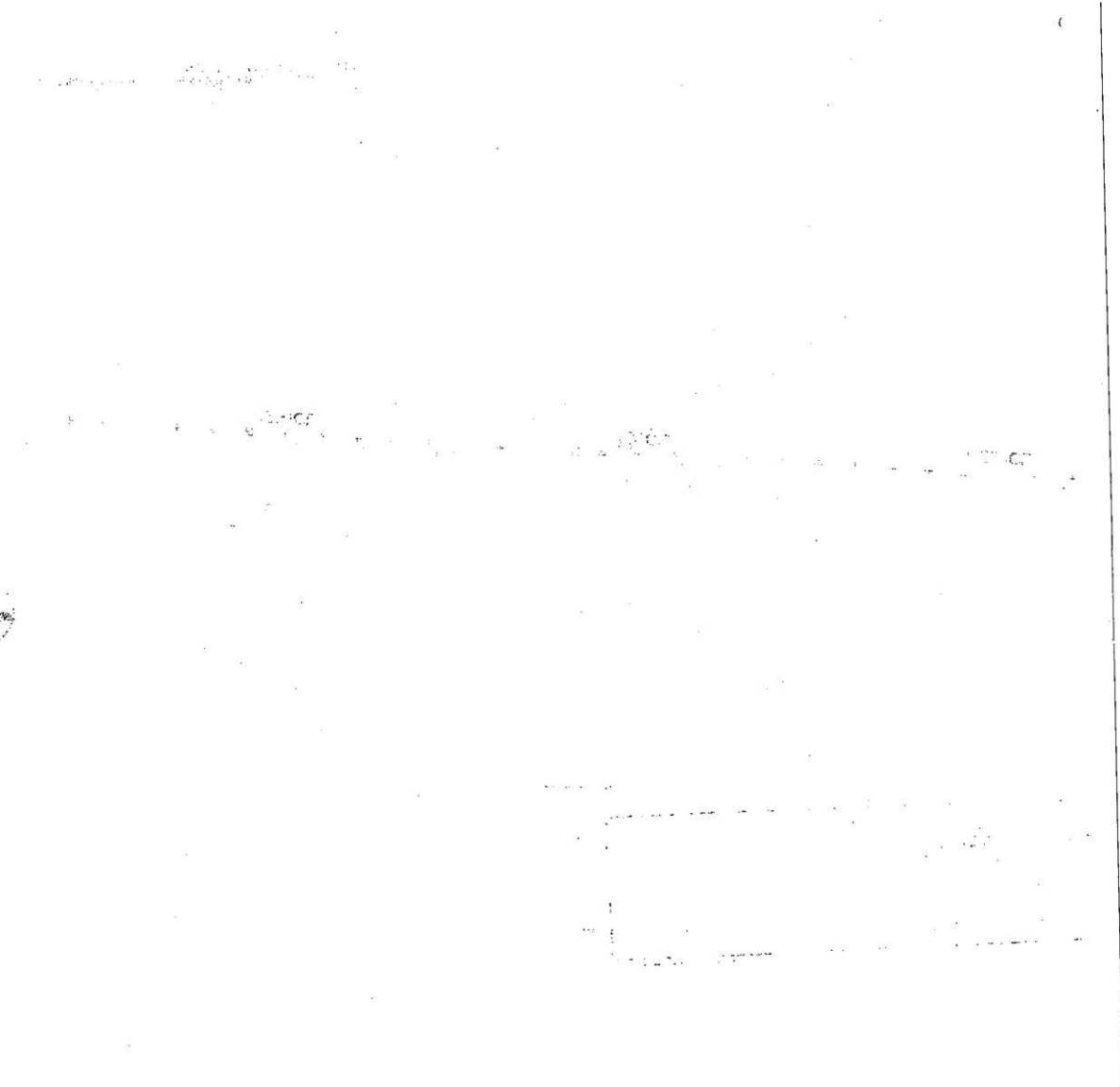


図1 信馬連静A地区北部・B地区・黒川川改修工事地区付近の地形と
 発掘区、メッシュ設定及び遺構 (1:1,000)



第II章 借馬遺跡の概要

第1節 農具川流域の遺跡

仁科三湖とよばれる青木、中綱、木崎の三つの湖を結び、木崎湖から流出して東山の段丘下を南流し、社小学校下で高瀬川に合流する農具川は、四季を通じての流量に変化が少なく、灌漑用水として、古来において利用されて来た。鎌倉前期、仁科氏によって大町の町割が行なわれる以前、弥生時代、古墳時代から中世にかけての集落が、この流域の平坦地に、かなりあったことが近年調査の進展するにつれてわかってきている。大町市の西方が扇状地帯で、しばしば氾濫にあうこともあり、礫層におおわれ、古代の稲作には不向きであったと考えられるのに比べて、地味もよく、居住に適する段丘もひろがり、古代の稲作の適地であったといえよう。対比するならば、西方は縄文の世界である。

1 縄文時代の遺跡

縄文時代の遺跡の立地は、木崎湖周辺の湖岸段丘、小扇状地、山麓などであり、農具川の流れている低地にはない。時代は早期から後期に及ぶ。当時の主な生活手段は狩猟採集と考えられるが、そのうち木崎湖や農具川、その他の小河川での川魚漁は、かなり重要な部分を占めていたものと思われる。

2 弥生時代の遺跡

農具川流域および東部山地から流出する支流の流域には、湿地帯やそれに近い状態のところが多い。このような地域は弥生時代人がまず水田として利用したところである。また段丘上の微高地も利用されている。いまのところ発見されている弥生式の遺物は後期のものばかりである。

3 古墳時代以降の遺跡

弥生時代の遺跡がほとんど東山山麓の段丘上に分布しているのに対し、古墳時代以降の遺跡は多く段丘下の農具川の近くにまで分布しているのが目立つ。しかし社地区以南の段丘地帯においては、依然段丘上に多い。段丘下が高瀬川の氾濫原であり、稲作にも居住にも適地ではなかったからであろうか。

4 農具川流域の古墳

農具川流域は古墳時代の遺跡が多いことを裏書きするように、木崎湖周辺に一群、農具川流域に一群の小規模ながら古墳群がある。

(藤崎健一郎)

表1 農具川流域の遺跡一覧

No	遺跡名	所在地	旧石器	縄文				弥生	古	奈良・平安			中・近世	備考	
				草	早	前	中			後	晩	中			後
1	中道	大字平字海の口北村4342						○							
2	南入日向	〃海の口崩沢17512			○										
3	下海道	〃海の口一津12988			○	○	○								
4	一津	〃海の口一津				○									
5	山の上	〃稲尾11875				○									
6	下の池	〃稲尾			○										
7	山崎神社境内	〃山崎				○									
8	下畑	〃森10490			○	○									
9	城	〃森			○	○	○		○	○	○				
10	森湖底	〃〃				○	○								
11	鬼塚古墳	〃〃							○						
12	狐穴古墳1号	〃〃							○						
13	狐穴古墳2号	〃〃							○						
14	コボレ沢	〃山崎			○	○	○	○							
15	羽黒山	〃借馬				○	○								
16	トチガ原	〃〃			○			○							
17	狐久保1号墳	〃〃							○						
18	狐久保2号墳	〃〃							○						
19	とどめき	〃借馬6290外									○	○			
20	追分	〃借馬7379												○	
21	借馬A	〃借馬五郎宮外							○	○	○	○	○	○	
22	借馬B	〃借馬はんの木									○	○			
23	大林	〃借馬			○										
24	かしわくずれ	大字大町字三日町分水									○	○	○		
25	あれぼ	〃〃									○				圃場整備 煙滅
26	清水	〃〃									○	○	○		煙滅

No.	遺 跡 名	所 在 地	旧 石 器	縄 文					弥 生		古 墳	奈良・平安			中 ・ 近 世	備 考
				草	早	前	中	後	晩	中		後	土	須		
27	下分水	大字大町字三日町分水			○											
28	米見原3号墳	〃 三日町米見原								○						
29	米見原2号墳	〃 〃								○						
30	山の神古墳	〃 〃								○						
31	米見原	〃 〃							○	○	○	○	○	○	○	一部 煙滅
32	山の神	〃 三日町大笹								○						
33	あま池	〃 〃			○											
34	あま池古墳	〃 〃								○						
35	大笹古墳	〃 〃								○						
36	麓松寺山	〃 山田町		○	○											
37	樋 沢	〃 樋 沢				○										
38	丑 平	〃 丑平			○			○			○	○				
39	丑 館	大字社字丑館							○							
40	長 平	〃 松崎			○			○								○
41	梨の木平	〃 〃														縄文時期 不詳
42	所 窪	〃 〃														〃
43	北 堀	〃 〃														〃
44	古 城	〃 〃				○			○		○		○			
45	遣ばた	〃 常光寺							○		○	○	○			
46	中城原	〃 館之内							○	○						煙滅
47	久保北組	〃 〃							○							
48	久保中組	〃 〃									○					
49	前 畑	〃 丹生子			○											煙滅
50	二本松	〃 岡田														弥生 時代不詳
51	北 谷	〃 〃								○						
52	山 寺	〃 〃												○		

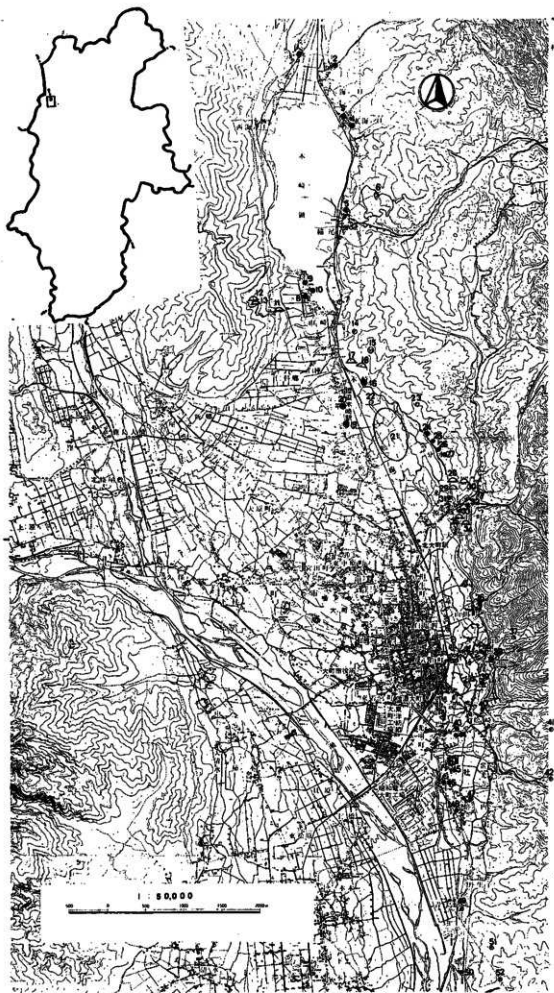


図2 扇貝川流域の遺跡 (1:50,000)

第2節 遺跡の位置と環境

1 借馬遺跡の位置(図2)

借馬遺跡A地区は、大町市の中心街から北へ約3.5kmの通称借馬たんぼとよばれる水田地帯に広がる。この地域は遺跡から約3.5kmへだてた西を南下する鹿島川の扇状地の扇端付近にあり、東にはゆるやかな東山の山並みが500mの近さに望むことができる。

やや北西2km先には、仁科三湖の一つ、木崎湖がある。湖からは、水量に変化の少ない豊かな農具川が、遺跡の東縁を南下する。東にゆるやかな山並を背にし、西南方に明るく開けた土地である。

借馬遺跡B地区は、A地区の北西約600mにあり、東山はさらに近づく。また、農具川河川改良工事地区の遺跡は、借馬遺跡A地区東北すみに接し、北に続いている。これらの両遺跡ともに水田地帯である。

2 借馬遺跡の地形、地質、環境について(図3・4)

本遺跡付近の地形、地質については昨年度の報告書「借馬遺跡I」と重複する部分が多く、その部分は、要点のみを記すにとどめる。

この付近の地形の形成は、高瀬川を本流とし、北側から北窩沢・尾入沢・籠川・鹿島川などの支流が流入して、安曇野の主要部をなす高瀬川扇状地をつくっている。この高瀬川の大沖積扇状地を被覆する形で北から鹿島川扇状地、籠川扇状地、乳川扇状地および神戸原が互いに合流扇状地をなしている。遺跡はこのうちの、鹿島川扇状地の扇端付近にある。

鹿島川扇状地は長さ約8kmで「ねこはな」付近を扇頂部となし、扇端は、南は市街南部から北は木崎湖に達している。鹿島川は水量の変化が非常に激しく、堆積物は砂礫層と砂層の互層をなしており、何回も洪水を繰り返してきた荒れ川であったことを物語っている。この西から東へ伸びる鹿島川扇状地の扇端付近を、農具川が直角に北から南へ流路をしばし変えながら切って流れている。

農具川は青木湖から流出し木崎湖を経て東部山地の粘土化の進んだ第三紀層の崖錐を削りながら鹿島扇状地の扇端付近を南流する河川であるが、青木湖・木崎湖がダムのお働きをするので鹿島川とは反対に、水量の変化の少ない安定した河川である。

以上、本遺跡付近は、基盤をなすものは、高瀬川の堆積物であるが、それを鹿島川系の火成岩(酸性岩)からなる礫と黄褐色砂土の互層が覆っている。遺跡付近は、この鹿島川系の黄褐色をした砂礫層と、粘土化の進んだ農具川系の埴土や埴壤土が混ざり黒褐色の漸移層を作っている。さらに、漸移層の上には漆黒色土や表土など農具川系の堆積物が乗っている。しかし漸移層より上の農具川系の堆積物中にも、鹿島川系砂礫の薄層をはさみ、しばしば洪水に見舞われたことを物語っている。地形は昨年度発掘地点と同様、南西方向にゆるい傾斜をなしている。

(1) 柱状図について

第1層……表土とその床土(床土に Fe_2O_3 赤褐色の沈着物が入ること多し) 黒色土

第II章 借馬遺跡の概要

第2層……黒色土で有機物の分解物を多く含み湿っていると漆黒色を呈す。昔の水田または、沼地性の農具川系堆積物

第3層……漸移層で下部は灰黄褐色で上部にいくにつれ黒褐色に変化するなど、多様に变化しており、本遺跡の大部分の生活面が存在する。

第4層……基盤をなす黄褐色砂・礫層で鹿島川系の堆積物である。堅穴住居の床面は、この層まで掘り込んである。

○各層共、はっきりした境界を示さないことが多く、漸移している。また、地形により当時の微高地付近は、第2層を欠く場合が多い。

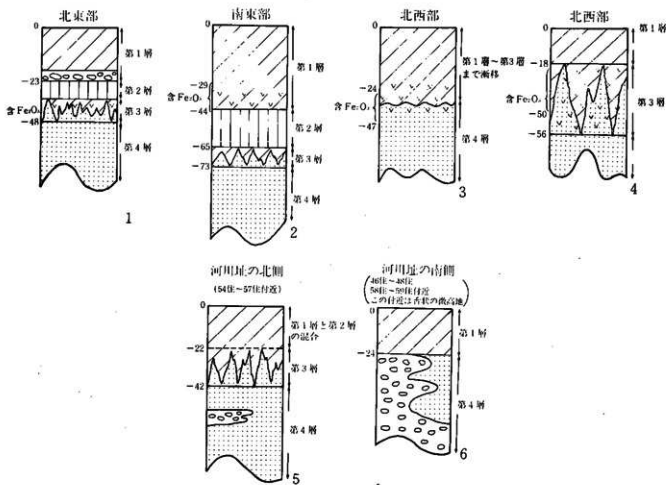


図3 借馬遺跡の土質柱状図 (1,2,3,4 A地区, 5,6 展具川河川改良工事地区)

(2) 一般的土層分布の概要

① A地区について

○東半分は1、2、3、4層共に厚薄の差はあるが存在しており、特に南東へ行くに従って各層共厚くなる傾向がある。

住居址建物址Noで言えば

11、13、14、16、17、18、19、21、22住居址、6、7、8、9、10、11、12、13、14、16、17、18、

21、23建物址

○西半分は微高地のため第2層を欠くか、もしくは第1層と混合している。第3層も著しく変化している。住居址、建物址は上にあげた東半分以外のものが該当する。

○簡易水路部(38~43号住居址付近)

第1、第2層が厚く第3層(漸移層)は欠くか極めて薄い。

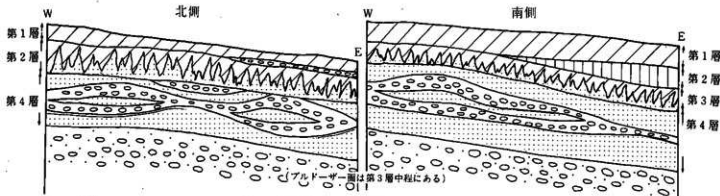


図4 借馬遺跡、A地区地質概念図

② 農具川河川改良工事地区付近について

○ 河川址3の北側 54~57号住居址付近

第1層と第2層が混合して分離できず(第2層を欠く可能性もある)第3層は暗褐色

○ 河川址3の南側 46~48、58~59号住居址付近。第1層、第2層、第3層の混合土で分離できず(地形上第2層を欠く可能性も大)

③ B地区付近について

○ 河川址の西側の微高地、60号住居址付近

第1、第2、第3層の区別なく全体で15~20cmしかない。全体を第1層とし、その下に第4層がくると考えられる。

○ 河川址付近は第3層中に白い砂礫層(旧農具川系)が存在する。

(3) 地層と遺跡、遺物の関係

一番下の第4層中には遺物は全くなく、大部分の住居址の床面は、この層まで掘り込んである。

第3層中に遺物が集中し、大半の住居址の生活面が、この層の形成された時代に相当することを物語っている。第2層中の遺物は第3層より少なく、しかも下部に多く存在していた。第2層中には遺構は確認できなかった。建物址の柱穴中の土質も注意したが多くは第3層と同質であり、土師器の破片を伴うものもみられた。昨年度発掘地点のように洪水による礫層をはさむ所が、張り出し地区に一部みられるのみで「鍵層」を欠くが、昨年度との対比で第3層が古代、第2層は中世が中心で下部は古代にかかり、第1層は近世以降と考えられる。

(4) 古代の地形と環境

竪穴住居が営まれていた当時は、第3層の漸移層が堆積しつつあり、西南に緩く傾斜した微高地でその南には昨年発掘した住居址群のうち、古いタイプの住居が点在し、その間を旧農具川とその支流が流れ、一部に用水路も作られており自然環境は一応整っていた。また、鹿島川扇状地の北縁に近く、しかも

第II章 借馬遺跡の概要

微高地のため洪水の直撃を受けにくかったものと推定され、これは堆積物が証明している。植物相については、住居址の床面や炉址から出土した、おびただしい炭化物よりナラ、クリ材が圧倒的に多く、その他カエデの仲間、サクラの仲間、ケヤキ、その他の落葉樹となっており、針葉樹はアカマツやヒノキの仲間、カヤ、その他樹種不明の針葉樹1種類で、しかも、いずれも量的には少なかった。以上の炭化材の比率は、即当時の住居址付近の植物相であったとみられる。

なお、微高地に続く東南の低地に厚く堆積している黒色土とそこに存在した横に對をなす人の足形模様は、水田が存在した可能性を示すと云える。

(森 義 直)

第 III 章 遺構と遺物

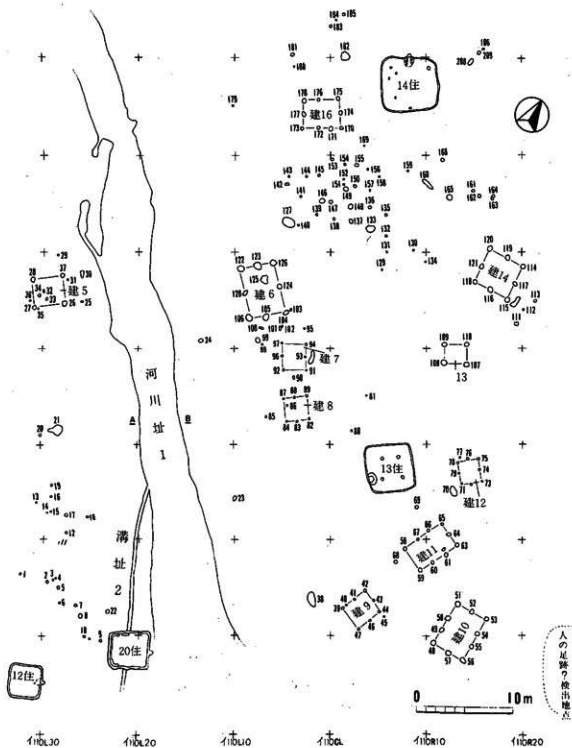


図1 埴馬遺跡A地区北部南半分全景 (1:400)

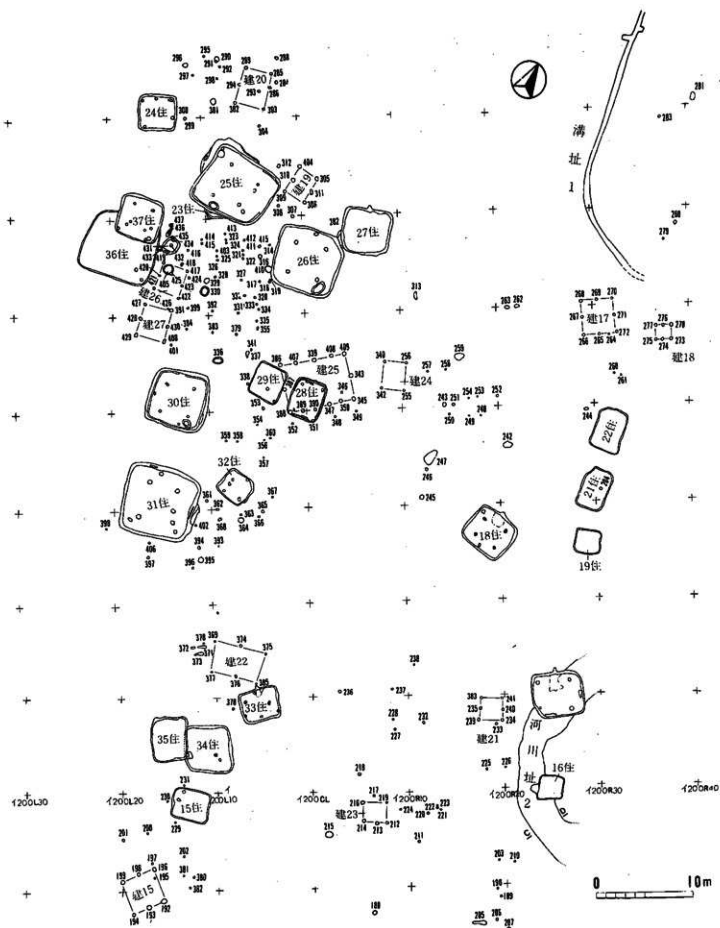


图2 信马道A地区北部北半分全景 (1:400)

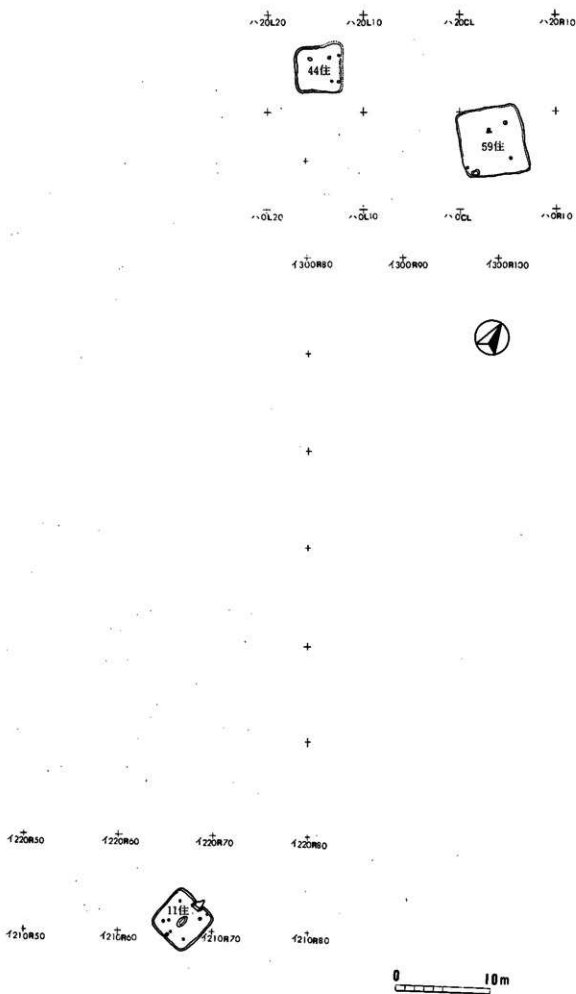
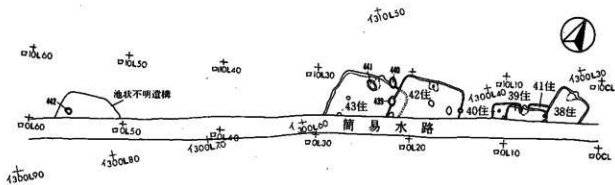
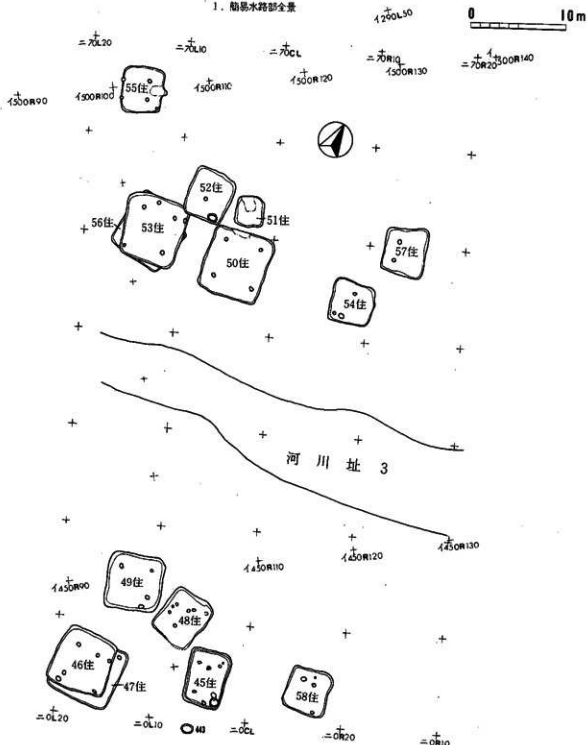


図3 借所遺跡A地区北部東側と農具川河川改良工事地区南部全景(1:400)



1. 簡易水路部全景



2. 農具川改良工事地区北部全景

図4 農具川河川改良工事地区北部全景と簡易水路部全景(1:400)

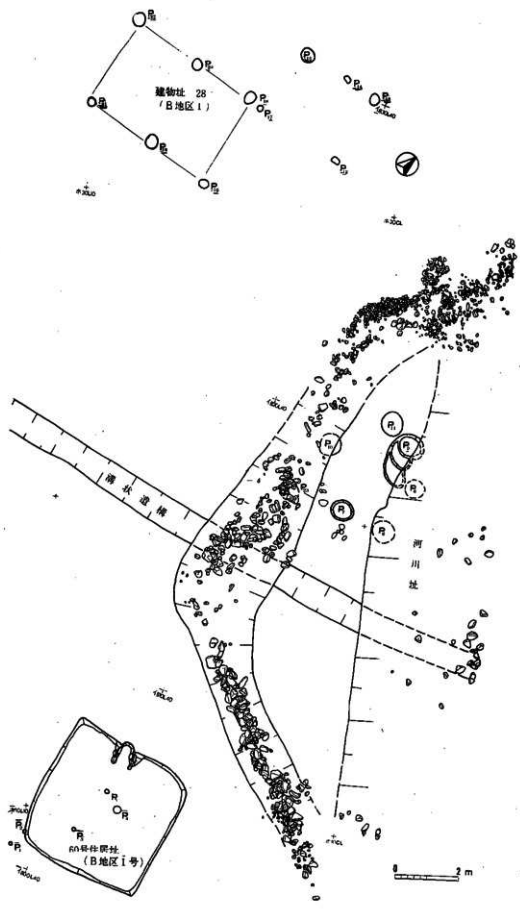


图5 僧馬遺跡B地区全景 (1:120)

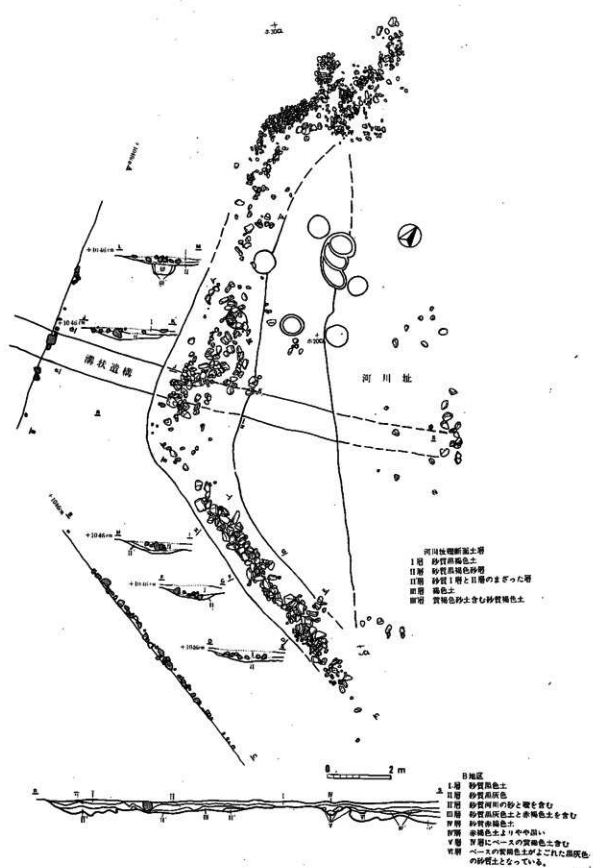


図6 借馬遺跡B地区河川址・礎・溝状遺構 (1:120)

第1節 竪穴住居址と

竪穴住居址出土遺物

借馬遺跡からは、昨年発行した『借馬遺跡Ⅰ』で報告の5C後半から8C中葉、9Cにあたる10軒の竪穴住居址に続き、本年新たにA地区北部に27軒、B地区で1軒、A地区北西角の簡易水路が作られた部分に6軒、その後追加して調査することになったA地区東側に北に向かって工事の進められた農具川地区から16軒、計60軒が検出された。各竪穴住居址内の堆積土層と保有された遺物等から判断し、各住居址の営まれた時期は大むね6期に大別できることが明らかになった。その第1期は3Cにあたり、45号住居址が該当する。第2期は5C前半から中葉を前後する時期にあたり、15・23・24・25・26・29・30・31・32・36・37・46・47・48・49・53・54・56・57・59号住居址が該当する。第3期は、5C後半から6C中葉を前後する時期にあたり、13・27・34・35・38・39・40・41・42・43・44・52・58号住居址が該当する。第4期は6C後半から7Cにあたり、16・18・19・33号住居址が該当する。第5期は8Cにあたり、11・12・14・17・50・60号住居址が該当する。第6期は9C以降を一括して一つの期にし、20・51・55号住居址が該当する。その他21・22・28号住居址については、保有された遺物が僅少なため、時期の決定はできなかったが、大別された5期のいずれかに属するものと思われる。

いずれの住居についても、第3層中もしくは、第2層下面より第4層(II-回3)まで掘り込められているものとみられるが、全面発掘をめざし調査を進めた関係上、第4層上面まで機械力により、上土を除去したため、各住居址の検出土層を確認することはできなかった。しかも、追加調査地区となった農具川地区では包蔵地としての認識が無く表土除去工事を進めたため、住居址の床面直上まで削り取られているものが大半であった。

なお、借馬遺跡出土土器のうち竪穴住居址出土土器には、弥生式土器、土師器、黒色土器、須恵器、施釉陶器、土製品などがあげられるが、整理作業の時間的な制約があり、今回最も特徴的と見られた14・45号住居址については、でき得る限りの実測図、土器観察表を載せることができたのみで、他の各住居址については、代表的なものの報告にとどまらざるを得なかったため、これらの出土土器の分類は残念ながら報告することができなかった。

1 第1期

(1) 45号住居址(図7・8・9、表8・9、写真23・24・61)

遺構 55年発掘対象地域より北北東約150m程離れた農具川地区に発見された北の14軒の竪穴住居址群の中に位置する。この14軒の住居址群の中央には、東西に幅8~10mの河川址3か横切っており、この河川を隔てて、北に8軒の一群、南に6軒の一群と分けられている。45号住居址はこの南の一群の東より2軒目にあたる。

すでに表土を排除する作業によって上部が砂壌され、住居址を検出して発掘作業に入るや、すぐに床面が現われ、遺構全体を正確に確認し得ないのが残念である。住居は北ないし北西から埋没したと考えられ、砂質褐色土(Ⅲ層)の流入に続いて、砂質褐色土含褐色土(Ⅱ層)が大きな部分を占めて流入している。このⅡ層と共に床面に北西隅より住居中央部にかけて砂礫、拳大の礫が、50cm幅のやや曲りくねった列状に流入しているのが認められた。このⅡ層の上に住居址の南面にゆくに従って深く、少量の褐色土を含んだ砂質黄褐色土(Ⅰ層)が覆っていた。

プランは南北6m、東西4.2mで、西方・南方にやや張り出した長方形である。南北の軸はほぼ真北をさすが、磁北より12'ほど西に傾くと計測される。

壁面は垂直に近いが前述のように上部が表土と共に除去されているため、深さは不明で、特に、東壁部分は大きく削りとられていた。

床面は粘土状の粒子の細かい土で貼り固められ、すこぶる堅い。壁ぎわは中央部より軟らかい。床面の形状はやや凹凸があり、壁ぎわに10cm前後の周溝がめぐらされている。住居址の中央よりやや北寄りに埋壺炉が埋り込まれており、周りから焼土が検出された。埋壺炉は、南北50cm、東西40cmの楕円形の深さ15cm程の楕形に掘られ、17cm×10cm程の石3個と拳大の石3個でまわりをかため、箱清水式の壺の胴より下半分ともう一種類の壺約半個体分の土器片を重ねて作ったものである。

床面のピットは、柱穴と思われるP4・P5・P6が30cm程度の円形で、P3が50cm×40cmと楕円の4つの穴が認められ、南北3.1m、東西2.1mの幅で位置もよい。その他、P6の北東約40cmに小さなP7のピットがみとめられる。また南壁の周溝にかかって縦60cm横40cm程で深さ10cm程の変形したP2と、住居址南東隅の壁ぎわに直径90cmに及ぶ円形で深さ25cm程のP1が見られた。

遺物 表土と共に上部が除去されていて、層別の確認はできないが、残された床面だけでも遺物は比較的多く、特に周溝内や、ピットの中から多く出土している。

45号住居址の遺物のきわだった特色の一つは、その多くが赤色塗彩されていることであり、もう一つは形がある程度似た、仮称土器片製品が、確認されただけでも40個体出土したことである。

まず、中央北寄りの埋壺炉からは2個体の壺が重ね合わせられ、炉が形作られていた。一つは、上部を欠いた壺(?)であるが、腹径が、34cm程の大きな壺の一部である。底径は9.1cmで、上方に大きく屈曲しながら開いた部分の器高は14.5cm程で上部を失っている。薄手の弥生式土器で全体に石英あるいは水晶の大粒の結晶が目立つ。外面は明褐色であるが、底より約12cmの胴部のはり出した部分より上の外面は赤色塗彩がな

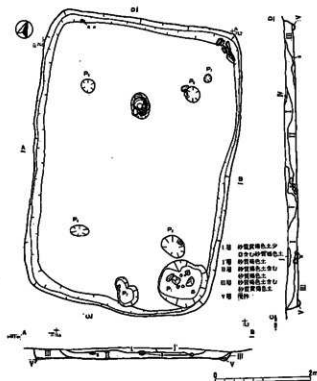


図7 45号住居址 (1:80)

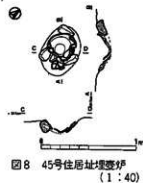


図8 45号住居址埋壺炉 (1:40)

されている。外面胴部の下半分までは横にヘラミガキをしているが、それより下は、底にかけて縦のヘラミガキが見られる。内面は黄橙色であるが、剥落が顕著で、荒く梅けずったがごとく凹凸しざらざらになっている。

炉の内のこの壺の上部に重ねられたもう1種類の土器片は、北西隅の周溝の中から出土した遺物の部分と合わせて1個体の壺(1)となる。この弥生式土器の壺は胴部のみで頸部より上と、底部の大部分を欠くため、全体を確定できないが、復径は30cmにならうと計画される。やはり、胎土は石英の大つぶの結晶が目立つ。外面は橙色で頸部下に3cm幅の横縞の施文が見られる。施文部より下はヘラミガキされ、逆時計回転でらせん状

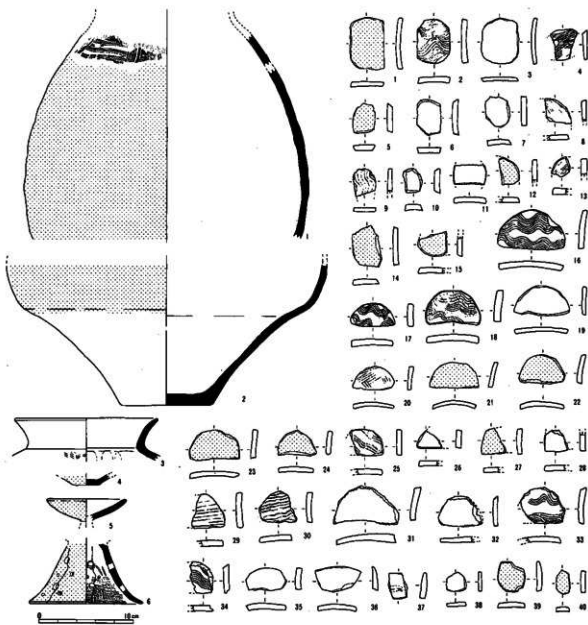


図9 45号住居址出土遺物(1:4)

第三章 遺構と遺物

に上方から底へ行ったものらしく見られる。文様は刷毛目の上に拵描で沈線され、文様部以外は全面に赤色塗彩がなされている。内面はにぶい橙色であり、横ナデであるが表面の剥落が激しくざらざらになっている。

この壺の一部分が出土したすぐ横、北西隅の周溝より高環の脚部(6)が発見された。底径が12cmあり、底部よりやや内へこみながら円錐形にのぼり、下から約6cmの高さで坏部と接合すると思われるが、その接合部の径が約4cmである。この脚部には透孔が見られ、孔径約7mmのものが上下2個1組で5単位ある。その透孔の2単位で縦に割れ目が入り、その割れ目を補修したものであろう径3mm程度の小さな孔が割れ目の左右に上下2対ずつ、計4個見られる。この補修孔は回転穿孔であるが、内面に未貫通孔2ヶ所が認められる。全体は橙色であるが外面は全面に赤色塗彩がなされている。外面の坏部との接合部分は横へラミガキであるが、脚部全体は縦へラミガキをし、末端部分で横へラミガキをしている。内面は脚部上半はオサエの後、ナデまたは軽いハケメをナデで消している。中半は横ハケメで逆時計回転でなされ、末端が横ハケメの後横ナデをしている。透孔は焼成前の穿孔と見られる。

P 7の中から出土した土器片は一つは壺であり、もう一つは高環の部分である。壺(3)は口縁のわずか一部であるが、口径は15.2cm頸部の径12cmと計測され、肩にかかる2cm程下より欠落している。外面、内面ともに明黄褐色である。口縁部外面は横ナデされ、頸部以下はハケメのあと縦にへラミガキされている。内面は口縁部に横ナデが見られる。

P 7から出土した高環の部分は、北東隅の周溝から出土した一片の部分と合わさって、約半ほどの環の部分形成する。脚部は不明で全体が不明だが、深さ1.8cm口径8.4cmと推定される小さな高環である。全体、暗赤褐色であり、内外共に横へラミガキがなされ、その上、内外全体に赤色塗彩がなされている。

あと、周溝内から出土した弥生式土器の壺の底部(4)は小さく、底径3.4cmと推定される。外面明褐色、内面は灰褐色で、胎土に褐鉄鉱、長石の混入が見られる。外面はへラミガキをし、内面はナデが見られ、これも外面が赤色塗彩されている。

45号住居の遺物で特徴的な仮称土器片製品であるが、これは土器片の周辺を打ち欠き、軽い研磨やしっかりした研磨を加え半円形、楕円形、隅丸方形等の形状に加工したものである。製作方法は、土製円板や、土器片縁に類似するが、確認されただけでも40個体及び、その形状は細部において皆異なる。用いた土器片は40個体とも堅い焼きで、赤色塗彩された土器片によるもの12個体、拵描形状文をもつ土器片によるもの9個体、ハケメをもつ土器片をもちいるもの5体となる。さらに類似する半円形のは、径が5cm~7cmの円を半円に欠いて研磨した大きさのものが多い。これらの製品の目的あるいは性格づけは留保せざるを得ないため、土器片製品として仮称した。

この住居の土器の破片は数多いが、赤色塗彩の片、拵描文様の片、刷毛目文様の片、また酸化焼成の片、すすのついた片が目立つ。中には3段のろくろ条線の入った環の一部なども認められる。

(荒井和比古)

2 第 2 期

(2) 15号住居址 (図10・11・12, 写真5・50・69-3)

遺構 A地区北よりの5C住居址群の南端に、少し離れてある3軒の住居址の南のものである。長軸方向を、ほぼ東西にする隅丸長方形のプランであるが、西部に於てやや狭くなっている。長軸は4.2m短軸は東辺で3.4m、西辺で2.8mの規模である。壁高は18cmと浅いが、これは本来のものではない。

第三章 遺構と遺物

遺物 甕(5)は器高15cm、口径15cm、胴径15cm、底径6cmの大きさと、暗褐色を呈する。胎土には砂をかなり多量に混入する。

器壁は、内外面ともおさえてあるだけで、その他の調整痕は見当たらないが、口縁部のみは内外面とも横ナデを行っている。

なお底部は上って糸底状となり、外面には木の葉のあとが残されている。大きさの割には底が広く、安定した形姿である。

坏(8)は口径16.5cm、器高8cm、まるく不安定な底部から器壁は内湾しながら立ち上り、碗状を呈する。色調は内外面とも灰褐色を呈するが、下部は黄褐色、一部に還元焼成による黒みがある。器の内部は中心部より上にむけてのケズリと、ヘラミガキ、上部の横ナデをしており、外面も上部を横になでている。

また底部は、砂粒のついた痕かと思われる小さな凹凸が多い。

(藤崎健一郎)

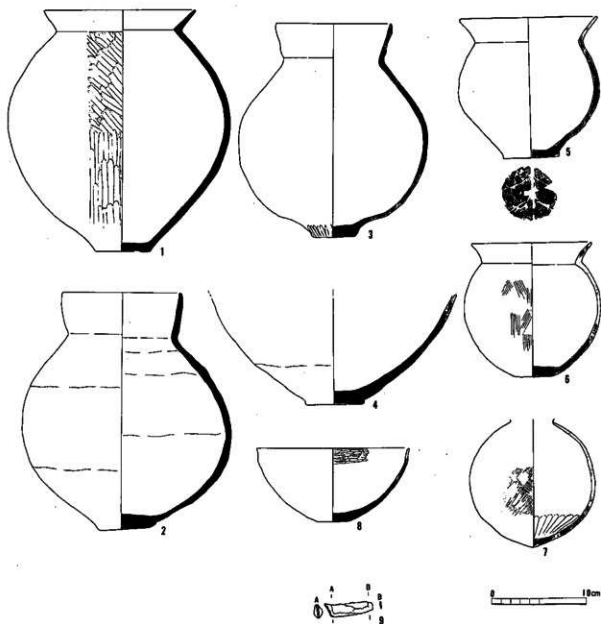


図12 15号住居址出土遺物(1:4)

(3) 23号住居址 (図13, 写真10)

遺構 A地区西北隅にある5C住居址群の北端に近く位置する、25号住居址に切られて北西隅のみが1mほどあらわれる住居址である。従って規模その他何もわからないが、さして大きな住居址ではないことが察せられる。見られる限りでは壁高24cm、床面はやや軟弱で、平坦なようである。周構は認められない25号住居址の床面の方が深く、23号住居址の床面との間に約8cmの段差がある。

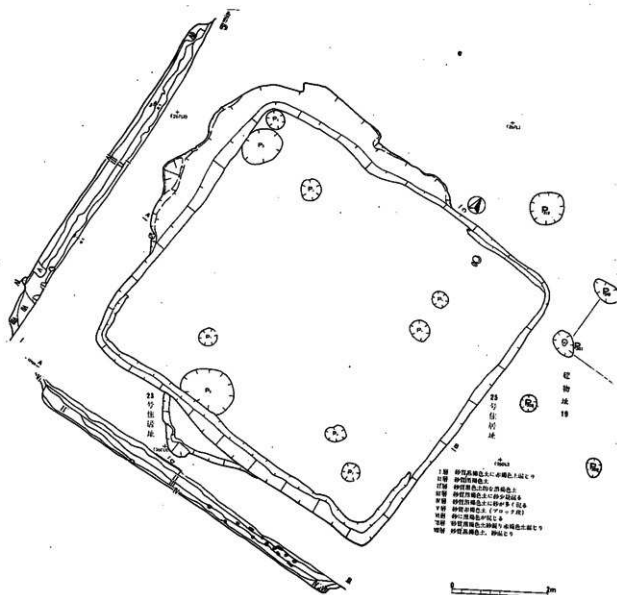
遺物 僅少の土師器片の出土があった。

(篠崎 健一郎)

(4) 25号住居址 (図13・14, 写真10)

遺構 23号住居址をほとんど覆うようにして作られている住居址である。長軸(東西)7.4m、短軸(南北)6.8mの隅丸方形である。壁高は44cmで南壁下部には周溝があり、東壁南部に1.5mほど、西壁南部に約1mほど延びている。北辺の中央やや東寄りから、西辺中央にかけては、壁の外側に棚状の部分があるが、どのような性格のものであるかよく判らない。

床面には、いく分凹凸がみられるがよくふみ固められており、柱穴とみられる5個と、やや大きいピット



2 (P1 P3), その他のピットが2つある。

住居址内中央より、やや西北によって 1.2m × 0.8m ほどの範囲に、2cm ほどの厚さに炭化物の堆積がみられた。住居址の火所とみてもよいであろう。

遺物 遺物は比較的多く、土師器の小さな埴(2)がある。

(篠崎 健一郎)

(5) 24号住居址 (図15・16・17, 写真9・53)

遺構 A地区の西北端に位置する小形の住居址。住居址の長軸方向は磁北より27°西に振っており、長軸(東西)4.4m、短軸(南北)4.3mの隅丸方形で、壁高は43cmである。

床面は平坦で中心部はよく固められ、周辺部はやわらかい。壁面に沿うようにして5つの柱穴があるが、西南隅のP5はやや大きく、東北隅のP3は変形している。周溝は認められない。

中央やや東寄りに、土師器の裏の大きな破片2点が、内部を上にし重ね合わせて浅いピットに埋めこまれており、まわりには配置されたかとも見える石もあり、炭化物もあるところからすると、ここが住居の火所であったと思われる。

遺物 この住居址の北辺には拳大から人頭大の礫が多量に流れこんでいたが、礫に混って古式土師器の姿を残す壺の口縁部や、弥生式土師の破片もあった。裏(3)は胴部以下を失っているが、おそらくずんぐりしたまるい品であると思われる。口径は13.7cm、胴径は約16cm、灰黒色を呈する。口縁はわずかに内湾するようにひらき、頸部は幾分ぼつたりと厚い。また頸部には継目が十分に消されないうで残る。内部には、カキメが斜方向に走り、口縁部だけが横ナデされている。外面も頸部から口縁部にかけて横ナデ、他の部分はなででない。

有段の口縁部(1)は前述のように礫の中にあつたもので、この住居址のものとは言い切れないが、この項にとり上げる。

口径19cm、暗褐色を呈し、胎土には砂が多く混入されている。口縁部は横のヘラミガキ、頸部には縦のハケメがあり、なお胴部の継目が十分に消されないうで残っている。外面も横ヘラミガキを行っているが、頸部の下辺には縦のハケメが残されている。口縁部は深くくびれた頸部から、鋭く外反して下方に向けた段を突出させ、さらにゆるやかに外反しながら、大きく開口している。器壁は厚く頑丈で、白馬村東佐野、白山城址遺跡出土の有段口縁の壺のいかにも薄く軽やかなのと対比せられる。

(篠崎 健一郎)

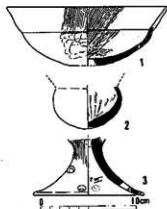


図14 25号住居址出土遺物 (1:4)

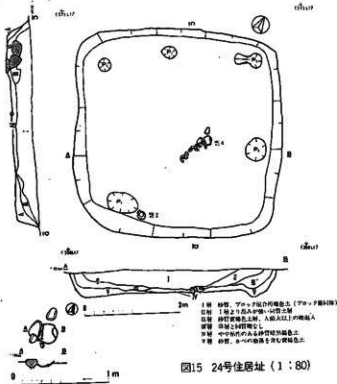


図15 24号住居址 (1:80)

図16 24号住居址埋没? 炉 (1:40)

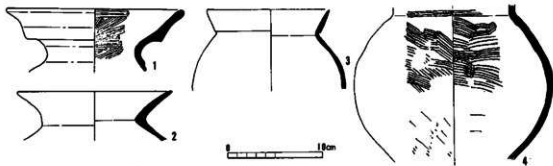


図17 24号住居址出土遺物(1:4)

(6) 26号住居址(図18・19・20, 写真11・54)

遺構 A地区の西北隅にある5C住居址群の東の端に位置する住居址で、6C初頭かあるいは5C末に属する27号住居址とは、不明の小遺構(P282)を共に切り合いながら、東北隅を接している。プランは隅丸方形であるが西北隅が少し角張った形になっている。規模は東西、南北とも6.7mである。

沓蓋による壁の堆積を切った住居址とみられ、床にも壁にも学大の壁がびっしりとつまっている点が、他の住居址と異なる所である。

床面はよくふみ固められ4箇の柱穴と、柱穴ではない、やや大型ビット(P5)がある。周溝はない。ほぼ中央には炉ともみられる配石があり、周辺が多少焼けている感じである。

南東隅の外部にはやや大きいか浅いビットがあるが、住居址を切って掘り込まれていた。

中央部及び北辺には土師器の破片が集中して5群検出された。

遺物 遺物として土師器の壺、高環、環がそれぞれ住居址中央および北壁に沿ったところから、一箇体ずつ、つぶれこんだ状態で出土している。

壺(1)は、北壁の下のP6に埋まるようにしてあったものである。

器高27.3cm、口径16.7cm、底径6.7cm、胴径24.6cm、胴がふっくらとふくらみ、頸部から口縁にかけて外反しながら開く形は、なかなかよい形姿である。頸部のつけ根は、胴部との境界がはっきりしており、その内部も段になっている。底部はやや凹み、高台になっているが、付けたり削ったりではなく、押えて作ったのであろう。

表面は黄褐色を呈しているが、一部にススの付着がみられる。胴部はヘラミカキを施し、頸部から口縁部にかけてはハケメ、口縁は横にナデで調整している。

内部は黒褐色を呈し、胴部には縦方向のハケメ、頸部は横ナデをしている。

壺(2)は住居址北東に近い床面から出土したもので、口縁部を欠いている。

現状での器高23cm、底径6cm、胴径22.5cmで、壺(1)よりひとまわり小さいが、似た形の壺であると思われる。ただ底が平底であること、頸部から口縁部にかけての外反がより大きいこと、頸部と胴部の境界がまるみを帯びていることである。

色調は暗褐色の還元焼成の部分と、明るい黄褐色の部分がある。

表面上部はミガキをかけているが、下半分は肌が荒れており、凹凸が多い。

内面も上半分は磨いているが、下半分にはハケメが主として横方向に残されている。



図18 26号住居址 (1:80)

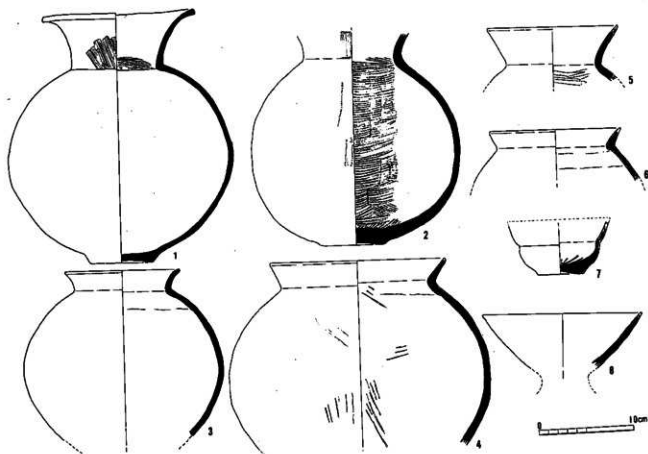


図19 26号住居址出土遺物1 (1:4)

小形壺(7)は口径部を失っているため口径部高は不明だが、短かく開く頸部の内側には、鋭い稜がある。

大ききの割合には器壁が厚く、殊に底部は著しい。口縁部を横ナテ、他の部分は内外面ともにナデて仕上げている。色調は明るい黄褐色である。

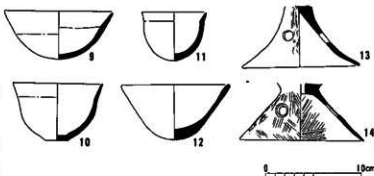


図20 26号住居址出土遺物2 (1:4)

坏(9)は口径11.6cm、器高5cmで、やや外反しながら開く頸部の内側には稜がみられる。

口縁部を横ナテ、他の部分は内外面ともに横ナテにより仕上げている。色調は黄褐色である。

(篠崎 健一郎)

(7) 29号住居址 (図21・22, 写真13)

遺構 A地区北辺の5C住居址群の中ほどに位置し、28号住居址に約1mの距離をおいてほぼ平行して並んでいる。長軸は南北に向いており、長軸4m、短軸3.2mの規模である。

上土の除去が深く、住居址の壁は12cm内外しか残っていないが、礎層を掘って作られた住居址と考えられ、床面には拳大の礎が多数頭を出しており、床面には凹凸が多い。

炉やかマドの施設はないが、三つ見られるピットのうち、P1が若干乾燥しているので、これが炉に用いられることがあったか考えられる。

柱穴の所在が偏っているので、屋外にあるP338とP353を考慮に入れて考えるべきであろう。

なお周溝は見られず、本住居址の東北隅を建物址25のプランが切りあっている。

遺物 出土遺物は少なく、しかも小さな破片ばかりであるが、土師器の高杯の皿の部分がある。(篠崎 健一郎)

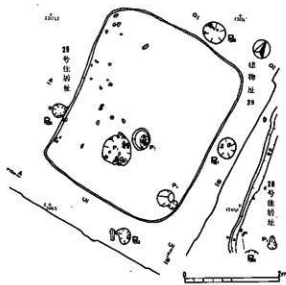


図21 29号住居址 (1:80)



図22 29号住居址出土遺物 (1:4)

(8) 30号住居址 (図23・24, 写真13・55・70)

遺構 A地区北辺の5C住居址群の中ほど、29号住居址の西に約4mほど離れてある中型の住居址である。

長軸の方向は磁北より20°西で、規模は長軸6.2m、短軸6.2mの典型的な隅丸方形である。現時点での壁高は40cmで、その直下に幅平均20cm、深さ10cm~15cmの周溝を、ほぼ四周にめぐらせている。また東部の周溝は礎が多いためか浅い。

床面は平坦で固く、この住居址の使用が長かったことを物語るようである。

床面には全体にわり灰、焼土、炭化物が散乱していたが、特に住居址の中心部分には、10cmほどの厚さに堆積部分が不規則な形で残され、またその端、住居址の中心より少し北に寄って、直径40cmほどの凹所がみられるところから、ここが火所であると考えられる。

柱穴とみられるピットは7つあり、そのうち1、2、3、4が支柱であるかと思われる。P5は長径1m、深さ40cmの大型で、柱穴とは考えられない。

遺物 出土遺物としては住居址の北辺から見出された大きな甕の口縁部4箇体分と、特異なものとして作業台として使用されたとみられる平たい石、磨き石のような丸い石がある。

土師器の甕(1)は短く外反する頸部と、細くがった口縁を持ち、頸部内面はわずかにふくらみと、あまり鋭くはない稜をもつ。

外面は口縁部を横ナデ、肩には縦のハケメ、胴部には斜方向のハケメが見られ、全面にススが濃厚に付着している。

内面は口縁部をヨコナデし、下の部分には押えたあとが見られる。

甕(3)は、内面にきちんとした稜をもち、カーブをえがきながら外反する頸部、まるい口縁部を持つものである。

外面は、胴部に斜あるいは横のハケメ、頸部に横ナデ、肩の部分をわずかに磨いている。

内面は横にナデているが、肩の部分は押えて頸の部分を着けている。

作業台と見られる石(0)は、長径24cm、短径18cm、厚さ約10cmの平たい不規則な形の灰白色の汚質砂岩である。出土した所は、住居址の中心より約1.5m南西に寄ったところである。

平坦な上面の中心には傘大の広さに多数の叩き痕があり、それを取りかこんで、五角形に似た形に細く浅い溝がある。溝の線は角のところでは交差しているが、この溝も叩打によって作ったものようである。

他に類例を見ないものであるがこの住居址の炭化物の多さや、床面に酸化鉄の浸透が多いことなどから推し、この石を作業台とみてあるいは鍛冶の作業場ではなかったかとも思われる。

(篠崎 健一郎)

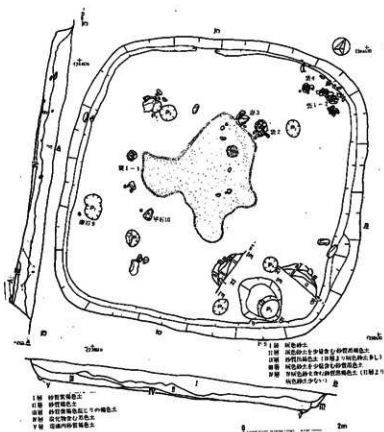


図23 30号住居址 (1:80)

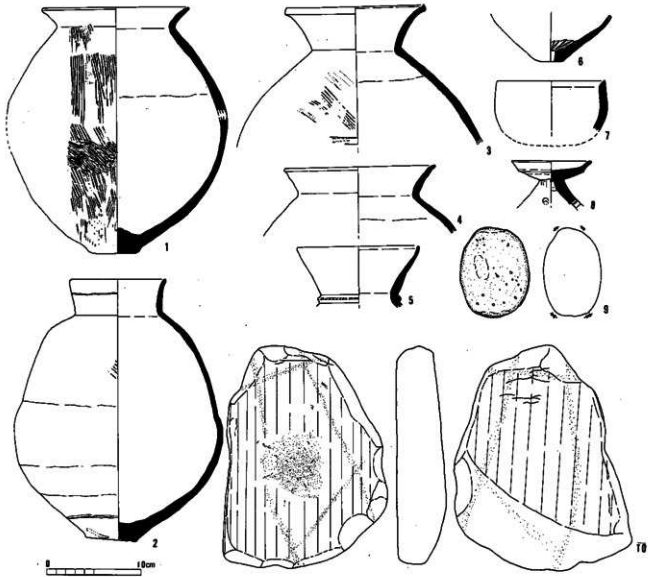


図24 30号住居址出土遺物(1:4)

(9) 31号住居址(図25・26、写真14・56)

遺構 この住居址はA地区北西隅にある。5C住居址群のほぼ中心にある。形状は東西を長軸とする長方形を呈し、東西7.9m、南北7.3m、壁高おおむね60cmと比較的大形である。壁面は北壁と東壁が緩やかな傾斜であるのに対し、南と西は急傾斜である。

床面は少し凹凸がみられるものよくふみ固められているが、壁面に近いあたりは、やや軟弱である。周溝はみられない。

カマドあるいは炉址といわれるような施設は見られないが、中央やや東よりの礎のある部分には、炭化物が多く見られたから、ここが火を使う場所であったかと想像される。

住居址内には8つの柱穴址が見られるが、このうちP2 P3 P5 P8が主柱で、あとは補助的な柱であろう。また住居址外にも5つばかりの小さい柱穴址がみられるが、この家屋に付属したものか考える。

竪穴内の埋没状態はVI層になっている。

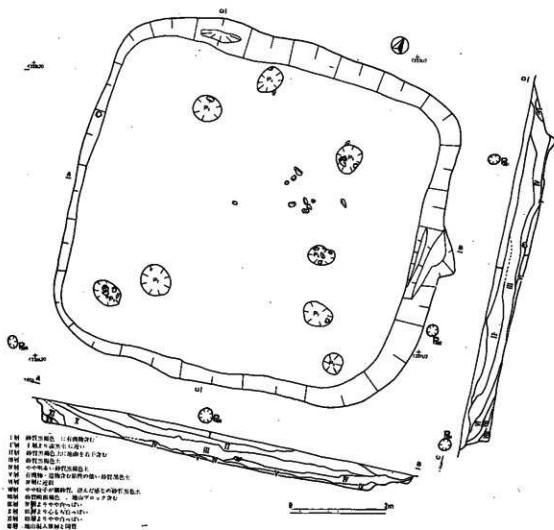


図25 31号住居址 (1:80)

遺物 出土品の中で注目すべきものは石器(4)である。チャート製で、ほぼ三角形を呈し長さ6.3cm幅4.2cmある。表面には一面に調整痕があり、裏面は剥離面を砥石のように使用したらしい。おそらく縄文時代のスクレイパーを拾得して、砥石に利用したものか考えられる。(篠崎健一郎)

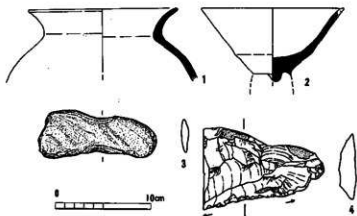


図26 31号住居址出土遺物 (1:4) 4 (1:2)

00 32号住居址(図27, 写真14)

遺構 A地区北辺の5C住居址群の南端に位置する小形の住居址で、すぐ西には大形の31号住居址がある。長軸の方向はほぼ東西であり、規模は長軸3.5m、短軸3.4mのおよそ隅丸方形であるが、東辺がやや不規則な形に張り出している。深さは現状に於て約10cmである。

住居址の東半分には礫が堆積しほぼ埋めつくしていた。床面の土は他の住居址に比べて黒く、さらさらした感じで、固くふみかためられており、平坦である。

周溝、切りあい等はない。

ピットは7つあり、しかも住居址の規模に比べて不釣合に大きいのが目につく。そのうちP5が若干焼けているので、火所かと思われる。なお東辺の張り出し部分の外に、楕円形のピットがあり、その中に細長い礫が一本入っているのが見られた。土師器の小片が堆積した礫にまじって出土している。

(篠崎 健一郎)

(1) 36号住居址(図28・29, 写真17・18・57)

遺構 A地区北辺の5C住居址群の西端に位置し、37号住居址とも切りあっている大形の住居址である。長軸方向は磁北より14°西、規模は長径6.6m、短径6.25mの隅丸方形であるが、ややゆがんで菱形に近い形である。深さは現状約30cm。周溝はなく北辺に2mほど37号住居址が、すっぽりはまりこむ形で切りこんでいるため、この住居址の北壁は消し去られていて不明である。

床面はよくふみ固められているが凹凸が多い。また酸化鉄の浸透で赤褐色を呈する。

住居址内には東南隅に近く2つのピットがある他、炉やかマドなどの施設は何も見当らない。

屋外施設と見るかどうかは検討を要するが、住居址の東辺に接するようにして、長径2mに近い大形のピットP433と、その南に長径1.2mのピットP405(このピットは建物址26号のプランの中にある)、さらにP433の北に接して、P437がある。

遺物 この住居址では土師器の甕および埴、坏の出土状態が特異である。

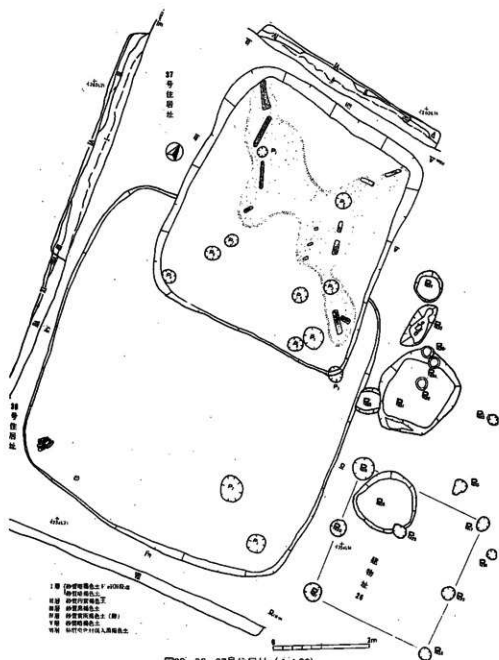
住居址西壁に沿ったところから、大甕の上半分を外側にして、直口壺の口縁部、埴、と大きい順に入れ子状になっており、その横には埴が一箇、底を上にして検出されたことである。

直口壺1は口径13.8cm、胴径24.2cmの大きさと内面にするといい稜をもち、ゆるやかにカーブしながら反する頸部と、とがった口縁をもつ、胴部がやや縦長になるかと推定される壺である。口縁部は内外面とも横ナデ、頸部は内面が縦にナデられている。外面は下から上にむかってヘラケズリをされており、その下部は調整されないうまま、ヘラの痕をはっきりと残す。肩の部分内面には、継目が、オサエの痕とともに残っている。

甕(2)は頸の短い、口径の大きいもので、肩の部分内面に指痕を残しているのが面白い。指痕は頸部と胴部を接合するときの押えの作業でつけられたもので、15ほどが認められる。いずれも口縁部から手を入れて押えたもので、2つあるいは3つずつになっており、中には指紋の見えるものもある。この指痕で



図27 32号住居址(1:80)



見る限りでは、その大きさからして女性のものという印象が強い。

埴(5)は頸部が短かく、わずかに内湾しながら外反する、灰褐色のものである。器壁は比較的厚く、底はまるく凹凸があり、横に少しはみ出したようになっている。内外面とも口縁部にヨコナデが見え、内面の下方にはカキメが縦に入っている。器高8.1cm、口径10.7cmの大きさである。

埴(4)はやや特異な形であろう。やはり厚手で灰褐色、胎土には砂が多い。まるい胴部の上端から、かなりきつい角度をもって内湾しながら外に開いている。

底部は厚い高台が付けられ、安定がよい。おそらく粘土紐を輪にして押えつけたものかと思われる。

埴(3)は、やはり高台を持つ小形の椀形に近い形である。器高4.9cm、口径8.0cm、底径4.8cmで灰褐色を呈する。表面は押えてあるが、凹凸が多い。内面は上部にヨコナデ、下方は器底から上方に向けて放射状にカキメがある。

数個の器を、入れ子のようにして置く保管上の習慣が当時あったかどうか、この一例だけで言うことはできないが、狭い家の中をいく分なりとも整頓して広く使うことは当時の人も工夫したと思われるし、このような保管のしかたも、そのひとつと考えられないこともないだろう。

その他にこの住居址からは、南西隅の床面に、7本の細長い(長さ20cm前後)石(写真18の4)が集積してあった。矢沢石とよばれる柱状節理による安山岩(この石は後世しばしばカマドの集成に使用された)もあれば、そうでないものもあるが、とにかく同じような長さや形のものばかりである。この石が何に使用されたのか証拠立てるものはないが、近年までの体験では俵を編むときオモリとしてこのような石を使用していたことから、当時もやはり同じようにして使われていたのではないかと推測される。

そういうオモリを使い、ワラや葦などを編んで敷物などを作る技術があったと考えられる。

(篠崎健一郎)

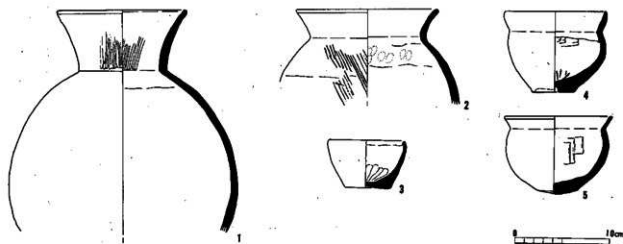


図29 36号住居址出土遺物(1:4)

(2) 37号住居址(図28・30, 写真18・58)

遺構 36号住居の北辺を切って、プランの約寸を36号住居址の中にはめこむようにして作られた住居址である。長軸方向は磁北より6°西とほぼ南北に向き長軸5m、短軸4.4mの隅丸方形に近い形ながら南東隅がすこし出張った形になっている。

36号住居址との切りあい関係は、床面がこちらの方が15cmほど深く切っている所からみて、37号の時期をより新しくみる事ができる。

床面は、よくふみ固められているが凹凸が多い。

柱穴は9つあり、そのうち1・2・4・8が主柱とみられる。

周溝、炉あるいはカマド、屋外施設はみられない。

この住居址の注目すべき点は、火災住居であるらしいことである。住居址の北西から南東にかけて、不規則な帯状に厚い灰、炭化物の堆積がみられ、その中に焼損した柱らしいものが13本横たわって検出された。そのうち最長のものは70cmに及ぶ。その多くは北西～南東に向けて倒れている。

遺物 この住居址の出土遺物の特徴はほぼ同形同大の増が3箇体出土していることである。

増(3)は器高10.4cm、口径9.4cm、暗褐色の器で表面は全面オサエ、内面口縁部はヨコナデ、胴部との結合部分にオサエ、下部にはヘラケズリ、口縁は直線的に外反し、内部には鋭い稜がある。

埴(4)は、口径9.6cm、器高8.4cm。口縁を除きほぼ全面還元焼成による黒色を呈する。頸部は比較的短く、外反する度合いもあまり大きくない。表面は頸部がハケメ、胴部はヘラケズリをおこなっている。内面は上部をナデ、胴部をオサエている。

埴(5)は、口径9cm、器高10.2cm、暗褐色の埴である。口縁部は僅かに内湾しながら強く開き、内面には鋭い稜がある。

表面は頸部にヨコナデ、胴部にナデが見られ、内面には頸部に横あるいは斜方向のナデ、下部には器底から上に向けてヘラケズリがある。

甕(2)は器高13.5cm、口径12.0cm、底径4.5cmの平底で暗褐色を呈する。埴に似た形で口縁部は大きく外反している。全体に粗雑な作りで凹凸が多く、内面には僅なカキメがあるものの、粘土の輪積のつぎ目が消されていない。

高坏(7)の脚部は細長い吊鐘状で、先端が短く開いて立つ形である。暗褐色の外表面はともかく磨いているが、内面には巻き上げた粘土の継目が全然消されなくて、そのまま残っている。(篠崎 健一郎)

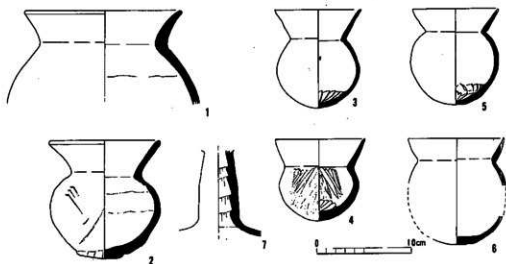


図30 37号住居址出土遺物(1:4)

(3) 46・47号住居址(図31・32・33、写真24・25・62)

遺構 農具川地区の東北100mほど離れた農具川地区に検出された一群である。5Cに属する住居址は西から東に流れていたとみられる河川址3をはさんで、北岸に当たるところに3軒、南岸に5軒、群の南70mの地点に1軒ある。46号住居址は南岸にある一群のうち西端にあり、47号住居址を切っている住居址である。

46号住居址は長軸方向を僅かに西にふっているが、ほぼ南北に向ける、やや東辺が広がる形の隅丸方形で南北6.3m、東西6.0mの規模をもつ。壁高は40cm。北壁と西壁は切っている47号住居址の北壁と西壁を、そのまま利用して作ったかのように、ほぼ一致している。

礎層に切りこんで作った住居址で、西壁や床面には拳大の礎が多く見えて、床面には凹凸があるものよく固められている。

カマドも炉も確認できないが、柱穴は5箇所みられる。

47号住居址は、46号住居址の下に切られた姿で、長軸は46号住居址よりさらに少し西にふり、北壁と西壁を合せたようにし、東と南に張り出している。46号住居址より一まわり大きい住居址である。規模は南北が6.3m東西は不明だが、推定7mほどの隅丸の長方形になるかと思われる。床面は壁際だけしか残っていないので全体の様子はいわからないが、礎が多く凹凸のある床面ではないかと思われる。ピットは北東隅に一箇だけあらわれている。

46・47号住居址とも周溝はなく、屋外施設も見られない。

遺物 46号住居址からは、高坏の脚部2箇体分が出ている。高坏(4)の1つは脚部と皿を接着したあとのへそが残っている。

47号住居址からは砥石の破片が出ている。

また、この住居址のものではないが、上層には弥生式土器片の流入が見られる。

(孫崎健一郎)

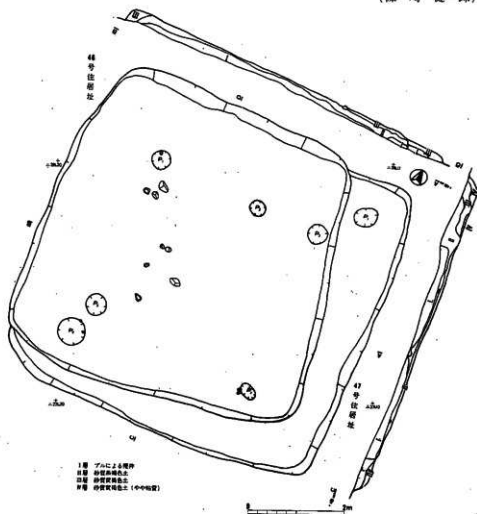


図31 46、47号住居址 (1:80)

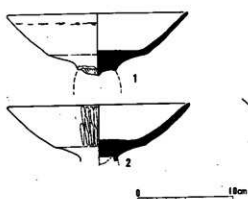


図32 46号住居址出土遺物 (1:4)

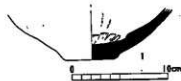


図33 47号住居址出土遺物 (1:4)

(1) 48号住居址 (図34・35、写真62)

遺構 A地区から東北に当る農具川地区に検出された、河川址3の南岸にある4軒の5C住居址中のひとつ。

長軸をほぼ真北に向け、同時期の49号住居の東北端とは約60cm、弥生時代後期の45号住居址とは約80cmの距離で、ほとんど接するようになっている。

長軸(南北)は5.45m、短軸(東西)は4.6mの隅丸方形であるが、東壁にわずかにまるい張り出し部のようなところがある。壁高は約40cmであるが、本来の高さではない。

礎層を切って作った住居であるので、殊に北壁は礎層そのまままで崩れやすい状態である。床面も同様で凹凸が多いが、よく固められている。

周溝もなくカマドもない。床面には柱穴とみられるピットが7箇あるが、並び方が不規則である。

遺物 比較的大形の高坏2個体分が出土している。

(篠崎 健一郎)

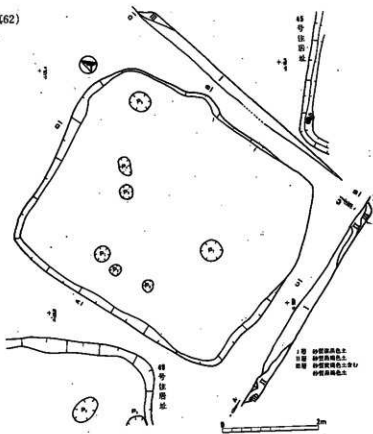


図34 48号住居址 (1:80)

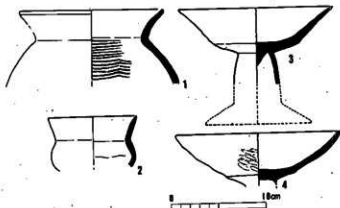


図35 48号住居址出土遺物 (1:4)

(15) 49号住居址 (図36・37, 写真63・69)

遺構 農具川地区にあった河川址3の南岸グループの最北端にあり、48号住居址に接している。

長軸を磁北より20°西に振っており、規模は長軸5.95m、短軸5.8mのほぼ隅丸方形である。壁高は40cm。

礎層を切って作った住居址であるため、西壁は崩れやすく、拳大の礎があらわれている。床面も同様で凹凸が多いが、よく固められている。周溝もカマドもなく屋外施設もない。

床面には5箇の柱穴があり、うち4つは住居の支柱の位置にある。

遺物 この住居址の特徴は、その出土遺物の多さとともに、他の住居と違う特異性にある。

甕(1)は、器高28.8cm、口径17cm、胴径24.8cm、底径6.2cmの、口の大きく開いたまるい甕である。口縁部は短かく、わずかなカーブをえがいて反り、先端は少しとがっている。頸部内面はするとい様になっている。

色調は全体が暗褐色で、ススの付着が多い。

表面は全体に斜方向にハケメが見られ頸部から口縁にかけてのみヨコナデを行っている。

内面は全面にわたってナデを行い、上部はきれいなヨコナデである。

底部はわずかにくぼみ、高台状を呈する。

埴(6)は器高9.5cm、口径4cm。底は平底で凹凸が多く、わずかに横に広がる形になっている。

色調は暗褐色で胴部から底部にかけてススの付着が見られる。

頸部から口縁部にかけては強く反りかえり、頸部内面には鋭い稜がみられる。内外面とも口縁部はヨコナデをしており、肩の部分はおさえた後、ヘラミガキをしている。内面は押えてあるが、一部にハケメが見ら

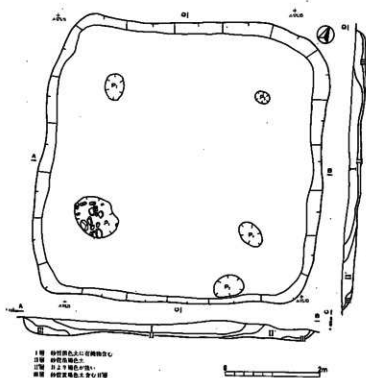


図36 49号住居址 (1:80)

れる。

本住居址からは借馬遺跡唯一の出土例である極小形の仮器(11)が出土している。いとも無造作に手でひねったかと思われる器高 1.8cm、底径 2.6cm、口径 3.2cm、凹凸の多い黄褐色の、いわば環の形といえようか。

埴(7)は、借馬遺跡の出土品中、形と言いや塗をしてある点と言いや異色のあるものである。

口径11.8cm、器高7cm、底部がまるく小さく、長い頸部と大きく開いた口縁部をもち、全面に赤色塗彩をしてある。器壁は極めて薄く、従ってたいへん軽い。一旦成形後よく削り、顔料を施した後に磨き、焼成したものであろう。

器壁の内外面に所々まるい、何かで突いたような傷があるのはどうい原因であろう。

ヒスイ(12)の玉は本遺跡の唯一の出土例である。

長径 12mm、幅上部4mm、下部6mm、厚さ4mmの稜のある不定形に磨き孔を開けてある。孔は一方が径約2mm、一方は径約1mmで少し斜方向ではあるが、極めてきれいにすばりと開けてある。色は少し白色の部分があるものの、大部分は明るく深い緑色を呈している。

このヒスイの玉、仮器、赤色塗彩の埴を見ると、この住居址に祭祀的な色彩を色濃くみる事ができるであろう。

(篠崎 健一郎)

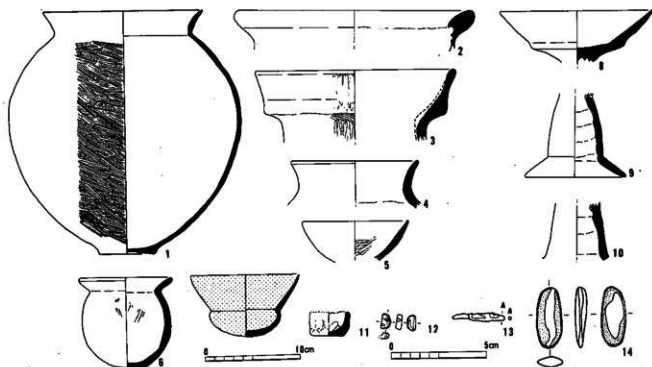


図37 49号住居址出土遺物 (1:4) 11, 12 (1:1.5)

(10) 53号住居址 (図38・39, 写真64)

遺構 農具川地区に検出された、一群の5C住居址のうち、河川址3北岸にある一群の西端にある中形の住居址である。

住居址の長軸は磁北より12°西の方向で、規模は長軸が6.6m、短軸が6.3mのおよその隅丸方形を呈

するが、東北隅は角ばっている。

また東北隅を52号住居址の南西隅が僅かに切っており、さらにこの住居址は56号住居址と切りあっており四壁の外に56号住居址の四隅があらわれているが、実はブルドーザーがほとんど床面まで削っているので切りあいの前後関係は不明である。

周溝、外部施設、炉あるいはカマド等はない。柱穴は6つあるが、56号住居址のものも混っている可能性がある。

遺物 南西隅の壁にそう所から高坏舞部その他の土師器が出土している。

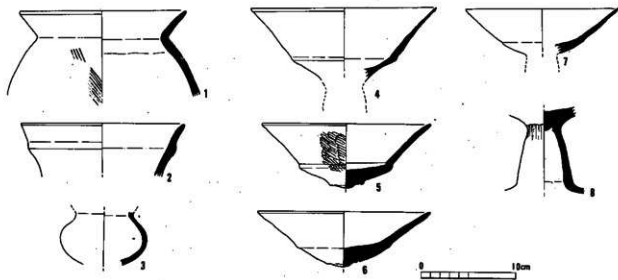
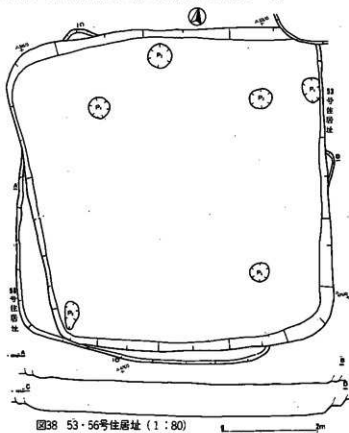


図39 53号住居址出土遺物 (1:4)

(17) 56号住居址 (図38・40, 写真65)

遺構 56号住居址は農具川地区で検出された竪穴で、53号住居址と切り合う形をとり、東西6.3m、南北6.9m程の隅丸長方形プランと考えられる。大部分は53号住居址によって占められているので遺構内部の状況は不明である。ただわずかに南壁と西壁の一部が知られる程度である。

遺物 遺物は土師器の埴(1)で、口径8.7cm、器高9.5cm、器厚4mmである。丸底で胴が丸く張り、小形ながら特徴を出している。この埴は53号住居址からの混入であるかは明確でない。もう一点は陶器の坏(2)の底部である。底は高台とし器厚が厚く、上縁部は薄く2.5mmとなる。白色地の内面に下部一面に鉛釉をかけてあり、年代的に相当下ることが考えられる。12C頃のものではないかと見られる。

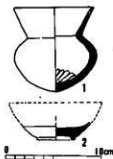


図40 56号住居址出土遺物 (1:4)

(原田 曠)

(18) 54号住居址 (図41)

遺構 農具川地区に検出されたもののうち、最北端の一群に属する小形の住居址である。

長軸方向は磁北より17°西、規模は4.7mと4.5mのおよその隅丸方形であるが、北西隅が出張しているのと、東辺も少しふくらんでいるため、不規則な形を呈する。深さは残存わずか数センチにすぎない。その上、床面をブルドーザーがふみつけているため攪拌されている。

周溝、炉、カマド、屋外施設等は見当らなかったが、床面に3つの柱穴は認められた。

遺物 出土遺物としては、土師器の小片が僅にあったにすぎなかった。(篠崎 健一郎)

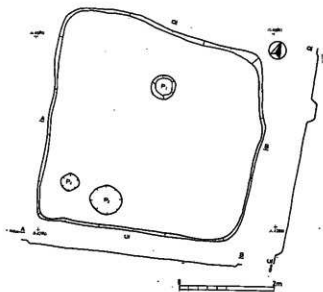


図41 54号住居址 (1:80)

(19) 57号住居址 (図42・43, 写真66)

遺構 農具川地区に検出された住居址群の最北端、東のはしにある小形の住居址。長軸方向は磁北より20°西で、規模は4.7m×4.5m北東隅と南東隅が少し張り出した、台形に似た形である。北半は辛うじて壁を残すものの、南半はブルドーザーによって床面すれすれに削られているために、辛うじてプランをうかがうにすぎない。

礎層に掘りこんで作った住居址で、床面には拳大の礎が頭を出し、従って凹凸が多いが、石のない部分の床は概して軟弱である。

ビットは2つ検出されただけで、果して柱穴となり得るかどうか疑問である。

周溝、炉あるいはカマド、屋外施設などはない。

遺物 主な出土遺物としては、高環上部、完形器台、環2点がある。

高環(3)は口径14.6cm、深さ約5.5cm、わずかに内湾する口縁の暗褐色を呈する上部である。

内外面ともオサエの上をナデて調整しており焼成はわるくないが、胎土には砂が多い。

器台(4)は口径10cm、器高8.5cm、底径11.8cm 脚部に3つの孔を持つ。脚部は大きく外反しながら開き、たいへん安定した姿である。上部には中心より少し片寄った位置に、径7mmのまるい孔があげられている。脚部の孔はいずれも径1cmで、外から内に向って、すっぱりときれいにあけてあ

る。

色は赤褐色を呈し、外面は、ハケメの上から磨いており、上部内面も同様である。脚部内面には、ハケメがそのまま残されている。

環(6)は口径11.8cm

器高4cm、平底の径3cm、暗褐色の比較的浅めのものである。口縁部は内湾しながら開き、わずかに碗形を呈する。内外面とも磨きをかけており、焼成はわりあい良好である。

環(5)は、口径12.5cm、器高5.2cm、底径5cm平底で底径が大きいため安定している。口縁部は外反しながら大きく開き、褐色を呈す。

焼成は比較的良いが胎土には砂が多い。外面はオサエ、内面には口縁部に横方向、下部には中心より放射状にハケメがある。

(篠崎健一郎)

(20) 59号住居址(図44・45・46、写真67)

遺構 農具川地区にある住居址のうち最南端にあり、5C住居址群より約70m離れて孤立する中形の住居址である。

長軸方向は、磁北より38°西で、7m×6.9mの規模をもつ隅丸方形である。

壁高は現状約10cm。礎層を据って作った住居址のため礎が床面に頭を出している。また床面の土は灰色の砂質土で軟弱である。

周溝、屋外施設はないが、この時期で唯一の例として、ここには埋燗炉がある。中央より少し北寄りの所に、径約50cm、深さ30cmの穴を掘り、その中に底をぬいた甕が埋めこまれていた。また甕のかたわらに接するように、住居址の床面に細長い石が置かれていた。

遺物 出土遺物は器台脚部、高環脚部、斐胴部が主なものである。

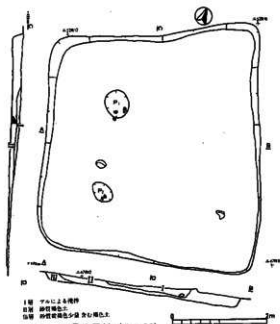


図42 57号住居址(1:80)

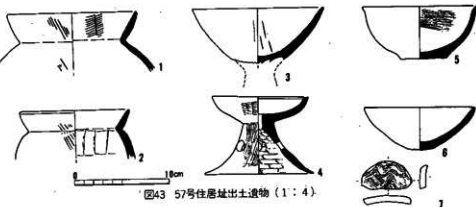


図43 57号住居址出土遺物(1:4)

器台脚部(6)は外反しながら大きく開き、ほぼ等間隔に3つの孔をもつもので、底径13.5cmである。上部には径1cmの孔が中心にあげられている。

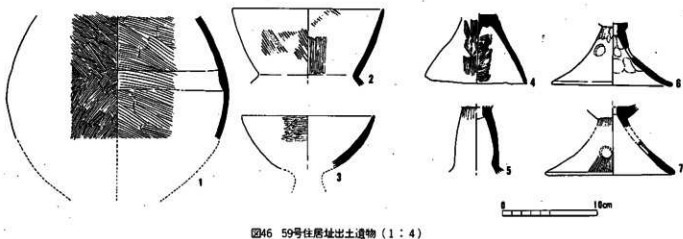
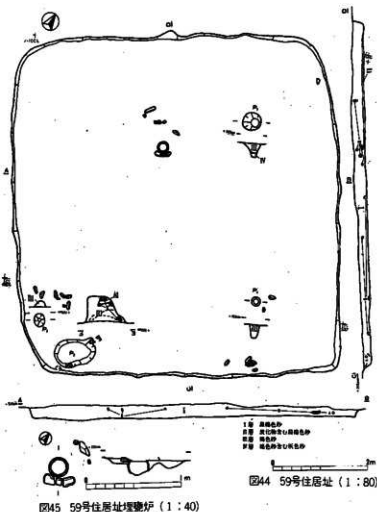
外面は細かいヘラミガキだが、頸部に縦のヘラケズリがある。内面には指頭による調整痕をのこし、下部はヨコナデを行っている。また上面は磨いている。

明るい赤褐色を呈し、粘土はきめ細かい挟雑物の少ない土を使用し、焼成も良好である。

甕(1)はまるい胴部だけのもので胴部の径は24cmである。淡黄褐色で内外面とも斜方向のハケメが全面にみられる。粘土には砂を相当量混入している。

埋燗炉として使用されていた。

(篠崎 健一郎)



3 第 3 期

5C後半から6C中葉を前後する間の住居址については、カマドを有するものと、そうでないものがあるが、カマドを有するものの資料が少ないため、本報告書ではこの間を一括第3期とした。今後この期の資料が蓄積され、細分化できることを期待する。

② 13号住居址 (図47・48, 写真48)

遺構 昭和55年度の調査に於て検出された竪穴住居址50軒のうち、5Cに属すると見られるものは23に及ぶが、およその分布を見ると、北部の農具川河川地区に7軒の1群、100mほど南方に位置するA地区北西隅に13軒の1群が認められる他は、いずれも孤立して存在することが知られる。54年度調査に於て検出された9号および10号の2軒は、調査区域の北辺にあることから、5Cの住居は調査された限りの地域では南方にそれぞれ孤立する三軒があり、北方に2群があったことになる。13号住居址は孤立する3軒のうち北端に当るもので、55年度調査区域の南辺より25mほどの所にある。

13号住居址は長軸方向を磁北より、40°西にとる隅丸方形のプランであり、長軸の長さ5.2m、短軸5m、壁高30cmの規模である。

床面は堅く固められているが周辺部はやや軟弱である。また中央部分は凹凸が多い。

周溝はなく、床面には長軸方向に約2m、短軸方向に約1.8mの間隔をおいて柱穴があり、東北隅のもの(P4)の中には口縁部を上に向け内面をみせた状態で裏の破片が落ちこんでいた。

西南隅に近いところには長径80cm、短径60cm、深さ床面より40cmのピットがあるが、柱穴ではないにしても、用途は明でない。

床面中央付近には炭化物の散乱しているのが見られたが、カマド址も炉址もない。

他住居址との切り合いもなく、また屋外施設らしいものも見当たらない。

遺物 出土遺物としては、住居址内北壁に沿って東より土師器高環の脚部があり、前記P4内に落ち込んでいた土師器裏の口縁部と同一個体の底部、胴部破片が東壁沿い南よりの部分から多く出土している。なお中央やや北よりの床面から、器台の脚部が出土した。

このP4に埋没していた甕(1)は、器高38cm、口径13cm、底径6.5cm、胴径39.3cmの大形の土師器で大きく豊かに張った胴と小さな底が特徴である。表面の色は灰黄褐色、内面は黒色を呈している。

大形の甕であるため3段階に分けて作っているが、粘土のつき目が表面に残っている。表面は全体をへらで調整した後ナデを行っている。内面もナデで調整している。口縁部は内外面ともいねいなヨコナデを行っている。

胎土は砂をかなり多量に混ぜているようである。

なおこの住居址の主な遺物には、北壁の下東よりのところから、直立の状態出土した高環の脚部と、住居址床面、中央よりやや北よりから出土した器台脚部がある。

高環(5)の底径は14.4cm、高さは約6cm脚部には径およそ1cmの孔が4つあけられているが、いずれも器壁にはほぼ垂直に、表面から内

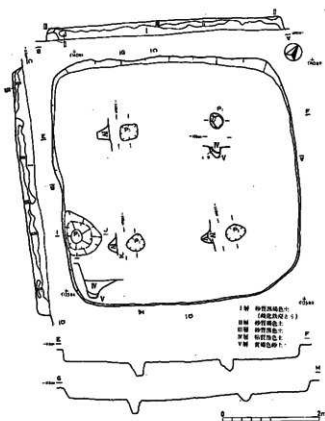


図47 13号住居址 (1:80)

第三章 遺構と遺物

面に向って、すばりときれいにぬいている。また脚部と皿の結合部分は、皿の底をへソ状にして押しこんであり、そのあとを調整せずにそのまま残してある。表面はハケメの上を磨いているが、内面は斜方向のハケメをそのまま残している。

色調は全体がほぼ褐色を呈するが、部分的に暗褐色を呈するところもある。

脚が短かく、やや内湾を見せる形の高杯である。

器台脚部(4)は底径 9.8cm、台の底部までの高さ 5cm、わずかに脚を八の字型に開く器台である。脚部には径約 1cmの孔が3つあけられており、台部中央には径約 1.5cmの孔がある。

表面ははいねいにヨコナデした上に酸化鉄の塗彩がしてあり内部はヨコナデが見られるものの塗彩はない。なお表面の一部にススの付着が見られる。

(篠崎 健一郎)

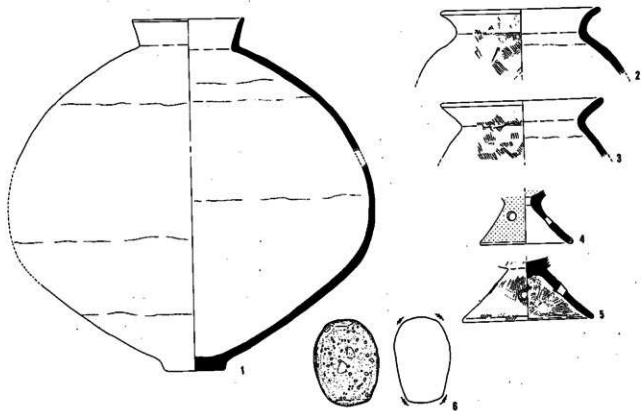


図48 13号住居址出土遺物 (1:4)

(2) 27号住居址 (図49・50、写真55)

遺構 27号住居址はA地区北西のグループ内にあり、東西5.2m、南北5.1m住居址の検出面からの深さ42cmを測る。ほぼ隅丸方形のプランをした竪穴住居址である。土層の堆積はIV層まで見られるも、II層以下に拳大〜人頭大の自然石が埋没しており、特に東半分が多く、総数 100個以上が確認された。これらは住居廃絶後投入されたものとする。その後全体の土砂流入により竪穴上部まで埋まったものであろう。

カマドは北壁のほぼ中央部に痕跡があり、焼土と灰が若干残存していた。床面に柱穴と周溝などは見当らなかった。

遺物 集石の間から、高杯の脚部小片とカマド東側で、黒色土器(1)の杯が出土した。

(原田 曠)



図49 27号住居址出土遺物 (1:4)

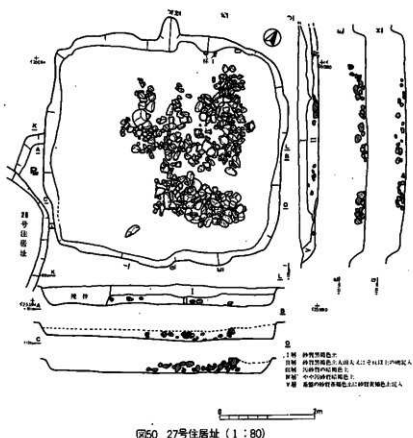


図50 27号住居址 (1:80)

② 34号住居址 (図51・52, 写真56)

遺構 15号住居址と近接する3軒のグループで、15号住居址の北約2mにある。この2つの住居址は東西に壁面を切り合う状態で相並んでおり、東のやや大規模なのが34号住居址、西に接する小さな方が35号住居址である。その切り合いの層位状態からみて、34号住居址が古く、35号住居址は後のものと考えたい。

34号住居址のプランは、おおむね隅丸方形であるが、東南隅だけが少し角ばっている姿で、長軸(南北)が5m、短軸(東西)が4.8mある。床面は平坦でよく固められており、南西隅に径80cmの大ピット、東南隅に近く柱穴様のピットがある。壁高はおよそ40cmで、住居址内の埋没状態はおおむね三層になっていた。

床面中央東南寄りには甕形土器の上部を、口縁を下にして埋めた埋燗炉ふうの施設があり、その内部や周辺には炭化物も見られたから、これはとにかく火を置く炉には違いない。しかし、柱穴址が1個で、しかも外部施設もないというのは不思議である。

遺物 出土した遺物は第Ⅲ層内より高環が出土している。この高環(2)は口径14.8cm、環部高さは5cmほどである。内外ともにタテ方向にいねいにヘラミガキがなされている。色は明るい茶褐色で内面に一部黒い所がみられる。

この高環の特徴は、おもしろい事に脚部を失っているが、この高環を利用して管まれていた時期に何らかにより脚部を失ったものであるが、その後、環として利用したものと思われるふしがある。というのは、高環の環部と脚部の結合部分がいねいに研磨されているのである。土器が当時の人々にとって日常生活のうえで大切に利用されていたことがこの点についてもうかがえる。(藤崎 健一郎)

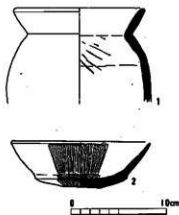


図51 34号住居址出土遺物 (1:4)

㉔ 35号住居址 (図52・53、写真56)

遺構 35号住居址は、34号住居址の西辺に10mほど北にずれた形で接している。規模は長軸(南北) 4.6m、短軸(東西) 3.6mの隅丸の長方形であるが、東南隅が若干欠けた形になっている。住居址の検出面からの深さは約25cmで、34号住居址の第1層の下部が床面になっている。住居址内には周溝、柱穴址など、施設はなにもなく、周辺に外部施設も見当たらない。なお床面は軟弱である。

34号住居址とともに理解し難い住居址である。

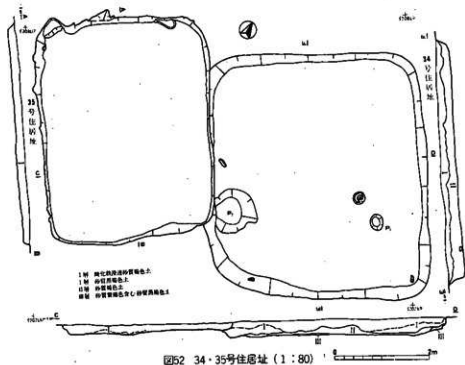


図52 34・35号住居址 (1:80)

遺物 出土遺物は、北東隅から土師器甕破片、中心より北西寄り底部が出ている。

甕(1)は床面より出土したもので、口径12cm、胴部最大径15cmの小形で、内外茶褐色である。口縁部は内外ヨコナデがなされ、胴外面は刷毛状工具により右斜方向にナデがくわえられている。内面はヨコ方向のナデが確認できる。胴部下3分の1から底部にかけて失われている。

(蘇崎 健一郎)

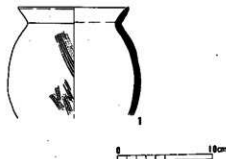


図53 35号住居址出土遺物 (1:4)

㉕ 38号住居址(図54)

遺構 38号住居址は、A地区に隣接する西北の6軒の中で一番東に検出され、西側を39号住居址によって切られ、同じく西にあった41号住居址を切り、南側約3分の1を水路で切られて失われている。この為現遺構は、北側の東西3.9m、西側南北3m、東側の南北2.2mを残すだけとなる。原形は南北を長軸とした隅丸長方形のプランであったと見られる。壁はよく残り住居址の検出面からの深さは30cmを測るも、土層は攪拌されて層位は判然としな。床は礎層まで掘込まれているので小石が見えていて凹凸がある。カマドは北壁中央に設けられたらしい痕跡があり、焼土粘土などが堆積し、石一つが残る。ピットなどは原形のものがない。

遺物 カマド前面に土師器の甕の破片が出土したが、水分を含み小片となってしまった。

(原田 曠)

② 39号住居址 (図54・55、写真59・69・70)

遺構 39号住居址は、A地区の西北に隣接する簡易水路部で発見された6軒の住居址の中の一軒で、西に40号、北に41号、東に38号の竪穴住居址と切り合う。南は水路で切られていて約3割の広さは失われていた。現状は南北2m東西4.5m深さ20cmを測る。床に粘性の強い黄褐色土を薄く敷いて平坦にならしている。周溝と柱穴は判明しないが、カマドは北壁中央に設けられていた痕跡があり、石一つと粘土焼土が堆積していた。床面に比較的多く木炭の散乱していたのが注目された。

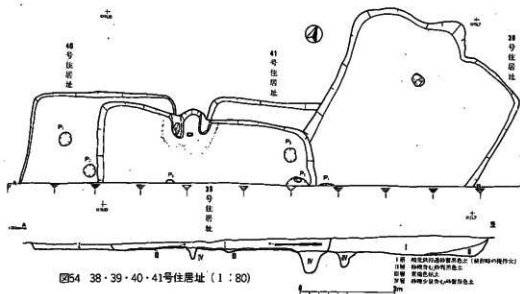


図54 38・39・40・41号住居址 (1:80)

遺物 土師器の甕(2)口縁部は、大形の破片である。口径は18cmはあろうと思われ、厚さ7mm-1cmを測る。胴部で強いふくらみを持ち、頸部でしぼり短かい口縁部を強く外反させている。内外面の調整は余りよくないが、外面に櫛状器具にて条痕を施している。

甕(3)は底部でやはり大形なものの破片である。

底は平底で細い胴部が立上がる形をなす。

焼成は堅い方であるが、前と同様仕上げは余りよくない。

カマド内から出土した土師器の甕(2)は口縁から胴上部の破片である。

口径14cm、厚さ4cmで、肩の部分でゆるく内湾し、頸部でゆるく外反させ口縁部となる。

外面の頸部より上を横に、下を縦に櫛状器具にて平行条痕を描いている。土師器の坏(4)は、口径17cmで丸底より腰でくびれ、やや内湾気味の口縁部が立上がる。内外両面にヘラミガキが入念にされ、丹彩された形跡が見える。他に同様の破片が多く発見されている。黒色土器の坏(6)は、口径15.7cmで丸底より腰で

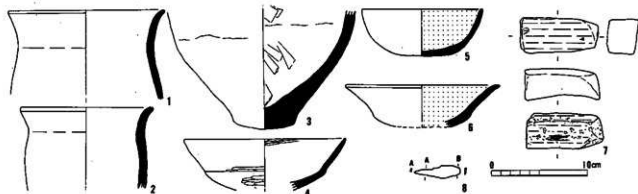


図55 39号住居址出土遺物 (1:4)

くびれる所は前者と同様で、器厚を一段と薄くした口縁が立上がる。

内外面にヘラミガキを、内面に炭素吸着を行っており、漆黒色を呈する。2点の坏はカマド内部より出土した。

その他、砥石(7)が床面から見つかっている。長さ8cm、幅3.2cm、厚さ2~3cmで、石質は、石英斑岩である。この石は木崎岩とも称し、信馬遺跡の西北約2kmの木崎湖西方山地に原産している。一面は弓形に磨耗し、使用された跡を残しており、その反対側に毛彫状の条痕が数本見える。鉄製品(8)は長さ4.5cm最大幅1.1cmを測る。

腐蝕が甚しいが刃子と思われるものである。

(原田 曠)

㉑ 40号住居址(図54)

遺構 40号住居址は東を39号住居址に、南側を水路で切られている為、残存部分は東西3m、南北2.4m、住居址の検出面からの深さは15cmであり、原形は方形に近いプランと考える。礎層の為に壁と床面は凹凸が多い。周溝などは確認されない。

遺物 床面から少量の土師器片が出土したのみである。

(原田 曠)

㉒ 41号住居址(図54・56、写真59)

遺構 41号住居址はA地区に隣接する簡易水路部で検出されたもので、6軒の竪穴住居群中の一軒である。しかし東側を38号住居址に南側を39号住居址に切られており、残存部分は東西3m、南北30cm、住居址の検出面からの深さ20cmという状況である。現況では周溝などは見当らない。

遺物 西北隅の壁下に土師器の無頸壺(1)と思われる破片が埋設していた。口径7cmで丸い胴部となるが底部は明らかではない。厚さ1cmほどで、体部にハケメが確認できる。その他の破片は僅少であった。

(原田 曠)

㉓ 42号住居址(図57・58、写真59)

遺構 42号住居址は、A地区の西北に隣接する簡易水路部で検出された一群の住居址(6軒)の中の一軒で、南部を水路で失っていて、残存部は東西7m南北3~5mを測るのみである。原形は長方形ではないかと見られる。竪穴内部はV層までの堆積土が見られるが、この状況は、竪穴廃絶後しばらく有機質の堆積があり、その後上流から河川の流れた際の土砂流入があって、埋没したものではないかと考える。

壁はよく残り、北壁中央に接して多量の焼土が床面に堆積するも、上部攪拌の為カマドであるかは確認できない。床面は固く平坦で、上に粘性の強い黄褐色土を薄く一面に敷いてあった。周溝と見られるものは焼土より東に東壁まで、幅5~15cm深さ3~10cmが続いていた。ピットは5個発見するも、主柱とは断定できなかった。

遺物 床面の北東隅で黒色土師器の坏と口縁部を失った増が出土している。坏(1)は、口径13.5cm、器高5.5cm、器厚5mmで、丸底から胴部で口縁を外反させている。内面は炭素吸着をさせて漆黒色を呈す。増(2)は口縁の欠けたもので、腹径11.5cm、器厚5mmを測る。

(原田 曠)

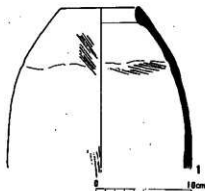


図56 41号住居址出土遺物(1:4)

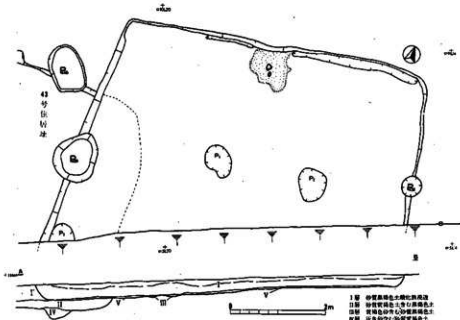


図57 42号住居址 (1:80)

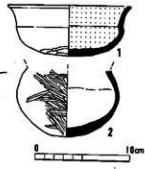


図58 42号住居址出土遺物 (1:4)

(30) 43号住居址 (図59・60, 写真60)

遺構 43号住居址は、簡易水路部の一群の西端に検出され、南部を水路に、西側を42号住居址に切られた竪穴住居址である。現況は東西6m、南北3.2m～5m住居址の検出面からの深さ60cmを測る。原形は隅丸方形か隅丸長方形で、四辺共にゆるいカーブの丸みを持つ形が考えられる。内部はIV層まで堆積が見られ住居廃絶後の状況を示している。これによれば大部分は、I、II層で占められ、河川の流れによる土砂の流入が原因で埋没したもので、上部の1層は後世の耕起によって攪拌された層である。壁はよく残り、北壁中央に粘土と焼土の堆積も見られるも、量的には少なく更にカマドの煙道も確認できない。焼土内より骨小片が少量出土した。床面には礫大の石が多く散乱しているも、大体平坦である。ピットは5個あるも主柱穴は判明しない。

遺物 北壁のほぼ中央東よりにて、土師器の高坏上部と床面の西北隅にて、同じく脚部を発見し、更にその南にて埴を得ることができた。

高坏(1)は口径18cm
厚さ5mm、高さ8cm
で、坏底部のみ1.2cmと厚い。

丸底より立上がり、一段くびれて内湾し口縁部で少し外反させる形をとる。内外両面共にナデの行われたあと、ヘラミガキがなされている。焼成よく堅いつくりである。色調は明るい

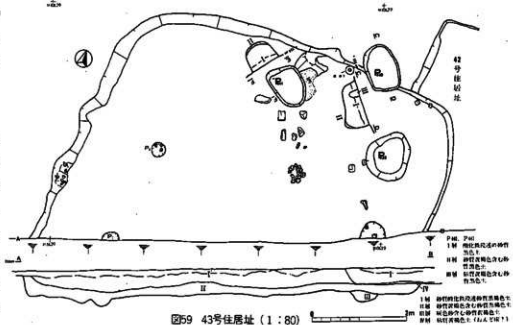


図59 43号住居址 (1:80)

橙色で一部丹形の形跡が見られる。高環(6)は同じく高環の脚部で、器幅は上部3.5cm、下部11cm、厚さ5mmである。高さは5.5cmで低い。全面にミガキがなされ焼成よくて橙色をしている。

増(4)は九底で口縁部を失っている。胎土中に砂が混入され一部表面が剥けた所がある。

(原田 曠)

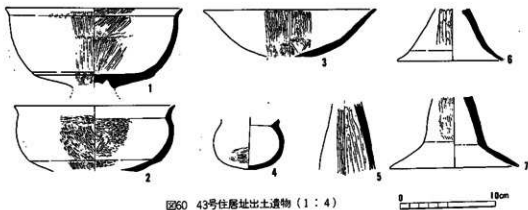


図60 43号住居址出土遺物(1:4)

(3) 44号住居址(図61・62, 写真70)

遺構 44号住居址は、農具川地区南端部の所で検出された竪穴住居址で、四辺何れも4.9mを測る不整形のプランをもっている。

竪穴内部は攪拌され土層は確認できない。床面は凹凸が多く、西北の壁よりに間溝と見られる溝が幅15cm、深さ10cm、長さ4mにわたり続いていた。ピットは5個あるも主柱穴は確認されず、又、炉とカマドも不明である。

遺物 遺物は土師器の小破片が30点程攪拌層より発見されたが、床面より黒曜石1点が出土したので、これについて述べたいと思う。

この大きさは、長さ2.8cm、高さ2cm、最大幅1cmであるが、よく注意した所、旧石器のコア(石核)である可能性が強いので、今後の重要な参考資料としたいと思う。形は円錐形をなし、片側の面は大きな剥離のままであるが、反対側に6条の石刃剥離痕があり、上部は剥離しやすいうように自然面ではあるが、剥離側が高く斜面をなしている。この形をなす石器は旧石器時代の末期に近く、長野県では南佐久郡野辺山の矢出川流域に栄えた所の、細石器文化に属する。筆者は昨年野辺山地方を訪れこ

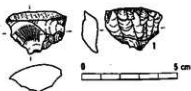


図62 44号住居址出土遺物(1:2)

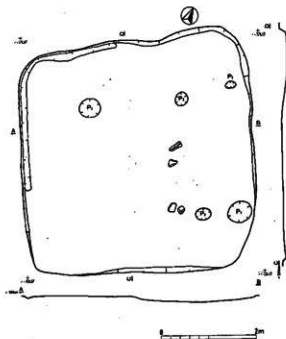


図61 44号住居址(1:80)

の文化の資料を裏実しているので、ほぼ間違いないと思う。この黒曜石がどうして44号住居址の床にあるのか、一切不明であるが、本遺跡一帯は沖積地層で旧石器とは関係ないものの、東方約300mから洪積台地に続く低い中山山地があって、この方から持ち込まれて来たことも想像される。

(原田 曠)

㉔ 52号住居址 (図63・64, 写真64)

遺構 52号住居址は、農具川地区で検出され、東に51号、東南に50号、南に53号の各住居址と一群をなす東西4.7m、南北5m、住居址の検出面からの深さ30cmを測る長方形プランである。竪穴内はⅣ層まで見られ、これによれば、住居址廃絶後ゆるやかに四隅から埋没していったものと考えられる。床は礫層にまで入っている関係から、礫が所々見える状態で凹凸がある。カマドの確認はできないが、床の中央西よりに浅い落込みがあり、ここから炭化物が少量出土しているので、炉の痕跡かとも見える。ピットは東南隅に一つだけあるも、支柱との関係は不明である。

遺物 出土土器としては、甕(1)が出土しているが、胴部から底部は失っているが、口径18.5cm内外とも暗褐色をしている。口縁から内側は、ナデ調整されているが、外側は右斜め下方向にハケメが確認できる。

(原田 曠)

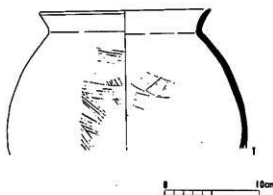


図64 52号住居址出土遺物 (1:4)

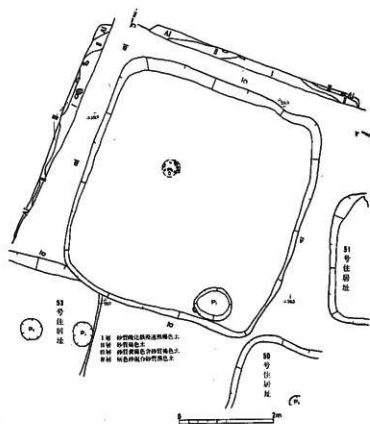


図63 52号住居址 (1:80)

(33) 58号住居址 (図65)

遺構 農具川地区にある5C住居址群のうち、河川址3の南群の東端に位置する住居址であり、長軸を磁北より10°西に向け、4.65m×4.55mの規模をもつ隅丸方形である。

住居址の検出面からの深さは40cm。礫層を掘りこんで作った住居址で、床面には拳大の礫が頭をのぞかせており、凹凸が多いがよくふみ固められている。

周溝、屋外施設、カマド等は確認できないが、中央よりやや北にあるP3のあたりからは少量の炭化物が出土している。

なお、この住居址の上を現代の堰が流れていたため、住居址内の土層は攪拌されている。

遺物 土師器の厚手の裏の胴部が出ている。
(篠崎 健一郎)

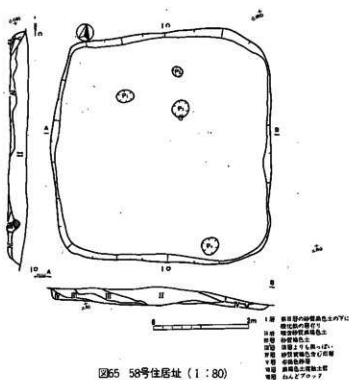


図65 58号住居址 (1:80)

4 第 4 期

(34) 16号住居址 (図66・67, 写真51)

遺構 A地区の東辺にあり、17号住居址の南に約6.5m離れて隣り合っている。この16号住居址は、西側の約3分の1が河川址2と切り合っている。幅5~6mある河川址2(III-3-1図5参照)の東岸が住居址にかかっており、遺構は河川の堆積物の上にあることから、河川の方が古く、そこにかかる住居が掘り込まれたものと推測することができる。

プランは南北2.9m、東西2.5mの方形であり、西に約90cmのカマド状堆積物がはり出している。南北の軸は磁北より25°西とやや西に傾く。

上部が上土と共に持ち去られたので、埋没状態は不明であり、約10cmの深さで床面が現われた。

床面は平坦で、ピット等屋内施設も確認できない。面全体が軟弱であるが、河川址を切った西側の部分は細黒褐色土でさらに軟弱であった。

西壁の中央よりやや南に寄せて、南北幅約1m、東西幅約90cmのゆがんだ半円形の焼土の囲まりがもり上って張り出している。上部が削られて正しく確認できないが、底は床面と同じところで切れ、河川址の堆

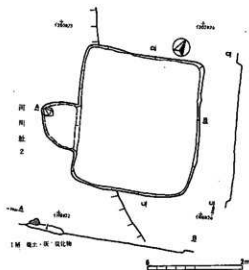


図66 16号住居址 (1:80)

積物の上に乗っている。カマドとしての石組みも発見されず、わずかに西端に、直径20cm前後の自然石が焼土の上に乗るのを見るだけである。

焼土が灰を含んでいること、焼土の中に須恵器の出ことから、この近くに接してカマド状のものがあり、そこから排出された土の固まりであると考えたい。

遺物 掘鑿部分の浅い故もあろうか、遺物はごく少量しか発見できなかった。住居面からはほとんどなく、一部計測可能なものとしては、土師器の甕(1)の口縁部のみである。これは口縁の直径が約18cm、首部分の径13cmの厚手で砂目の粗い白褐色をした土器である。口縁部分の周の約半分が出土した。一部が還元焼成で黒くなっている。

焼土塊の西北隅、自然石のあった下あたりから蓋環の蓋(3)のみが出土した。口縁は一部であるが、約3分の2個体が出土、計測可能である。口縁径は、12cmで高さは4.2cmの白灰色の須恵器である。表面はロクロ形成の上をナデであるのが認められ、縁より1.5cm程度上に幅約4mmの太めの条線を入れている。大きさ、条線の入れ方共に17号住居址から出土した蓋環に似ている。

あと、住居址内からは土師器の甕(2)の底部が出土し厚さ1cm程を計ることができる。このほかには少片の土師器約20点程である。

なお、焼土内より骨片が発見された。(荒井和比古)

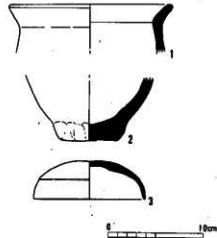


図67 16号住居址出土遺物(1:4)

⑨ 18号住居址(図68・69、写真51・69・70)

遺構 A地区の東寄りの住居址群の中では、最も西にあたる。17号住居址より北北東へ約13m、19号住居址より西へ約6mの位置にある。

この住居址は床面から上部にいたるまで大小の礫が土砂と共に散乱しながら埋没しており、しかもそれが固く、発掘に困難をきたした。砂礫は住居址の外まで広がり、この住居址の北、約15mほどのところには北からの大きな礫の張り出しが見られ、このことから、いつの頃から洪水によって住居が埋没していったと考えられる。住居内の砂礫層は、砂質黒褐色土の中に、拳大前後の礫が無数にまじり、その礫は床面よりも表面に近いほど多くまじっていた。

プランは南北4.6m、東西5mの方形であるが、角がまるみをおび辺も全体ゆるやかな弧をえがいて張り出している。北側中央に約40cmのカマドの張り出しが見られる。

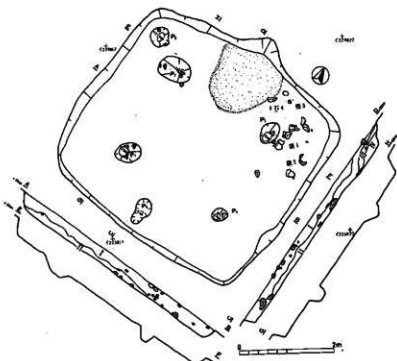
壁は垂直に近く圓い。床面は礫まじりで固く、壁にも小さな礫が見えるなど、礫の多い層に掘り込んでつくられた住居である。住居址の検出面から床面までの深さ25cm程度と比較的浅いのも、礫とその固さで深く掘り得なかったのではあるまいか。床面は平であるが、礫が頭を出し、小さな凹凸がある。カマド付辺は窪んでいる。

住居址内のピットは5つが確認できる。P1～P4までは穴の大きさ直径40cmで、深さP1 23cm、P2 24cm、P3 22cm、P4 22cmとほぼ同じ作りである。主柱穴として位置も揃い方もよい。北西の柱穴P2の外側、壁との中間部分にP5がある。穴の大きさは直径40cmと同じくらいであるが、深さは約18cmと浅い。補助の柱穴であったろうか。この他に、南の壁の中央近く、南側のP1とP4の中間の南寄りに小さな凹みがある。穴の形は南北に長いが不定形で小さく、底は約5cmと浅い。

北壁のほぼ中央に位置するカマドは、石組はなく、そのあたりにカマドのあったことを示す粘土、灰、焼土が礫と共に多く堆積しているだけである。そして屋外へ入口約80cm、外側へ約40cmの張り出しが見られる。

灰、粘土含焼土は焚口と見られる壁より南へ約60cm、巾1.4m、厚さ十数センチと多い。そしてその南端より炭片が多く出土している。

中央部分よりやや北側に縦23cm、横20cm、厚さ14cm程の石が2個と、高さ3cm、縦17cm、横8cmの石1個が組み合わさって出土した。それに南壁のほぼ中央付近からは高さ13cm、縦25cm、横15cmの大きな石が5個まとまって出土している。これは流入したものか、使用に供されたものかはっきりしない。



1 壁 赤土の焼土質をもち厚さ約10cm
2 壁 赤土の焼土質をもち厚さ約10cm
3 壁 赤土の焼土質をもち厚さ約10cm
4 壁 赤土の焼土質をもち厚さ約10cm

図68 18号住居址 (1:80)

遺物 遺物の多くは、カマドの東側、住居の北東寄り、P3付近から北東の壁にかけて出土した。ほとんどが土師器である。須恵器は、カマド東わきの床面から出た坏の一部と見られる黒灰色の一片のみである。

ほぼ完全な形として出土した土師器の壺(3)は口径9.2cm、胴の最大径12.2cm、高さ11cmの小さなものである。底はまるく全体球形で口縁部は1cm程の垂直なへりをもつ、外側は赤褐色であり内側は黒褐色である。表面はナデでつくられ特に口縁部は横にナデである、底が黒く焦げの跡が残っている。



同じく床面から出土した土師器の甕の上部が2個体ある。甕(2)は口径19.6cmで、上部約12cmが残り下部を欠く。口縁部に反りを見せた短形の甕で、表面全体が明褐色で酸化焼成が見られる。内側も明褐色であるが還元焼成の黒が一部に残されている、外、内側共にハケメが見られ、

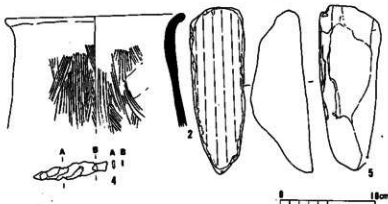


図69 18号住居址出土遺物 (1:4)

口縁部は縁より4cmほど下よりハケメは消えないで作られている。

もう1個の甕(1)は大ぶりで口径24.3cmで、上部約14cmが残り下部が失われている。頸部は22cmで胴部にややふくらみをもたせている。全体が褐色であり表面一部に還元焼成が見られる。内外ともナデで作られすべらかである。

あと、片としてスリップのかかった壺と思われる片が4片あり、また焦げて表面に煤のついた破片が6片程出土している。その他の土器はほとんど土師器の小片である。

土器外の遺物として、南壁ぎわに刀子(4)が1個体出土している。3片に割れているが、つなげると長さ8cm、厚さ1.5cm程であるが、さびに掩われた内部に黒く幅6mm、厚さ2mmの刀子が見える。また床面から、長さ17cm、幅5~6cm、厚さ6cmの磨いたあとの見られる砂岩の砥石が1個体発見された。

(荒井和比古)

㉑ 19号住居址 (図70・71, 写真52)

遺構 19号住居址は、A地区の東北隅に近い位置にあり、近くに11号・16号・17号・18号・21号・22号の各竪穴住居址が発見されている。住居址は南北2.6m、東西2.5mと方形に近く、主軸をやや北西から南東にとる。竪穴の深さは開田作業の際の掘削の為、住居址の検出面から9cmの深さを測るのみであった。床面は礫が多く凹凸が見られ、柱穴とカマドは確認されない。

遺物 床面よりやや上部から須恵器の壺(2)破片を発見した。肩から胴へかけての破片で焼きしまりがよく外面に暗緑色の釉が深くかぶり、一部は肩から流れている所もある。土師器の甕(1)は冪手で内外両面にナデがなされる。器壁は凹凸が多く、外面には煤が付着している。粗雑なものである。(原田 曠)

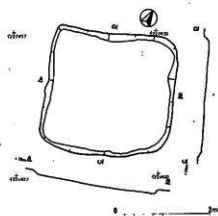


図70 19号住居址 (1:80)

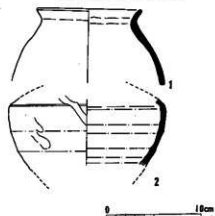


図71 19号住居出土遺物 (1:4)

㉒ 33号住居址 (図72・73, 写真56)

遺構 33号住居址は、A地区のほぼ中央にて検出され、東西4.4m、南北3.5m、住居址の検出面からの深さ40cmの不整な長方形をもつプランの竪穴住居址である。壁面はよく残るも周溝は確認できない。床面はよく踏み固めてあるも東半分は礫が頭を見せており、凹凸気味である。ピットは6個あるも主柱は確認できない。カマドは北壁中央に設けられ、煙道の抜けていた痕跡があるも、カマドの石は一本残るのみで、他は離れた位置にわずか見られたのみである。

遺物 須恵器の環(1)がカマドの東側にて床面にふせた状態で発見された。口径9.4cm、器高4.0cmで丸底から上がり、肩で内部に屈折させて口縁部を直口型とする。ロクロで整形され、焼き締まりのよい灰色の美しい器である。

黒色土器の環(2)が上記の環とならんで発見された。口径12cm器高4.9cmで丸底気味の底部をもつ、口縁部近くで外反する形で、器厚は3mmを測る。内面は一面に炭素質を浸透させて漆黒色を呈し、外面も煤が付着している。この他床面中央の石の下から、土師器の高杯の足が発見された。(原田 曠)

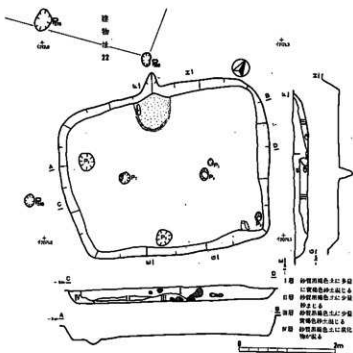


図72 33号住居址(1:80)

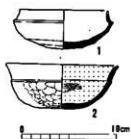


図73 33号住居址出土遺物(1:4)

第 5 期

(3) 11号住居址(図74・75・76、写真47)

遺構 A地区の東端にあたり、19号・21号・22号の一軒より東へ約10m程離れた住居址である。

上土除去の際、上部が削りとられ攪拌されてこの住居の埋没状態は正しく確認できなかった。

プランは南北5m、東西4.9mの方形である。北壁の中央部分にカマドがあり、その煙道が壁を破って約40cm北へ突出している。カマドをむすぶ住居の中央軸はほぼ北とってよいが磁北より15°東に傾いている。

住居址の検出面から床までの深さは約20cmであるが、周囲の生活面を上土と共に除去しているの、この深さは正しくない。壁は60°ほど傾斜していた。

床面は、中央付近は比較的堅くふみしめられているが、壁面周辺になると軟弱になっている。

床面はほぼ平らであり、周溝は見当らない。床面には多くのピットがあり、大小あわせて10個を数える。支柱と思われる4つのピットP1・P2・P3・P5はそれぞれ直径、25cmから35cmの大きさと深く、位置もよい。住居址の真中に、南北1.2m、東西0.6m、深さ30cmの大きなピットP10があり、中から土師器片が出土している。中央にピットを掘り込んだ住居址は借馬遺跡では類例をみない。

その他、南壁中央付近のP 8は、南北約40cm東西30cmと大きい浅く、その北約20cmのところと小さなP 7があり、南東の柱穴P 3より西に浅い凹(P 6)があり、南西の柱穴P 5より北東20cmに直径20cm程の小さなピット(P 4)があった。また、西壁の北寄りのP 9は直径25cm位の浅い凹であり、また北壁の東隅に近く直径20cm程の同じく小さな浅い凹(P 11)が見られた。

この住居を掘り進んでいくうちに多くの炭片が発見されたが、床面に至って大きな炭の塊があるいは列をなし、あるいはまとまり、時には単独で見られた。そしてその周辺にはおびただしい灰の堆積が見られる。焼却して失われた住居であることが想像される。しかも住居址内の大きな炭片の列は北西の方向に平行に並び、その列は明らかに南側のP 3、P 4の2つのピットから出ているところから、柱の焼けた炭片であり、焼失の際家全体が北西に倒壊していったことがうかがえる。

北壁中央に位置するカマドは、石が若干残されているが、遺存状態はよくない。カマドの大きさは、焚口幅約80cm、奥の幅約90cm、奥行約80cm、高さは破壊されて不明であるが、推定40~50cmである。焚口部は床面よりやや低くなって、奥へ行くに従って少しずつ上り北に向って煙道が壁を破って深さ約10cm、幅約20cm、長さ約40cmのびている。

石組みは、左右両袖に、厚さ15~20cm高さ30cm前後の細長い石を縦にして4つずつ並べ、小さな石で補強している。天井石は一本残すのみだが、厚さ15~20cm、長さ65cmの矢沢石である。両壁は粘土で固めてあるが両壁共に約30cmの厚みとなる。中の燃焼部の広さは40×80cm程の空間となり、焼土と灰がつまっていた。この焼土の中から骨片少々、土師器が検出された。

遺物 土器など、遺物の出土は少ない方である。焼失家屋の推定を裏づけるように、黒焦げの土器が多く表面が荒れ、長石の粒の大きい粗い土目の土器が目立っている。

出土土器はカマド付近に集中しており、カマド内からは、土師器の甕(3)の底部が出土している。底部10cmを残すのみで全体像ははっきりしないが最大径22cm程であり厚手のものである。内外共に明褐色であるが、表面はすすがついて黒色が濃淡になっている。内にはうすくハケメが見られ、表面にも部分的にハケメが見られる。シャモットが混ざられ、でこぼこのはげしい厚手の土師器である。

その他カマド内からは、小片の土師器10点程が発見された。

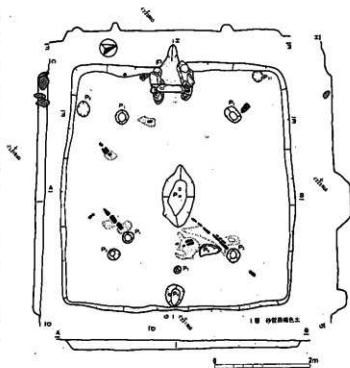


図74 11号住居址 (1:80)

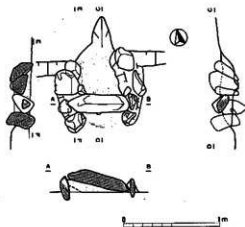


図75 11号住居址カマド (1:40)

カマド西より土師器の碗(2)約5分の1個体が出土し、計測すると口径約13cm、高さ7cmのものである。表面は朱褐色でざらざらしており口縁より6mmほど下に約4mmの条線の溝が見られる。内は白褐色でこすったあとが認められる、内外共に底は還元焼成の黒色部分が見られる。厚さは7mm程と厚手である。

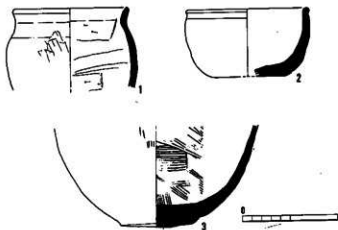


図76 11号住居址出土遺物(1:4)

またカマド横の床面より5分の1個体程の甕(1)の一部が出土した。口縁部と上部は計測できるが、下部を欠く。口縁約12.4cmで胴部のふくらみの径が14.8cmで、口縁より1.3cm下の首は10.8cmとゆるやかにしまる。表面は赤褐色であり、上部に一部還元焼成が見られる。内部は全体還元焼成で黒くなっている。内側はロクロメカがはっきり残るが、表面は頸部の屈曲部だけにロクロメカが残る。

形状が確認できるのは、上の3点の土器であり、以下は破片である。大きな破片は甕の一部かと思われる土師器片であり、他の床面より、小土師器片26点が見られた。この中には、高坏の足の一部と思われるものがあり、胴部の直径4cm、高さ7cmと計測できる。

中央の大きなピットからは厚手の土師器片、南壁に接したピット内から黒色土器の片3点が検出された。

(荒井和比古)

⑧ 12号住居址(図77・78、写真47・69・70)

遺構 A地区の南西隅にあたる。隣接する20号住居址よりは、南西約7mに位置する。この付近は、この住居址東側約11mに、幅7m~10mの幅広い河川址1があって、付近一帶砂礫の多い地区である。その中を掘り込んだ住居のため、壁はもとより、床面にも拳大前後の礫が見えた。また、その後も洪水に流されたらしく、層位が判然としない程に砂、礫が流れ込み、これは長期の堆積というより一度に埋められたものようである。

したがって床面の判別にも苦労するばかりか、プラン全体の確認にも困難をきたした。特に住居址の南西部分は表土上で水田をつくる際の堰の下にあたり、堰を掘るときに攪拌されており、壁面の確認は明確さを欠いた。

プランは方形に近く北西部がやや張り出し、南西部は不明であるが、ややまるみを帯びていた模様である。カマドは東辺中央付近に位置し、約24cmほどの張り出しが見られた。南北3.8m東西3.5mで、カマドから結んだ東西の軸は磁北より、58°東と、やや北方向に傾いている。

壁面は不明部分もあるが70°~80°くらいの急で、住居址の検出面から床面までの深さは約30cmである。ただし前述のように壁面、床面共に礫が頭をのぞかせ、かなり

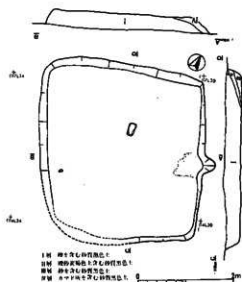


図77 12号住居址(1:80)

の凹凸があり荒れた状態であった。

床面のピットや周溝は確認できなかった。屋外施設も同様確認できない。

東向きに位置するカマドは、石組をし粘土でかためたカマドと考えられるが、石はすべてぬきとられ、無い。付近の床面に焼土の堆積のあったこと、粘土の残余があったこと、そして焚口と思われるあたりが床面より低くなっていたことが、カマド址と確認できるものである。

遺物 他の住居址に比べて遺物は多い方であった。これらは埋土の上層部より多く出、主なものとしては、土師器の甕、須恵器の壺、須恵器の坏5点であとは小片である。

住居址床面から出土した土師器の甕(1)は、高さ32.5cm、口径20.7cm、胴幅23.1cmの比較的大きな短頸の甕で、ややふくらみをもたせながら上部にいて少しつぼまり、口縁がやや外にひろがっている。欠損が著しく口縁も一部を残すのみであるが、底から上まで接続できる。床面は一部を残すのみであるが、木の葉底である事が確認できる。厚さは7mm程度と薄い。表面は全体がナデられ紋様はない。色は明褐色であるが、表面はすすがついて、黒色の濃淡がひろがっている。

I層より出土した須恵器の壺(6)は、底部の一部のみ計測できたが、胴部の径が30cm以上になろうとする大きな壺である。全体灰色で固く焼かれ表面に平行タタキメの紋様が見られる。中はナデられているが、底の部分に茶色のしみが残されている。

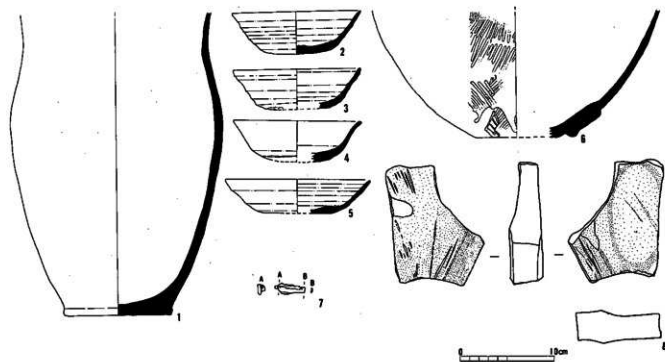


図78 12号住居址出土遺物 (1:4)

第三章 遺構と遺物

須恵器の坏5点は、カマド内から出土した坏(3)だけは、やや径が大きく、浅く色も明るい褐色であるが、I層から出土した坏3点は大きさがほとんど同じで、色も灰色と共通している。坏(5)が口径15.6cmに対し、坏(2)・(3)・(4)は、口径13.6~14.0cmとほぼ同じであり、高さは坏(4)が3.5cmに対し坏(2)・(3)は、4~4.5cmと近似値である。すべて、ロクロ成形でロクロメがつき、特に坏(3)は外側4段、内側3段の波状のロクロメであり、坏(2)も内側に波状のロクロメが見られる。底は、すべて平底であるが坏(3)と坏(4)のみ底がやや円い。みなへら切り底である。特に坏(2)と坏(3)には、へら切りの痕がはっきり残っている。

カマド内からは坏(5)の外は、濃い茶色の須恵器の小片が出たのみである。またカマド付近には、ほとんど遺物が見られなかった。

住居址内から出土した上記以外の小片は、大きめの土師器片3点、厚手の土師器片約15点、薄手の須恵器片8点のほか、土目の粗い土師器の小片が約50点程である。

土器以外の遺物としては、住居址のほぼ中央の床面に1個の礫石がある。中央より出土した礫石(8)は、7.5cm×8cmの方形、厚さ1.7cmの安山岩で、両面が磨かれて凹み、表面に掻き砂と思われる細い条痕が見られる。色は灰白褐色である。

また、住居址の遺構検出中に埋土の上層から、細長い鉄製品(9)が出土した。長さ4cm、厚さ9mm程度で小さく、一部鉄の黒色部分が見られるが大部分がさびて、何であるか明確にし難い。

(荒井和比古)

(40) 14号住居址 (図79・80, 写真49・70)

遺構 A地区の中央よりやや南に寄り、付近には近接する竪穴住居址はなく、1軒だけ離れている。いちばん近い15号住居址より南東へ約25m、16号住居址より南西へ同じく約25m、13号住居址より北へ約35mと離れている。

埋没状態を推定するに住居址はやや東寄りの南の方から埋められていったようである。南方の床面上の第IV層は砂質の黄褐色土である。これは、発掘期間中にも見られたことだが、この住居址の広がる微高地は春から夏にかけて南の風の強く吹くところで、周辺の黄褐色砂が風に運ばれて埋められたものと見られる。その上第II層、黒褐色土を含んだ黄褐色砂の埋入のしかたも、風の力によることをさらにはっきりさせている。

その上に乗る第III層は、遺物として多く発見された骨片が風化して炭化物や灰や焼土とまじり合い、厚く重なっている。その上の第I層砂質の黒褐色土で、上の耕土につながる。

プランは南北5.6m、東西6.2mの南壁の西寄り、東壁の南寄りのやや張りだした隅のまるい方形である。北壁の中央付近にカマドの煙道が約60cm、突出している。カマドを結ぶ中央軸は北を向くが、磁北より30°西へ傾いている。住居址の検出面から床面までの深さは約38cmを残している。

壁面は垂直に近く固い。床面は全体に踏み固められてかたい。住居址の南東部分、南東隅より西へ1.5m、北へ2.5mを辺とする長方形の部分の床面は拳大の礫が頭を出しかなりの凹凸があってさらに固く、酸化鉄の沈殿物がたまってたりして、西側一帯の床面と土の相を異にしていた。

床面のピットは6つを数えた。主柱穴として位置のよい北西のP1、北東のP4、南西のP6は確認できたが、南東部分には発見されなかった。北西のP1は直径約20cm、深さ15cm程度で、北東のP4は大きく直径約60~65cmで深さ21cmであり、南西のP6は直径20~25cmで、深さ17cmであった。南壁ぎわ

中央付近にP5があり、直径約30cmで深さ7cmと浅く、その他P1の1m程南にはP2が、直径約24cm、深さ11cm、P1の南東60cm程にはP3があり、30cm×10cmの細長い穴で深さは7cmであった。周溝は確認されない。

カマド西側は凹地になっており、そこから土師器の甕が押しつぶされて出土した。

この住居址の特色はおびただしい骨片である。住居址の西側部分一帯にわたって、第I層を掘りすすむ頃より骨片が灰や焼土、炭化物とまじってどんどん出、特に南西のP6の周辺および、西壁の中央よりやや北寄り、P2のあたりから壁ぎわにかけて骨片と焼土・灰・炭化物が厚い層状になって発見された。厚かったところは25cmほどにおよぶ。これら骨片は原形を止めず細片状となり、一概に火焼によって白色化したものである。そして、これらは動物骨の一括した火焼骨と見做される。(III-3-1参照)

したがって、灰や炭化物の多くの出土と考え合せ、ここが動物の焼却場であったか、骨の捨てられた場所であったか、にかく、ここが住居の廃絶後まもなく特殊な場所として利用されていたことには間違いない。

カマドは北壁中央付近に石組が若干残って発見された。全体の大きさは焚口約80cm、壁ぎわあたりが1m、奥ゆきは約60cm、高さは破壊されて不明だが、石組みから見て推定55cm～60cmの石組粘土カマドである。焚口部分は床面より低くなっており、奥へゆくにつれてせり上り、壁のあたりから幅60cm、深さ20cmの煙道をつくり、壁を破って約60cm、突き出している。

石組みは、天井石はすでに無く天井石を支えたと思われる石組が5本だけ残され、カマド内にカマド構築のとき使われたと思われる拳大の石が10個ほど累積して残されていた。5本の石組は下を粘土で固められて立ち、大きいものは直径15cm×10cmで粘土の上に35cmの高さを見せ、小さい入口のものでも直径7cm×10cm、高さ26cmでいずれも矢沢石である。石を固めた粘土の厚さは焚口に向って左は20cm程度、石は30～40cmとなる。

従って燃焼部の広さは30cm幅で奥へ60cmほどのびている。この燃焼部には焼土と灰が厚く堆積しており、さらに天井石のあったあたりまで高く、灰・焼土・粘土が盛り上っていた。なお、カマド西側のくぼみの裏のそばにカマドの石組の石と思われる直径10cm程度、長さ20cmの矢沢石がころが

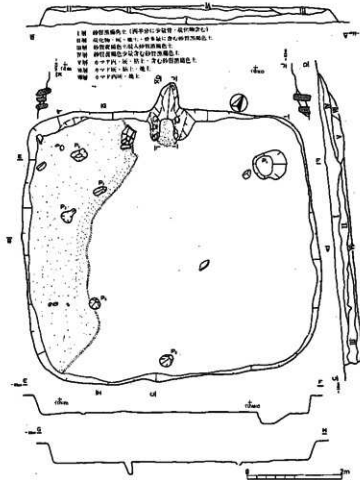


図79 14号住居址 (1:80)

っていた。

遺物 遺物のはほとんどが、住居の西北部、カマド西よりP1周辺にかけてより出土している。遺物は比較的多く、計測できる個体も多いが、これらのうち土器は外面が剥落してざらざらし、色あせたものが多いのが印象づけられる。

カマドより西約60cm離れて、第三層より、甕(8)がやや形を残して、甕(7)がバラバラになって出土した。2個体とも同じくらいの大きさの短形の土師器の甕である。

甕(8)は口径19.3cmで底部約3分の1を欠き器高が定かではない。外面にはふい黄褐色であるが表面の剥落がはげしくざらざらし、粗い土目の中に大粒の石英や水晶が表出している。固い焼成であり、2ヵ所に還元焼成の黒の部分が認められる。口縁部はハケメの後ヨコナデ、胴部は縦に上から下へ帯状のヘラケズリのあとが見られる。内部は表面よりすべらかであるが、にふい褐色の上に還元焼成が見られる。口縁部はヨコナデ、胴部は横のハケメおよび工具による荒いヨコナデが見られる。ナデは逆時計回転である。

甕(7)は3分の2個体ほど出土し、口径20.2cm胴部を欠くが推定約30cmと計測できる。全体厚手で特に底は厚い。外面は浅黄褐色であるが、表面が著しく剥落してざらざらし、灰や炭化物が付着したりして、灰色、褐色、黄褐色部分と色がまばらである。土質の中に褐鉄鉱の混入が見られる。外面の成形は口縁部から肩部はヨコナデで、胴部から底部にかけてはタテナデであり、底面径7.3cmは木の葉底である。内面は一様の浅黄褐色であり、胴部は工具を用いた逆時計回転のヨコナデが見られ、口縁部はその上をていねいにヨコナデしているのが認められる。胴部やや上方に5mm×3mm程度の小さな穿孔が見られる。焼成後その部分の土が落ちたか外から穿ったものか確定できない。

この2つの甕の出土したほば下の底面が凹んで、その中に完全な形の土師器の頸部押し潰されて発見された。口径19.3cm、器高34.4cmで上層から発見された2個体とはほぼ同じ大きさの短形の甕である。厚手で特に底の厚い点も類似している。底部にいてて丸九形につままり、底径6.8cmが不恰好に円いのが特色である。外面が黄褐色であるがやはり表面が剥落し長石などが表出し粗く、凹凸が著しい。ところどころに還元焼成が見られたり、灰の付着もあって表面の色は多様である。外面口縁部はヨコナデ、胴部は軽いケズリの後、縦やや右側のナデが見られる。内面は明るい橙色で表面よりすべらかで色も一様である内面口縁部はヨコナデである。頸部のくびれより下に縦のハケメが見られ、その上をヨコナデが加えられている。胴部はタテナデとナデである。この甕の底部と似た底の円い甕(9)の底部がP1周辺から出土している。この底部はとがった感じで円くなり、やはり底は厚い。表面がざらざらして石英や水晶の目立つ点、外面にはふい黄褐色の上に炭化物の付着している点内部のふい褐色など甕(8)と色、土目とも似て同一個体と思われるが確定しない。胴部が下から上の粗いヘラケズリの点も似ている。底部は中心から外側へヘラケズリの後ナデである。

同じように底が厚く、外面が荒れ、石英や砂粒の目立つ凹凸の激しいざらざらした甕(10)の底部がごく一部であるがP1付近から出土している。底径は6cmで凹みを見せる。外面黄褐色でタテナデが見られ底はていねいにナデである。一部に炭化物の付着が見られる。内面はすべらかで明るい黄褐色である。

北西隣近く甕(8)や甕(7)と同じあたりに出土した甕(11)の上半部はその3分の1程の部分であるが上記のような表面の荒れはないすべらかな甕である。口径約20.9cmの短形で付近から出土した甕と同じ大きさの同位であるが、表面がなめらかで赤褐色をしている点か他と異なる。口縁はヨコナデ、胴部は横縦の順にナデられている。内面も赤褐色であるが胴部は工具によるナデが見られ、底部から上部へのらせん状の逆時計回転のナデが見られる。

この付辺から出土した土師器の甕09口縁部の一部は口径18.2cmである。褐鉄土の含んだ濃い褐色の見られる土質でつくられているが、全体は橙色である。外面は内に比べて橙色がややよやく、口縁部はヨコナデで胴部はヘラ状工具による荒いナデが見られ炭化物が付着している。内面はヨコナデである。

骨片の層のあった住居址西側の壁ぎわから出土した土師器の甕(12)は、上述の甕よりやや小さい。一カ所からその4分の3程出土し計測できる状態である。口径15.8cm、器高21.2cmと一まわり小さいが、今までの短頸の甕より胴部によくらみを持ち、底面も7.3cmと安定している。厚手で特に底は2cm程の厚みを持つ。内外共にふい黄橙色で褐鉄鉱の混入の見られる土目である。外面はやはり剥落し荒れている。

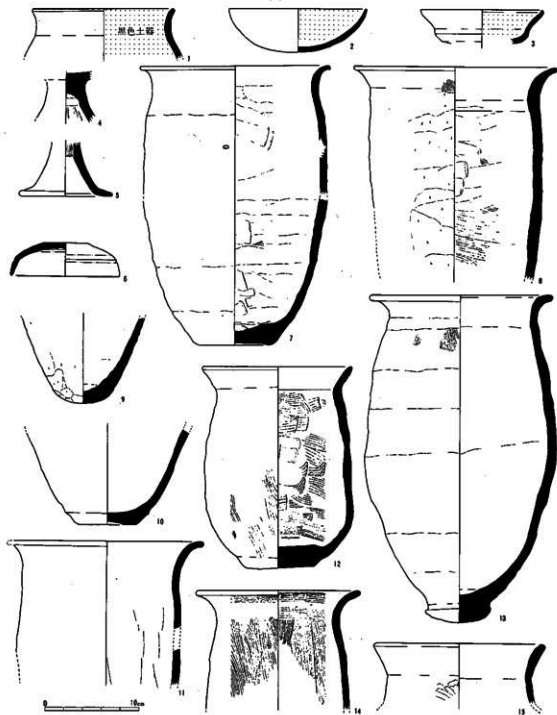


図80 14号住居址出土遺物(1:4)

外面の胴部は縦のハケメのち縦のナデが見られ上部へ行くほどナデはいいである。口縁部からのハケメの後ヨコナデがなされている。底部はへうで荒いナデが見られる。内部もにぶい黄橙色である。内部口縁部はヨコナデ、胴部は逆時計回転順に浅いハケメがつけられている。底は平でユビナデである。

同じ刷毛目紋様のついた甕(4)は北西隅からも出土し、口縁が17.4cmと計測されるが、ごく一部の出土で全体は確定できない。外面明黄褐色で石英、長石粒が目立つが(8)、(7)よりわずかで表面も荒れは少ない。外面は口縁部は横のハケメの後ヨコナデしてあり、胴部は縦のハケメをほどこしてある。内面は、にぶい黄橙色で口縁部を削り横にハケメをしたあとヨコナデをしてあり、胴部も押えや削りのあと、縦のハケメが逆時計回転順に着けられている。

住居地の北西部から出土したこれら甕の外には、黒色土器の壺(1)の口縁部あたりが出土している。口径15.2cmで頸部が少し内にくれ胴部のはり出しを思わせる肩のところで欠けるごく一部の出土である。外面はにぶい橙であり、口縁部は横のヘラミガキで肩部以下はヘラケズリの後ヨコナデがしてある。内面はすべらかで黒色であり、口縁部に横のヘラミガキがあり、肩部以下は縦のヘラミガキが見られる。

その外、ごく一部であるが、高杯の脚部が、2個体出土している。高杯(4)は、下部を欠き杯との接合部分を残し、外面にぶい橙で、内面は黒色土器である。混入材として褐鉄鉱が見られる。外面は縦のヘラミガキで杯との接合部はナデであり、内部はナデで工具のあたった痕がある。

底面を残す高杯脚部(5)は底径が10.0cmと計測され、脚高が5.7cmと見られる。内外共に橙色であるが土目に褐鉄鉱の茶が見られる。外面はヘラミガキをしてあり、内面は全面ヘラケズリをしてある。

住居地北西部から出た他の小片は、あるいは剥落し灰や炭化物の付着したもの、あるいは橙色の小片など数多くあった。

住居地内で他の場所からの出土遺物としては、カマドの東より床面のほぼ同一地点から黒色土器の杯と須恵器の蓋杯の蓋のみの2点が出土しているのが目立つ。

黒色土器の杯は約2分の1が出土したが、外面にぶい黄橙色で底が円く、球の一部を思わせるように表面がよく磨いてある。内面は黒であるが、内の黒が口縁部ににじむようにはみ出している。胎土は比較的粗く、石英、褐鉄鉱、黒色鉱物が混る。外面は口縁部付近をのぞきヘラケズリで、後に全面ヘラミガキをし、内面もヘラミガキをほどこしてある。

須恵器の蓋杯の蓋(6)は、2つに割れて出土したが接合するとほぼ完形に復元できる。外面は、にぶい橙で、内面は褐色である。口縁より1.5cm程度上部に約4mm幅に浅い条線溝が彫り込まれている。内外共にいいにクロコナデをしてすべらかである。上部にヘラ切りが見られ、へうで2ヵ所ほどこすったあと、Xの記号がへうで書き込まれている。

(丸井 和比古)

(4) 17号住居址 (図81・82, 写真51)

遺構 A地区の東辺に位置し、16号住居地の北約6.5m離れている。16号住居址と切り合った河川址2が、17号の大部分にわたって切り合っており、河川の堆積物の上にカマドや住居のあるところから、河川の消滅後つくられた住居址であることがわかる。

プランは磁北より32°西に傾いた軸の方向が5.1mであり、それに直角の東西方向が5.3mと西辺、南辺をややはり出し、角にまるみをつけた正方形に近い形である。北壁の中央部にカマドの煙道と思われる部分が約50cmほど突出している。

河川址2と切り合っていないのは南東隅の一部で全体の90%近くは河川の中に構築されている。そのため、河川を埋めた砂質黒色土と住居址内の砂質黒色土が似て、北辺の壁の西側半分と、西辺の壁の切り合い部分の住居址の境の判別に苦勞をした。

この住居址の発掘上の特色は大量に出土した炭化物と、カマド付近にうず高く積まれた多量の灰と焼土とである。炭化物は木材の形態さえ残す大きな破片で(多くは栗材と判別)住居址内のいたるところに散乱し、焼失家屋であろう

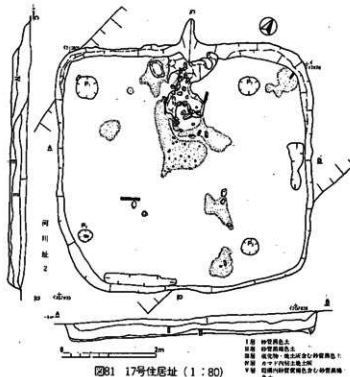


図81 17号住居址(1:80)

ことをうかがわせる。また、カマド付近の炭化物は、少片ながら量は殊更に多かった。

カマドの南側には南北約1m、東西幅80cm、厚さ30cm余にわたって焼土と灰の塊りが確認された。この焼土と灰は住居址内の床面にも広く堆積しているが(第Ⅲ層)、これはこの住居が北から埋没していくときカマド付近に堆積したものが広がっていったものと見られる。これだけの多量の炭と灰と焼土は、単に焼失家屋の痕跡だけでなく、この住居に居住していた者が火を用いた仕事をしていただのではないかと推測させるに十分である。鍛冶屋とするには鉄片などが確認できなかった。

埋没はその後砂質黒褐色土(Ⅱ層)砂質黒色土と埋まり、周囲の旧河川敷の土砂が流入したため住居の境目が判然としなくなったということであろう。

住居址の検出面から床面までの深さは35cm~40cmで、床面は全体に軟弱で多少の凹凸はあるがほぼ平坦といってよい。壁面は北辺と西辺がやや傾斜しているもの他はほぼ垂直でやわらかい。南壁の西寄りと東壁中程あたりに周溝が確められたが、壁を回すところまでは確認できなかった。特に西壁あたりは河川址と黒色土が似て周溝はおろか床面の見えわめさえ難しかった。

床面にP1~P4と4つのピットが見られ、主柱穴としての位置もほぼよい。ことに北のP1、P2の2つのピットが南側の2つより一まわり大きいことに注目したい。

カマドは北壁の中央部分に位置している。大きな石の組み合わせは見られず、拳大の石またはそれより少し大きめの石が粘土の中に埋もれながら無数に出土した。小さな石と粘土とで構築したカマドであろうか。カマドは屋内にあり、煙道が屋外へのびて北方へ幅40cm、長さ50cmの三角の溝状部分が認められた。カマドは壊れて粘土が複雑な形で出土し、そのまわりは灰と焼土が堆積し炭が多数散乱するのが見られた。

遺物 炭化物や灰や焼土が多く遺物は少数であった。

表面近い第1層より、須臾器の蓋環の蓋(2)のみが出土した。縁の一部を欠き4分の3程残っている。径が、約12cm、高さ4cmの表面にクロロメが見え、内側にクロロの条線がはっきりしている。

外側の縁より1.5cmほど上に幅7mm深さ2mm程の太い溝状の条線が彫られている。指をかけた蓋をとり

やすくした溝のように思う。蓋の上部は回転ヘラキリであり、色は灰色である。

その他、土師器の甕(1)の口縁部が出土した。

あと散乱して出土した土師器の小片も厚手で、土目の粗い長石の目立った土器が多い。

カマド内より須恵器の小さな壺の口縁部が出土したが、これも一片のみである。(荒井和比古)

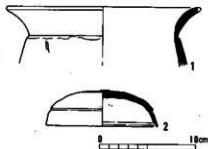


図82 17号住居址出土遺物(1:4)

(2) 50号住居址(図83・84, 写真27)

遺構 50号住居址は、農具川地区の北の7つの住居址群の1つである。河川敷となる予定地の北部には西から東へ流れたと思われる幅6m~10mの河川址3があり、その川のきわより北へ約7m離れ、西に53、56号住居址、北西に52号、北に51号と接し、東にやや離れ54・57号があり、これら住居址群のまん中にあたる。

ブルドーザーで表土除去作業により上部がほとんど、けずりとられ、床面のみが確認されたが、上部まであれば西北隅の壁部分はわずかであろうが、52号住居址の南東隅と切り合っていたであろうと思われる。

プランは南北6.9m東西6.6mと1群の中では比較的大きい。北壁中央付近に焼土、粘土の堆積が見られ、北にカマドがあったことが推定される。このカマドを中心とする南北の中央軸はほぼ北向きで、わずかに磁北より10°西に傾いている。形状は、隅をわずかに丸くしたほぼ方形である。

壁高は上部が削られて不明。床面は平で砂の層の中に造られた住居なので一様に軟弱である。周溝は見当たらない。

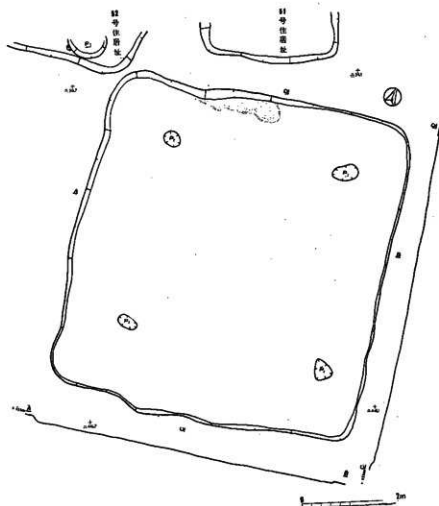


図83 50号住居址(1:80)

ビットは柱穴に擬せられるP1～P4の4つがあり、4つ共によい位置にあり、直径30～40cmの円い穴である。

遺物 ごくわずかしが出土しない。北西のビット(P2)近くの床面から甕(1)の口縁の一部が出土した。シャモットがいくらか混ぜられて厚手であり、全体明褐色である。

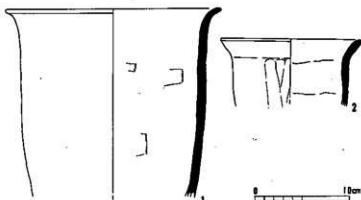


図84 50号住居址出土遺物(1:4)

表面にすずが附着している。表面は上から下へのナデが見られ頸部はヨコナデである。内側はへらでナデられその底が残っている。計測すると口径17cm、口縁約2cmがいくらかくびれ下に広がり、胴部の最大径約19cmの短形の甕で下部は失われている。

また、床面からこれより小さい甕(2)の口縁部口径約15cmのものが出土している。これもシャモットがいくらか混ぜられた厚手の土師器である。口縁より7cm部分が残り下部を欠いている。表面は赤褐色でへらで縦にナデであるが、頸部より上はヨコナデが認められる。内部は褐色でへらのヨコナデが見られる。

その他床面から、甕の破片と思われるものなどを含めて土師器の小片が40点程出土している。共に厚手のものの多いのが特徴である。

(荒井 和比古)

(43) 60号住居址(B地区1号, 図85)

遺構 周辺の水田より微高地に発見されたB地区の遺構の中で、竪穴住居址はこの60号住居址が唯一である。B地区を東西に横切る溝状遺構より南、約6m、溝状遺構を横切って南北に屈曲して流れる川辺より約2m離れてこの住居址はある。

すでに耕作時において住居址の上層部は耕土となって攪拌され、耕土を取りのぞいたあと、7～8cmのところには床面が認められた、すでに破壊された住居址である。従って埋土の状況も不明で遺物も少なかった。

プランは南北4m、東西4.4m北東隅がややまるいだけで角もはっきりした方形の住居である。北壁中央よりやや西寄りにカマドがあり、その部分だけ約10cmまるく北に出る。カマドは北であるが、住居址の主軸方向は磁北より38°西にかたむいている。

壁は上部がこわれ深さは判明しないが、残された部分を見ると斜傾がなだらかである。

床面は微粒子の砂地であり、ほぼ平坦でよく踏み固められている。

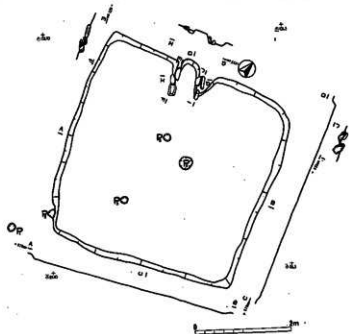


図85 60号住居址(B地区1号 1:80)

第三章 遺構と遺物

周溝は確認できない。ピットは5カ所に認められるが、いずれも住居址と切り合いのピットであり住居址中央部に直径25cmほどのまるいピットがある。その西北西約40cmと南西125cm離れたところに直径12cm程の小さいピットがそれぞれ確認された。また、この住居址と直接に関連あるとかは明確ではないが「屋外ピット」として、住居址南西隅の近くの壁ぎわに1つ、そして同じ南西隅よりさらに南西約80cm離れたところに1つ、やはり直径12cm程度の小さいピットが認められた。

カマドは北壁中央よりやや西寄りにあるが石組みも破壊されて6個程の石と粘土がわずか残されるにすぎない。石は焚口に向けて左右3個ずつ直径12~13cmで高さ20cm内外の大きさのもので、すでに寝かされている。粘土の厚みも一部が残されるが外形は焚口が約80cm、壁ぎわで約1mの幅であり、奥行きは約70cmである。燃焼部にあたる内形は、焚口から奥まで約30cm幅で、奥行きは約70cm、壁をつき破って10cm外へ張り出している。焼土、灰等もよく確認できず、石の残存と粘土だけが、カマドの存在を示している。

遺物 ほとんどなく土器片12片だけが出土しているにすぎない。11片はまったくの少片であり、5×6cmの1片は甕の一部と思われ約8mmの厚手の土師器であり、これはカマドの突端から出土した。

(荒井和比古)

6 第 6 期

(4) 20号住居址 (図86・87, 写真8・52)

遺構 20号住居址はA地区のほぼ中央において検出され、東西4.8m南北4m住居址の検出面からの深さ40cmで、やや不整な長方形のプランをしている。住居内部の堆積土は甕層まで確認されたが、住居廃絶後第1回は東側から土砂の流入があり、その後西北方から2回に及ぶ強い流れ込みによって埋没したものと考えられた。住居床面は西側は固く踏まれているも、東側は礫層に当たっていたことから、凹凸の多いものとなる。北・西・南の各壁の下に部分的に周溝が設けられていた。柱穴址は不明で屋外施設も判明しない。カマドは東壁中央に設けられていたと思われる痕跡があり、若干の石と粘土が遺存し、下部に焼土と粘土の混合層が確認された。

遺物 土器は、口径13cm、高さ4cmの須恵器の杯(5)と、土師器の甕の大形破片が2個体の他多数の小破片が出土した。甕(2)は口縁部から斜めに短かい頸が立上がり、長い胴の部分と対称をなして、所謂短頸長胴の形をとる。内外両面にナデを外面に荒いケズリ痕が残る。器壁は5mmで色調は明るい茶褐色を帯る。甕(1)は甕(2)とほぼ同形でやや厚手である。甕(4)は小形の甕で胴部によくらみもち、内外面にナデが行われた後、内面は横

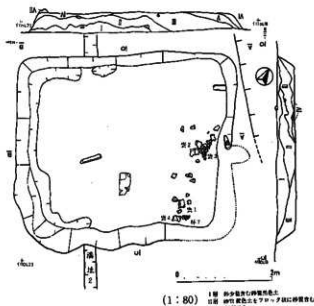


図86 20号住居址 (1:80)

条痕を付けている。平底の甕(3)の破片にも同様の条痕が外面に付けられている。これらの中で土師器においては、外面に煤の付着しているものが多い。

(原田 暁)

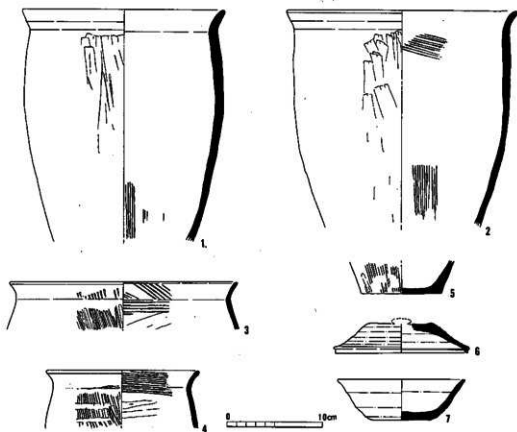


図267 20号住居址出土遺物(1:4)

(45) 51号住居址(図88・89・90, 写真27)

遺構 51号住居址は、農具川地区で検出され、南北3 m東西2.8 mで北側が弓形に張る形の隅丸長方形プランをもつ。土層の地積はI層が大部分で、内部床面より上にぎっしりと集められた礫と土の混合に充たされていて、他の層は、南壁に沿ってII層とIII層が地積北壁西北よりに設けられたカマドの痕跡からIV層が確認された状況である。I層については、明らかに人為的に投入されたものであるが、類例はA地区の27号住居址にも見られた。この付近は礫の多い地帯であり、竪穴を掘る際に相当な量が出るがあったと考える。そうした時に廃屋の場所に集められたことも想像される。次に内部の床は凹凸が多くピットや周溝などは確認できなかった。カマドは北壁中央の西よりに痕跡があり、焼けた石

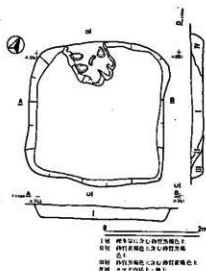


図268 51号住居址(1:80)

が少し出土したのみである。

遺物 堆積土の中に土師器と須恵器の小片が少量あり中に白瓷の坏破片(1)が1点ある。原形は口径11.5cm、器高3cmほどの小形である。底部は低い台がまわり幾分高い。糸切り痕のはっきりとした遺物である。

(原田 曠)



図90 51号住居址出土遺物(1:4)

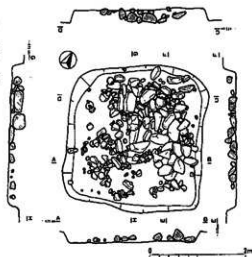


図89 51号住居址集石状況(1:80)

(40) 55号住居址(図91・92, 写真29・65)

遺構 55号住居址は、農具川地区で検出された竪穴で、南北4.3m、東西は北側が4.3m、南側4.7mと不整な台形をとるプランである。竪穴住居址の検出面からの深さは10~15cm、壁の状態は悪く崩落が甚しい。床面は礫が見えており、一部に粘質性の黄色土を敷いてあるのが見られる。カマドは北東の壁中央にその痕跡があるも形としては明らかではない。焼土はカマド址より床面中央まで広がっていた。ピットは5個確認され、内2個は主柱穴と見られるものである。

遺物 須恵器の甕の口縁部(3)は、口径22cm程と見られるもので、器厚6mmである。肩から胴へかけてどのような形か不明であるが、或は壺の口縁であったのかも判らない。焼成のよい灰色の器である。坏(6)と坏(5)は何れも須恵器の坏である。坏(6)の底部は糸切りがなされ、付高台とする。口縁へやや内湾気味に上る形とし口縁部を失っているため器高は不明であるが、口径は9cmを測る。坏(5)は平底で前者より大形である。底部からゆるく上り、口唇を外反気味におさえた形とする。口径14cm、器高4cmである。

(原田 曠)

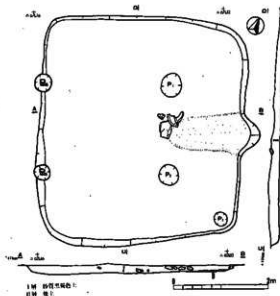


図91 55号住居址(1:80)

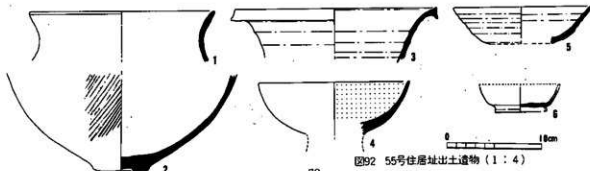


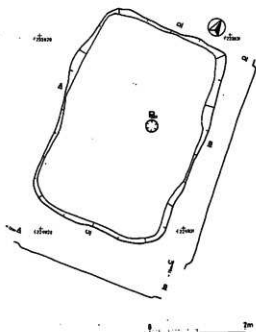
図92 55号住居址出土遺物(1:4)

7 時期不明住居址

(7) 21号住居址 (図93, 写真8)

遺構 21号住居址は、A地区の東北隅で19号住居址の北に発見され、南北4.4m、東西3.1mと長方形のプランをもつ。壁の深さは19号住居址と同様に、上部の堆積土を攪拌している為不明な点が多く、検出の際4cmであった。床面は礫層中に設けられ、人頭大の石が所々に見える状態であるが、踏み固められていて固い。周溝及び柱穴は確認されない。住居址中央にP204(直径40cm・深さ15cm)が切り合いどなって確認できているだけである。

遺物 床面から土師器の小破片がわずか出土したのみである。(原田 曠)



(8) 22号住居址 (図94, 写真8)

遺構 22号住居址は、A地区北東部に検出され、南北4.8m、東西4.3mの北壁が北へ弓形に張った形の長方形プランをもつ竪穴である。上部は耕作で攪拌され、住居址の検出面からの深さは10cm程である。

床面は礫層に掘込んだので北西側に小石が多く、残る部分は平坦ではあるがやや軟弱である。カマド及びビットなどは確認されない。

遺物 上部が攪拌されているので遺物は判然としない。(原田 曠)

図93 21号住居址 (1:80)

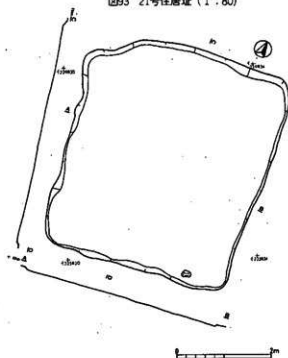


図94 22号住居址 (1:80)

(9) 28号住居址 (図95, 写真12)

遺構 28号住居址は、A地区の北部中央にあり、南北4.2m、東西3.6m、住居址の検出面からの深さ9cmの隅丸長方形のプランをもつ竪穴住居址である。竪穴内部は黄褐色と黒褐色の混合土により充満していた。床面は凹凸が一部あるも平坦で、やや軟弱気味である。床の外周に幅15~20cm、深さ1~5cmの周溝が巡らされ、柱穴3個の他小ビット2個があり、床中央北よりに礫の多い所があって、ここに炭化物が多く発見されたが、或は炉址であったかも知れない。カマドはなく外部施設も判明しない。28号住居址と同時にここで建物址25が検出されたが、これは28号住居廃絶後に建てられたと推定される。

遺物 28号住居址の遺物としては、床面及び周溝内よりわずかに土師器の破片を得たのみである。(原田 曠)

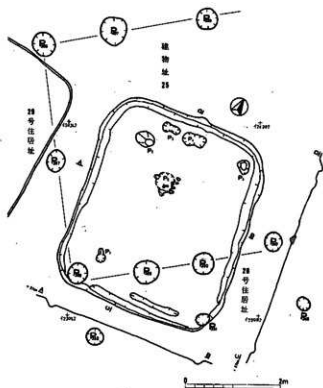


図95 28号住居址 (1:80)

第2節 建物址と建物址支柱ピット内出土遺物

借馬遺跡からは、竪穴住居址同様に昨年発刊された『借馬遺跡Ⅰ』で報告された4個の建物址に続き、本年は、A地区で23個、B地区で1個、計28個の建物址が検出された。本年度検出された24個の建物址の営なまれていた時期を、建物址の柱穴内に落ち込んでいた土と遺物から判断すると2期に大別できる。その第1期は建物址27が該当し、4Cを前後する時期にあたると思われる遺物と茶褐色の土が落ち込んでいる。第2期については、借馬遺跡の土層分布(図II-3参照)に変化が著しく、落ち込んでいる土により時期を大別するのはこんなんであった事と、落ち込んでいた遺物についても、建物址20の裏1個体分をのぞいては時期を判断する資料にならなかったため、一括とした。また、竪穴住居址と切り合い関係のあるものもある事や、農具川地区からは1個の建物址も検出されないうため、今後の解明に期待するものである。

以下時期別に概要を述べる。

1 第1期

(1) 建物址27(図1・2、写真38)

遺構 本址はA地区北西に集中する竪穴住居址、建物址、大型ピット・ピット群の内に位置し、長軸方向を磁北より16°西へ向けている。北及び、南列には中央に位置する柱穴がみられず2本組、その他は3本組である。南北における柱穴の間隔は1.8m~1.9m、東西は2.8m~3mである。梁間1間、桁行2間東西2.8m、南北3.4mの建物となる。

柱穴にはいずれも柱痕が残り、落ち込んでいる土は褐色に近い黒褐色土が主となっている。検出面での比高差はほとんどなく柱穴の検出面から底面までの深さは、深いもので40cm、浅いもので30cmという数値であった。

遺物 本址支柱ビットの内P429から土師器の器台(1)と器台(又は高坏)の脚部(2)、埴の底部(4)が出土し、P427からは、土師器の埴(3)の口縁部、P400からは、土師器の埴(5)の口縁部が出土している。

器台(1)は、P429内第1層から出土している(写真38-3)内外面とも黄褐色で混入材には、砂、石英がみられる。調整は外面では口縁部はヨコナデ、体部はオサエ、ヨコナデの後ナデが加えられている。脚部接合部はハケメの後ヨコナデ、脚部はヨコナデである。内面は口縁部はヨコナデ、体部はナデ、脚部の接合部はナデが加えられ、脚部はヘラケズリの後ナデが加えられているが、末端ほどナデが甘い。透孔は1カ所確認できるが数は不明である。

埴(5)は出土状況は不明であるが外面は暗赤褐色、内面は橙色、器内は橙～黒褐色で混入材は金雲母、石英、長石がみられる。胴部は下方にタテのハケメの後上方にヨコ方向のハケメが加えられ、口縁部は胴部のヨコ方向へのハケメの後に、ヨコナデが加えられている。内面は口縁部がヨコナデ、頸部は工具によるヨコナデ、胴部はオサエの後上方はヨコナデ、下方はナデとなっている。胴上部と口縁部だけの出土で、底部についての器形は不明であるが、包含層内の遺物にとり上げられた、台付き埴(図3-10-1)に類似したものと思われる。

(篠崎 健一郎)

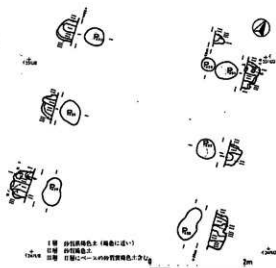


図1 建物址27 (1:60)

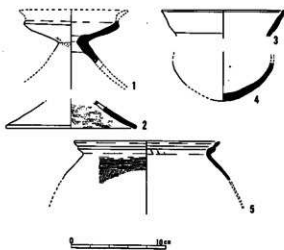


図2 建物址27出土遺物1, 2, 4 P429, 3 P427, 5 P400 (1:4)

2 第2期

(2) 建物址 20 (図3・4 写真36)

遺構 本址の支柱ビットの中に、約1個分の埴が落ちこんでいたので、第2期建物址の中で特徴あるものとして初めに述べることにした。

本址はA地区調査区域の最北端に5Cの竪穴住居址群とともにある。

南北方向に3箇所柱穴が1.8~1.9mの間隔をおいて並び、3.1mをへだてて対称的な位置に3箇所が並ぶ他にあるいは補助的なものかとみられる柱穴が東北に1箇所、南東に1箇所ある。検出面からの柱穴の深さはどれも30cmほどで、落ち込んでいる土は漆黒色から黒色土が主で中には柱痕を見ることのできるものもあ

る。建物の長軸方向は、磁北より18°西で規模は南北3.8m、東西3.1m梁間1間、桁行2間である。検出面の比高差はほとんどないが、やや南北間では北側が高くなっていた。

遺物 本址主柱内ビットの内、P 286の内からはほぼ1個体分の土師器の甕が出土している。

甕(1)は外面は、にぶい黄橙色で口縁部から胴上半は風化ははげしいが、タテまたはヨコ方向のハケメが確認できる。胴部下半～底部はナデが加えられている。内面は黄橙色でやや左上がりが多いがヨコを基本としたハケメで、逆時計回転順で底部から上方へ、らせん状に加えてあるらしい。本址の年代はもちろんの事、建物址の年代を決めるのに有力な資料であるが、他の建物址からの出土例は土器片しかない。(藤崎健一郎)

(3) 建物址 5 (図5、写真31)

遺構 本址は、河川址1の西側に検出された統計4本の竪立柱址である。各柱穴の深さは、20～25cmほどで漆黒色の土が主に落ち込んでいた、長軸方向は磁北より37°西で柱列はいずれも2本組である。柱穴の南北における間隔は3m東西は2.9～3.2mである、梁間1間、桁行1間の建物となる。P27の回りには小さなビットが検出されている。あるいは補助的なものかともみられる。

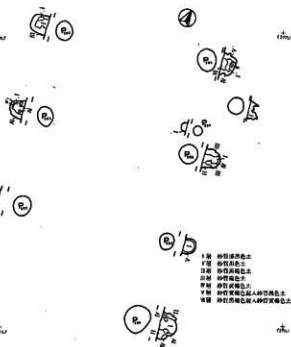
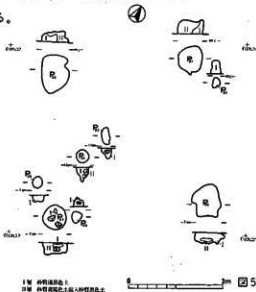


図3 建物址20 (1:80)

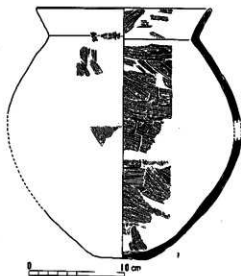


図4 建物址20出土遺物P286 (1:4)

(4) 建物址6 (図6 写真31)

遺構 本址は、建物址5と河川址1をはさむ対岸に検出された総計8本の掘立柱址である。各柱穴の規模は70cm前後で、検出面からの深さはいずれも60cmほどで、漆黒色の土が主に落ち込んでいた。長軸方向は磁北より40°西で、柱列はいずれも3本組である。柱穴の南北における間隔は、2.6~2.7m、東西は1.7~2mで、梁間2間、桁行1間である。南北5.1~5.3m、東北3.4~3.8mの建物となる。なおP126より土師器環の口縁が出土している。

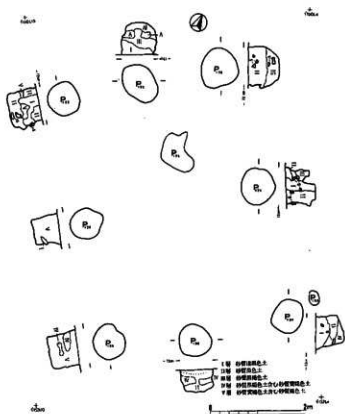


図6 建物址6 (1:80)

(5) 建物址7 (図7, 写真31)

遺構 本址は、建物址5の下に3個南北に並ぶ建物址のまん中に位置し、総計6本の掘立柱址である。各柱穴の規模は20~50cm前後で、検出面からの深さは35~40cm程度である。漆黒色土が主に落ち込んでいた。長軸方向は磁北より34°西で柱列は北及び南列には中央に位置する柱穴が見られない。しかし南列の中央やや南よりにP90があり、補助的または中央の柱の役をはたしていたのかもしれない。柱穴の南北の間隔は1.4~1.5m、東西は1.7~2mで梁間1間、桁行2間である。南北2.8~3m、東西2.5~2.6mの建物となる。

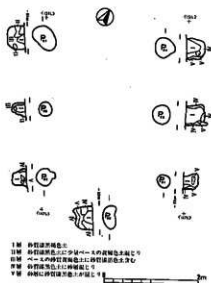


図7 建物址7 (1:80)

(6) 建物址 8 (図8, 写真32)

遺構 本址は建物址7の、南となりに検出された、総計6本の孤立柱址である。各柱穴の規模は20~30cm前後で、検出面からの深さは両角の4つは30~35cmと深く、中央に位置する柱穴は20cmほどで浅い。落ち込んでいる土は漆黒色が主となっている。長軸方向は磁北より50°西で柱列は東列及び西列には中央に柱穴が見られない。P87の南にP86があるが、小さく浅い柱穴である、はたして補助的なものであったかはわからない。柱穴の南北の間隔は2.3~2.4m、東西は1.2~1.3mで梁間1間、桁行2間である。南北2.2~2.3m、東西2.4~2.6mの建物となる。

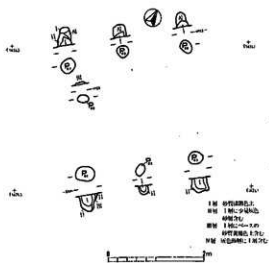


図8 建物址8 (1:80)

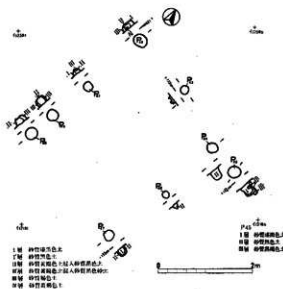


図9 建物址9 (1:80)

(7) 建物址 9 (図9, 写真32)

遺構 本址はA地区の最南端の建物址群の中に検出された総計8本の孤立柱址である。各柱穴の規模は25cm前後で検出面からの深さは、10cm程度でこれでは柱が倒れてしまいそうである。機械力により上層を除去したためであると思われる。落ち込んでいる土は漆黒色が主となっている。長軸方向は磁北より19°東で、柱列は西側4本、北列と東列は3本、南列は中央に柱穴が見られず、2本と少し変わった配列であり、西列の1本P40は対応する柱穴が無い。またP44の東にP45が検出されているが、これは補助的なものと考えてもおかしくない。

北列の3本もP42~P45をみ通すと、やや北側にずれているやや配列のおかしな建物址である。柱穴の間隔は南北でP40の柱穴を考えなければ1.4~1.5m、東西では1.3~1.4m、南列の東西では2.7m、梁間北列で2間、南列で1間、桁行西列で3間、東列で2間、南北2.8~3m、東西2.7mの建物となる。

(8) 建物址 10 (図10, 写真32)

遺構 本址はA地区最南端に検出された建物址で形も整い重圧感のあるもので、総計10本の掘立柱址である。各柱穴の規模は60cm前後で検出面からの深さは55cm程度あり、黒色土が主に落ち込んでいた。長軸方向は磁北を向き柱列は北と南列で3本、その他は4本組である。柱穴間隔は南北で1.5～1.6m、東西で1.8mで梁間2間、桁行3間、南北4.7m、東西3.5mの建物となり、この柱穴の配列の上にはどのような上屋があったか気にかかる所である。P85からは土師器の片が出土している。

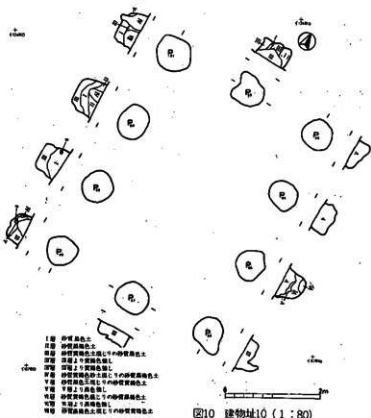


図10 建物址10 (1:80)

(9) 建物址 11 (図11, 写真33)

遺構 本址はA地区南の建物址群の中でも中心に位置し、総計9本の掘立柱址である。各柱穴の規模は45cm前後で、検出面からの深さは30cm程度である。漆黒色土が主に落ち込んでいる。長軸方向は磁北より25°東で柱列は西及び東列は4本組、北列は3本組、南列には中央にあたる柱穴が無く2本組である。その他に補助的なものか用途のわからないビットがP61の西となり1つ、P58の南となり1つ検出されている。また、北列の中央にあたるP64については、他の柱穴に比べて浅いのが特徴である。柱穴の間隔は南北で1.6～1.7m、東西は北列で1.2～1.4m、南列で2.8m、梁間北列2間、南列1間、桁行南北で3間、南北4.7m、東西2.7～2.8mの建物となる。P48からは土師器の片が出土している。

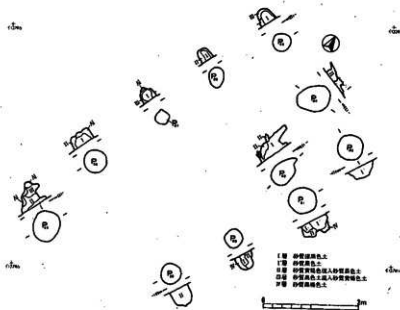


図11 建物址11 (1:80)

(10) 建物址 12 (図12, 写真33)

遺構 本址は、A地区南の建物址群の中でいちばん北に位置し、総計8本の掘立柱址である。各柱穴の規模は20cm前後で、検出面からの深さも20cm程度。落ち込んだ土は漆黒色が主となっている。長軸方向は磁北より31°西で、柱列はいずれも3本組ではあるが、南列と北列は両角の柱穴から見通すと直線よりやや外側に出ている。またP78とP76の間には小さく浅いピットが検出されているが、本址との関係はわからない。柱穴の間隔は南と北列で1.1~1.2m、東と西列で中央の柱穴を柱列に入ると1.1~1.2m、柱列に入れないと2.1~2.3mとなり、梁間も同様に入ると2間、入れないと1間で、南北2.2~2.3m、東西2.1~2.3mの建物となる。やはり北と南列の中央に検出された柱穴は、本址に一体のものと考えてよいと思われる。

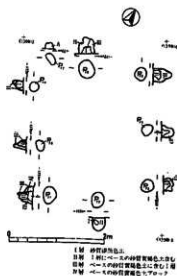


図12 建物址12 (1:80)

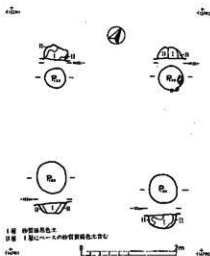


図13 建物址13 (1:80)

(11) 建物址 13 (図13, 写真33)

遺構 本址はA地区中央より南東方向の土を除去した盛土近くから検出された総数4本の掘立柱址である。各柱穴の規模は、40~60cm前後で、検出面からの深さは20cm程度と柱穴の規模の割合には浅く、上層を削られているものと思われる。落ち込んでいる土は漆黒色土が主となり、長軸方向を磁北より38°東に向いている。柱列はいずれも2本組で、柱間隔は南北2.0~2.1m、東西2.4mとやや東西が広いとも思われるが、ほぼ正方形である。梁間1間、桁行1間の建物となる。

(12) 建物址 14 (図14, 写真34)

遺構 本址は建物址13の北となりで、総計8本の掘立柱址である。各柱穴の規模は70cm前後で検出面からの深さは40cm程度だが、P114、P121は、他の柱穴の掘り込んだ形とはやや違っている。落ち込んでいた土は黒褐色土が主となっている。長軸方向は磁北を向いており、柱列は各列3本組となっている。柱穴間隔は南北1.9~2m、東西1.7~2.0m、梁間2間、桁行2間、南北3.9m、東西4mとほぼ正方形に近い建物址となる。

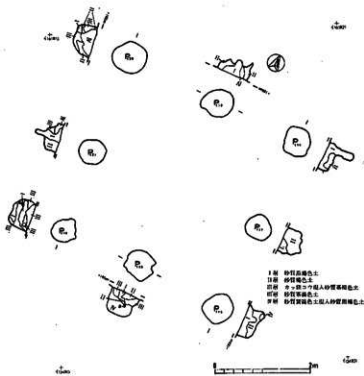


図14 建物址14 (1:80)

(13) 建物址 15 (図15, 写真34)

遺構 本址はA地区中央西側盛土近く、河川1の東岸にあり、総計6本の独立柱址である。各柱穴の規模は50cm前後で、検出面からの深さは50cm程度である。落ち込んでいる土は漆黒色土が主であったが、P194の断面を掘り割る時は、硬層を掘り込んでいるためシャベルでも時間がかかり苦勞した。どのような工具を用いたのかは借馬遺跡からは何の資料も出土しなかったが、当時の人々は今以上に苦勞があったものであろう。

なお本址は長軸方向を磁北より34°東に向け支柱列は北と南列は3本組、東と西は中央に位置する柱穴が無く、2本組であるがP196の北にP197南に小規模のP195がある。これらはいずれも本址との関係は不明である。補助的なものであったかもしれない。柱穴の南北の間隔は3.2~3.4m東西は1.6~1.7mで梁間1間、桁行2間、南北3.4m東西3.4mと正方形の建物となる。この建物址のP192、P193、P196、P197、P199の各柱穴からは土師器の小片が出土している。



図15 建物址15 (1:80)

(14) 建物址 16 (図16, 写真34)

遺構 本址はA地区中央やや南よりに位置したビット群の北角にある。このビット群の中にも建物址と考えられる柱列があるが、建物址の資料が多く検出されたので、むりに柱列を結びつけなかった。柱穴の総数は9本で、各柱穴の規模は40cm前後である。検出面での深さはP171をのぞき深いもので50cm、その他は25cm程度であり、黒色土が主となり落ち込んでいた。長軸は磁北より59°東で、南列は4本組ではあるがP171は10cm程度と深く補助柱的性格かあるいは建物とは無関係なものと考えたとすべの列は3本組となる。柱穴間が同様にP171を含めて考えると南列で1~1.8m、南と北列で含めなければ1.5~2.1m、ややP176とP175の間が長く西列と東列は1.4mである。梁間2間、桁行南列で4間北列で2間、南北2.9~3m、東西3.8~4mの建物となる。

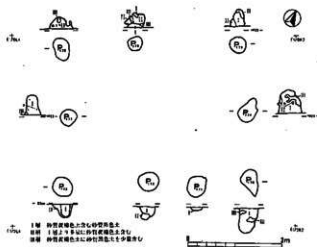


図16 建物址16 (1:80)

(15) 建物址 17 (図17, 写真35)

遺構 本址はA地区北東端の溝趾1やや南よりの盛土近くから建物址18と2個並んで検出されたもので、総数8本の掘立柱址である。各柱穴の規模は40cm前後で、検出面からの深さは30cm程度あり漆黒色の土が落ち込んでいた。長軸方向は磁北より40°西で、西列の中央柱穴が2カ所あり、補助的なものかあるいは建て替えとも、穴の掘りなおしとも考えられる。その西列中央2カ所の柱穴を1本の柱と考えると、各列3本組となり、柱穴間隔も1.6~1.7m 梁間2間、桁行2間、南北3.4m、東西3.3~3.5mのほぼ正方形の建物となる。

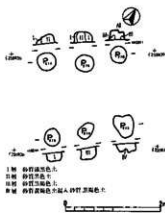


図18 建物址18 (1:80)

(17) 建物址 19 (図19, 写真35)

遺構 本址はA地区、北西端の竪穴住居址群建物址群の中に25・26・27号住居址にはさまれた位置に検出された総計8本の掘立柱址で、各柱穴の規模は50cm前後で、検出面からの深さは20~30cm程度である。落ち込んでいる土は漆黒色を主としている。長軸方向は磁北を示す。柱列は南と北列では2本組、東列と西列は4本組となっているが、東列の南角のP309はやや内側に入っている。南列の2本はもしかすると、建物址の補助的なものか、または関係のない柱列になるかはあきらかでない。柱穴の間隔は南北で1.4~1.6m、東西は1.8~2.2m、梁間1間、桁行3間である。南北4.5~4.7m、東西1.8~2.4mの建物となる。

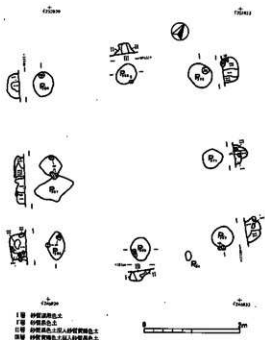


図17 建物址17 (1:80)

(16) 建物址 18 (図18, 写真35)

遺構 本址はA地区でいちばん小さな建物址で、長軸を磁北より55°東に向ける総計6本の掘立柱址である。各柱穴の規模は30cm前後で、検出面からの深さは20cm程度である。落ち込んでいる土は漆黒色が主となっている。柱列は東と西列では中央の柱穴が無く、2本組、北と南列は3本組であるが、建物の規模からゆくと東と西列で中央の柱穴が無くても十分持ちこたえられると思う。柱穴間隔は、南北で1.4~1.5m、東西で0.7~0.8m、梁間1間、桁行2間、1.5~1.6mのほぼ正方形の小規模建物となる。

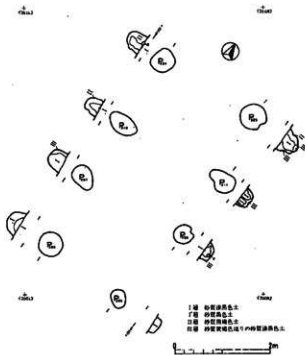


図19 建物址19 (1:80)

(18) 建物址 21 (図20, 写真36)

遺構 本址はA地区ほぼ中央よりの、河川址2の西岸に検出された総計6本の掘立柱址である。各柱穴の規模は35cm前後で、検出面からの深さは25cm程度で黄褐色土が混入の黒色土が主に落ち込んでいたが、黄褐色土は柱穴を掘った時ベースの黄褐色土が混入したものと思われる。長軸方向は磁北より26°西で、柱列は南と北で2本組、東と西で3本組であるが、東列の中央の柱穴はやや東側へ飛び出ている。柱穴の間隔は南北で、1~1.2m、東西で2~2.4m 梁間1間、桁行2間である。南北2.2~2.5m、東西2.1~2.3mの建物となる。

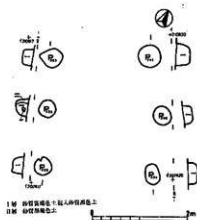


図20 建物址21 (1:80)

(19) 建物址 22 (図21, 写真36)

遺構 本址はA地区中央やや北西よりに検出された、総計6本の掘立柱址である。すぐ南に33号住居址が検出され、切り合い関係があるものと思われるが、直接今回の調査では前後関係は不明であった。長軸方向は磁北より73°東で、柱列は東列と西列で2本組、北と南列では3本組となっている。各柱穴の規模は30cm前後で、検出面からの深さは40cm程度、柱穴の間隔は南北で3.3m、東西で2.6~2.8mである。北西角のP369の隣りに、P370が検出されているが、建物址との関係は不明である。梁間1間、桁行2間、南北3.4m、東西2.1~2.3mの建物址となる。遺物はP369・P373・P376・P377から土師器の小片が出土している。

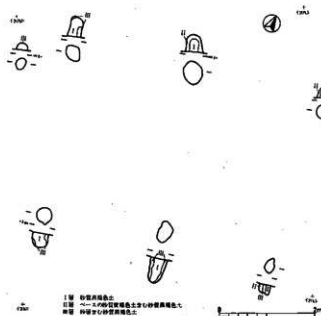


図21 建物址22 (1:80)

(20) 建物址 23 (図22, 写真37)

遺構 本址はA地区ほぼ中央に検出された総計5本の掘立柱址である。各柱穴の規模は40cm前後で、検出面からの深さは35cm程度である。主に黒褐色土が落ち込んでいた。しかし南列中央の柱穴はやや南側にずれて位置し、規模もやや小さく浅い。補助的なものか、本址と直接関係無いものかは明確でない。柱列の間隔は南北2~2.2m、東西は南列で1.0~1.2m、北列は2.5mである。梁間1間、桁行南列で2間、北列1間、南北2~2.2m、東西で2.3~2.5mの建物となる。

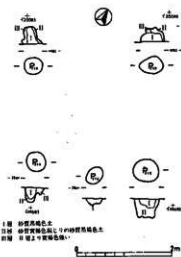
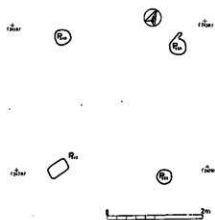


図22 建物址23 (1:80)

② 建物址 24 (図23、写真37)

遺構 本址は、A地区北西の住居址群の南東に検出された、総計4本の掘立柱址である。各柱穴の規模は30cm前後で、検出面からの深さはピットのたち割をしなかったため不明である。柱列は各2本組で、間隔も2.4～2.6mである。梁間1間、桁行1間、南北2.7m、東西2.3～2.4mのほぼ正方形の建物となる。



② 建物址 25 (図24、写真37)

図23 建物址24 (1:80)

遺構 本址はA地区北部中央に検出された28号・29号住居址と切り合い関係にある。総数12本の掘立柱址であるが、南列の南側に4本の小さい柱穴が検出されているが、並び具合といい方向といい、本址と何らかの関係があったのではないと思われるが、直接に関係を結びつける資料はなにもない。

各柱穴の規模は40cm程度で検出面からの深さは20cm程度と浅い。28・29号住居址も検出面から床面までの深さが浅い事から、この地区は、A地区内でもやや微高地であったのではないだろうか。しかし検出面での比高はあまり差は無い。長軸は磁北より49度東に向け、柱列は北と南列で3本組、東列で6本組、西列で5本組とやや対応する柱穴の無いものもあるが、借馬遺跡では最大の建物址である。柱穴の間

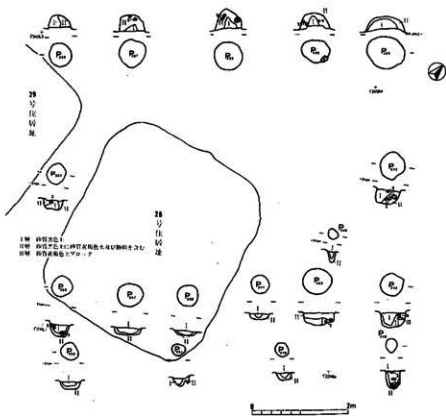


図24 建物址25 (1:80)

隔は西列で1.5～2m、東列で1.2～1.5m、北と南列で2.4m、梁間2間、桁行西列で4間、東列で5間、南北4.8m、東西6.8mという大きな建物となる。なお、落ち込んでいた土は黒色土が主であった。

また年代区分の中で、28号住居址が、5C以降のものと考えられるため、本址の年代も、28号住居址が営まれなくなった以降のものである事は明らかである。また、29号住居址との前後関係は明らかではないが、29号住居址の営まれていた時期が不明なため、28号・29号住居址と建物址25の資料を再検討すれば、だいぶ時期が明らかになると考えられる。

㉔ 建物址 26 (図25, 写真38)

遺構 本址は、A地区北西端の竪穴住居址、建物址、大型ピット、ピット群の中でも中心部に検出された総計6本の掘立柱址である。各柱穴の規模は40cm前後で検出面からの深さは35cm程度で、落ち込んでいる土は漆黒色が主であったが、他の建物址や他の漆黒とは違った感じを受けた。またP40・P46・P45と建物址とが関係するような形で検出されているが、P40・P45は漆黒色が強く本址の落ち込み土との違いが明らかであった。P46については赤褐色土に炭化物を含む土が落ち込んでいるため建物址との直接の関係は無いように思われる。炭化物が含まれているため野外の火を用いたピットとも考えられるが、はっきりとした資料の出土はなかった。用途不明の大形のピットである。

なお、本址の長軸は磁北より15°西で、柱列は北と南列で2本組、東と西列で3本組となっている。柱穴の間隔は南北で1.3～1.4m、東西で2.7m、梁間1間、桁行2間、南北で2.8m、東西2.7～2.8mと、ほぼ正方形の建物である。P40からは、土師器の壺の口縁が出土している。

㉕ 建物址 28 (B地区 建物址1 図26, 写真44)

遺構 本址はB地区発掘地区の北西端に検出された総数6本の掘立柱址である。各柱穴の規模は25cm前後で検出面からの深さは30cm程度、落ち込んでいる土は黒色土が主であった。砂の層に振り込んだものでこのままでは不安定な建物であっただろう。長軸方向は磁北より18°西で、各柱穴間隔は南と北列で1～1.1mの3本組、東と西は1.5m間隔で、2本組である。南北2.2m、東西1.5mの建物となる。

B地区では、竪穴住居址1軒、建物址1個の検出であるが、住居址と建物址との間に溝があり、同時期のものと考えられるとはしてどのような関係にあったのか興味のあるところである。

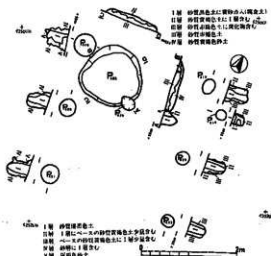


図25 建物址26 (1:80)

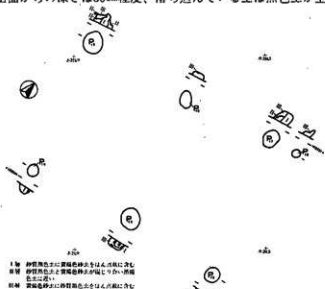


図26 建物址28 (B地区建物址1, 1:80)

第3節 その他の遺構と遺物

1 14号住居址出土骨類について

出土した骨類はすべて原形を止めず、細片状となっている。骨の表表面から髄腔まで一様に火焼により白色化したもので、クリーニングの際に表面から崩壊する脆弱な骨質となっている。細片は扁平骨や管状骨等の別なく、1・2cm程度の大きさに破損され、緻密質には細かな亀裂や変形が生じている。これらの骨片は住居址内に散布された状態で検出されたものであるが、遺存の性状は同程度であり、動物骨の一括した火焼骨と見做される。

骨片は頭骨部分の板状をなすものと、長管骨の部分が大半を占める。頭骨では側頭骨の岩様部、頭頂骨の破片等が識別できる程度である。管状骨の細片は、縦割りと横折により長方形を呈するものに、斜状の破砕痕を残すものがある。緻密質部が厚く堅緻な部位からは、大型動物の肢骨に相当する大きさを推測させる。その他に手根骨、足根骨が数個混在しているが、それぞれの関節面等をわずかに残す程度である。

以下、動物種が同定できた遺存骨のみを列記する。なお、他の骨もすべて下記の二種に限定されるものとみられるが、量的にわずかな資料のため、個体数や解体例についての観察は不可能である。

ホンシュウシカ

角座に近い骨幹の一部の角が約4cm、縦裂した状態で残る。表面は平滑となるが、下端では横位の断面がみられる。

肋骨左第1肋骨の肋骨頭から肋骨結節にかけての部分1個。

指骨 左前第4指の基節骨、完存のものが1個。

” 中節骨の遠位端のみのもの1個。

尾椎骨 末端に近い部分1個。

指骨はいずれも極めて小型であるが目立つ。

イノシシ

脊椎骨 後関節突起から棘突起にかけての部分で後縁を残す。

滑車切痕の一部とみられる小片。

距骨 右側で距骨頭を半分欠くが、骨体部はやゝ原形を保つ。

中手骨、または中足骨の遠位関節部が骨端線から離脱したもの。同じく骨体の遠位端の骨端線を含めて残し、他は欠失したもので、ともに骨端癒合に至らない幼獣の骨である。

指骨 中節骨の完存するもの1個。

(西沢 寿 晃)

2 炭化物について(表2)

本年度の発掘においては、住居址内の床面、炉、カマド内などから多量の炭化物が出土し、これ等は、当時の環境を知る上で、またとない重要な資料になるので、昨年に引き続き調べ分類した。炭による植物の分類は、その保存状態の悪いものや、著しく灰化しているものは困難であり、また、コナラとミズナラの区別は炭からはできず単にナラとしてある。カエデやサクラも、それぞれの属までしかなかった。針葉樹はアカマツ以外は非常に困難であった。灰も多量に出土しているので一通り全部双眼顕微鏡により調べたが、ガラスの0.5mm位の粒が見つかった程度で、アワやコメなどの炭化物は検出されなかった。炭の材質についての参考文献は存在しないので、昨年に引き続き、現生の木材を炭化させ、それをテキストとして比較

表2 竪穴住居址、建物址主柱別ピットその他のピット出土炭化物一覧

層位	クリ	ナラ	カエデ	サクラ	トチ	ケヤキ	その他の広葉樹	アカマツ	その他の針葉樹	他の遺物
11 位										
12 位										
14 位										
16 位		多								哺乳類の骨多量
17 位										シカの角1本、 鉄片、ガラス
18 位									カヤ	哺乳類の骨片
19 位					?					木の葉の碎片
20 位										木の葉(クワ)片
24 位										タンゴ
26 位										構造物はナラ材
27 位										
28 位			少							
29 位			少							
30 位			多							
31 位										
32 位									ヒノキ	
33 位	多				?		少			
34 位										
36 位		多								
37 位		多								
39 位			?							
42 位								?		
43 位										鳥の骨片
44 位								?		
45 位										
46 位										
47 位		少								
48 位									ヒノキ	
49 位									カヤ	
50 位								少		
51 位										
52 位		少								ガラス
55 位										
56 位									カヤ	
58 位										
建59No1										
建16(Pl.1)										
(P171)										
(P173)										
(P124)										
(P175)										
(P176)										
(P178)										
建20(Pl.1)								多	ヒノキ?	
P5										
P405										
P432									クルミ	クルミの葉の 破片1

同定する方法をとった。

(1) 植物以外の炭化物について

12号住居址と20号住居址から、軽くて硬くコークス状で、顕微鏡下ではクレータ状をしており、ピッチ光沢のあるものが出土した。追試実験として豚肉を炭化させたところ同一の状態となった。動物の肉塊の炭化物として間違いないと思う。なお、同状の炭化物は、昭和52年梓川村荒海渡遺跡でも出土しており、同報告書を参照されたい。

(2) まとめ

昨年より古い住居址が多かったけれども植物相から見ると環境はよく似ており、ナラ、クリを中心とした広葉樹林が広がり、その中にアカマツその他の針葉樹が混ざった樹林を構成しておたと推定される。本年度の方がやや針葉樹が多いが、注意すべき点としては、縄文、弥生時代に殆んど出土しないアカマツの炭が多く出土している点である。その他として、炭化物に混ざって、17号住居址からガラス化した灰の塊1個と、鉄片2個が、また、51号住居址からはガラス塊が出土した。このガラスは上記のもののようにカマド内で灰と長石が高温のため自然にできたものでなく、目的々に作られた色つきのガラスを使って加工作業中砂の中に落としたものとみられる。

3 使途不明の池状遺構(図1・2, 写真19・39・68)

遺構 A地区の西北方約40m程離れて新しく簡易水路を掘鑿した地点に発見された住居址群の、さらに西方10m程離れて円形の遺構が発見された。

すでに遺構の南の部分は、東西に流れる水路とその南方に造成された水田によって完全に破壊され、北側の一部が残されていた。遺構表面の形状は、大きな楕円の長径にあたるところに水路があってその北半分が残されたといった形である。長径の長さは約6.6m、短い方の半径が2.4m程であるが、西北部分が張り出し、北東部分がややふくらみが少なくなっている。

遺構の縁の部分は切り込まず、約15°～25°くらいの角度でゆるやかに中心部に向かって傾斜して下降している。断面から見ると深さ40cmほどの底の広い杯を置いたようになる。さらにその下に軸を同じにして1まわり小さな楕円の杯を置いたようになっており、下の部分は深さ30cm、長径約4m、短い方の半径は約1.6mである。

埋没された土層を見ると上の環状の湾曲に入った土層と下の環状の窪みの土層とは明瞭に異なる。上部(Ⅱ層)は赤褐色黒土層であるが、上土に近いほど黒色が濃く、深くなるにつれて赤褐色がつよくなる。遺構の縁近くの底面からは無数の炭片が一様に分散した形で広がっているのが見られた。

下部(Ⅲ層)は漆黒の腐蝕土層で下部にゆくにつれて横の水路の水も含んでいるのか、漆黒泥となっている。

この状態から推察するに深さ70cmになる湾曲した池または沼があって、何年にもわたってそこに生えた水中植物や水辺の植物が腐蝕しつつ底に沈澱し堆積していったものようである。そして深さ40cm程の時代がある程度続いた後、ある時から急速に池又は沼の埋没が始まり、浅くなるにつれて埋没の速度がおそく有り機物を含みつつ、あるいは水に浮いた炭片を含みつつ消滅していった過程を想像させる。

遺構の一ばん低い楕円状中心部より北西の方向に東西90cm、南北60cm、深さ40cmほどの土層が発見された。底は池状遺構の底部と一致する。この土層の中からのみ、池状遺構からは発見されなかった拳大の自然石が4個程掘り出された。これらの状況から土層は、この遺構の消滅後に掘られたものと考えられ、埋入土は遺構内の赤褐色土よりやや黒が濃かった。

遺構の南半分が破壊されているのでこの遺構全体がとらえられず、発掘された部分ほどの程度の部分なのか不明である。これが自然の池又は沼であったのか、人工の池であったのかも断定はしがたい。

遺物 この遺構からの遺物の出土状況も特異である。土層内をのぞいて石は皆無であり、土器は同一個体の破片が一かたまりになって3個体発見されたのが主で、土器の少片も少なく、中に高環の破片が1つ見られる程度である。

遺構の北東あたりの縁より30cm程入った深さ15cm程の

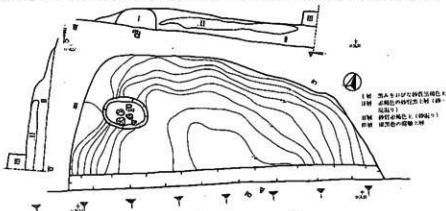


図1 使途不明の池状遺構 (1:80)

底面に、口縁を欠いた甕が出土した。腹部の径が13cmほどで厚手の土師器である。

その甕の出土した位置よりやや西寄りの、縁より40cmほど入った深さ20cm程の底面に弥生式土器の壺が割れ一かたまりとなって出土した。全体があざやかな赤褐色の土器である。計測するに口縁と底部を欠いて確定できないが、胴部の最大径が31cmで、高さは35cm程になろう大きな厚手の壺である。発見されたのは全体の5分の2程度であるが、胴部を大きくふくらませた屈曲をもつ壺であることがわかる。内部も表面も赤褐色だが表面一部に還元焼成の黒い部分が見られる。表面全体に横縞文が見られ、特に頸部より口縁にかけて濃くすだれ状紋様が描かれている。

また、遺構の縁より1m程入った深さ40cmの漆黒土層と赤褐色黒土層の境目に、弥生式土器の甕が、これもまた一かたまりとなって出土した。1個体の4分の1程度で口縁部を多く残し、下部から底を欠いて全体を確定できない。口径は21.8cm胴部の最大径24.4cmで頸部のややせびまった曲線をもつ。高さは30cm程度であろう。全体が明褐色で内部は褐色であり、表面は粗いくし目の上をナデである。胴部より上はすすが付いて黒くなっている。頸部より口縁にかけての約7cm程に、濃い横縞液状紋の紋様が見られる。

以上の3個体以外の土器の小片はほとんど土壌内からの出土で、池状遺構からは出土を見ない。また、漆黒土層内の遺物は皆無である。

(荒井 和比古)

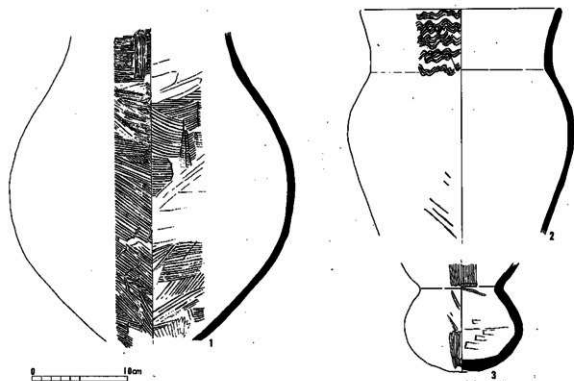


図2 用途不明の池状遺構出土遺物(1:4)

4 住居址外的大型ピット(図4, 写真40)

借馬遺跡に於ては竪穴住居址以外に、用途不明の大型ピットが検出されている。住居址に近接するものは、その付属的な施設として例えば厨房とか貯蔵穴のようなものが考えられるが、証拠たるべきものは今のところない。また住居址から離れたものも、何のために掘られ、どのように使用されたか全くわからない。ただそれらが5Cの住居址の周辺にあるものが多いことと、5Cの住居址がただ一例の埋竈炉を除き、はっきりした炉の施設も、カマドも持っていないことをあわせて考えるとき、大型ピットの使用法

に迫ることができるかも知れない。

(1) P 431

A地区の北辺に近い36号、37号住居の東に接してある。長径1.8m、短径1.5m、検出面からの深さ40cmのピットである。底は皿状を呈している。また周辺には柱穴とも何とも言いようのないピットがいくつかあるが、関係のあるなしは明でない。なおこのピットの中に数個の土器片が入っていたが流入したものとみたい。

(2) P 330

A地区北辺の5C住居址群がかこむ、広場状の場所の中心に近いところにある。長径1.2m、短径0.8mの楕円形のピットである。

検出面からの深さは20cmで底は皿状になっている。

(3) P 336

P 330と同じように、広場状の場所の南端にある。長径1.2m、短径70cmの楕円で検出面からの深さは27cm。底は皿状である。すぐ南1mのところに30号住居址がある。

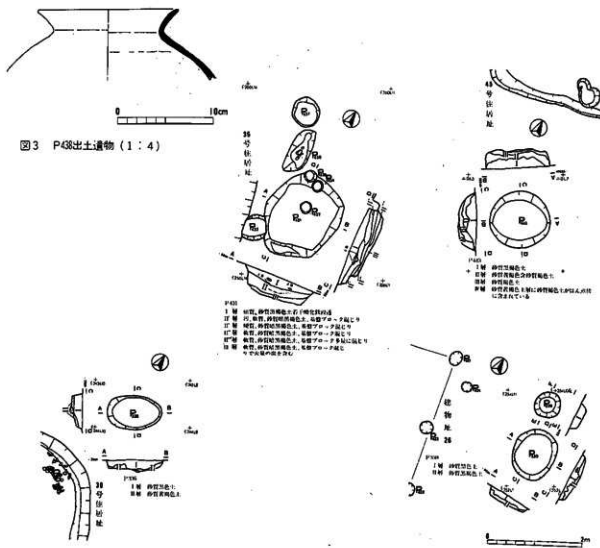


図3 P 431出土遺物 (1:4)

図4 雙穴住居址外大型ピット (1:80)

(4) P 443

農具川地区にある5C住居址群の南の端にあり、長径1.3m、短径1.2m、検出面からの深さ40cmのピットである。底は若干凹凸があるものの、皿状を呈している。(篠崎 健一郎)

5 河川址と溝状遺構について(III-図6, 図6)

本年度の発掘により部分的ではあるが、河川址が4箇所のみられた。即ち、A地区に2箇所、農具川地区に1箇所、B地区に1箇所である。

(1) A地区の河川址1・2について(図5、写真42)

遺跡の西端と東端に存在するもので、いずれも蛇行しつつも南流していることを示し、このうち東側のものは、河川址1の上に16、17号のこの遺跡としては新しい2つの住居址が存在することから、これより一時代前の用水路または、旧農具川の分流とみられ、断面は幅約3m、底はゆるやかなカーブで浅く砂利層が底部に1~2cm存在するのみであることから、流れは極めて緩やかであったと推定される。

西側河川址2は、断面は、幅3.5m~4.5mで開いたV字形をしており、深い所で50cmである。堆積物中に土師器、弥生式土器の破片が各1片見つかっており、農具川の分流であったと推定される。この河川の時代は20号住居址により知ることができる。即ち、20号住居址はこの河川の堆積物中に掘られており、しかも廃絶後また、この河川の新たな堆積物により埋められている。20号住居址は遺物から9C~10Cと推定されているから、この河川は、それより以前から以後まで存在したことになる。

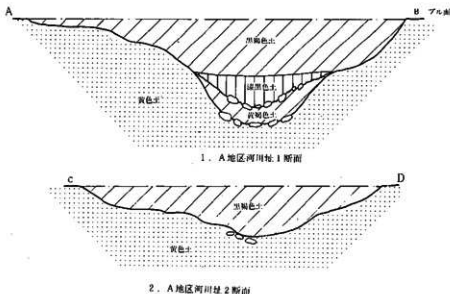


図5 A地区河川址断面(1:40)

(2) 農具川河川改良工事地区の河川址3について(III-図3)

住居址群の中段をほぼ西から東へ流れたことを示す幅約4m検出面からの深さ約80cmの河川で、底部に大礫や砂礫が多く、旧農具川の一部であったと推定される。東流しているが、これは蛇行の一部分の発掘のためで、体系的には南流していると思われる。時代の決定はできないが、層位、住居址群との関係からみて、住居址群の時代のもものと推定される。

(3) B地区の河川址と溝状遺構について(図6、写真46)

この地区には、北西から南東に伸びる幅約1.5m検出面からの深さ約1.5mのV字形の溝が存在し図6に示す如く、堆積物は水平でなく、壁面に平行であり、空掘りであったと推定される。この溝を切って河

川址が「く」の字形に南流したことを示しており、この河川址堆積物の最上部には、巨礫が人為的に捨てられており、中には焼けた炉石や、カマド用の矢沢石などが混入している。

この溝状空堀や巨礫の配列の目的については、断定的なことは言えないが、次のような推定はできると思う。

①溝の北東8mの所に建物址28号(高床式)と、南西7mの所に竪穴住居址60号があり、位置的には60号住居址の防水用排水溝の働きとみられる。この付近は南西に緩く傾斜した粘土質土壌のため、降雨時は、何等かの排水施設が必要であったと思われる。

②河川址は、農具川の分流と推定され、流路の変化により、柱穴や溝を切って流れ、その上に土と砂の互層を堆積させている。

その後、再び流路に変化が起こって、河川は凹地となった。時代は不明であるが、この地を開田するに際して、微高地にあった住居址内の石組みなどを、この凹地に捨てたため、河川址に沿って上層に並んでいるものと推定される。

時代は、相対的には溝が古く河川址の方が新しいが、60号住居址には遺物が殆んどなく、古い方の溝からは、中世の内耳が、新しい河川址からは、古墳時代～奈良時代の土師器、須恵器片が出土するなど逆転しており、正確なことはわからなかった。しかし、溝中の内耳は、後世の開田作業などの混入と考えられるので、溝と80号住居址は、奈良時代かそれ以前、河川址は奈良時代以後、そして、開田は、古代末か中世と大まかに言えるのではなかろうか。

(森 義 直)

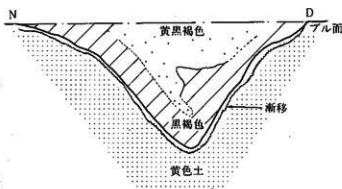
(4) B地区の河川址礫内出土遺物(図7、写真71-2)

B地区には調査地区内に北から入って来て「く」の字に屈曲して東南にぬける幅2m～3mの川あとながあり、その中心部には恐らく人為的とみられる状態で、人頭大の礫が細長く集積されていた。その礫にまじって若干の遺物が出土している。

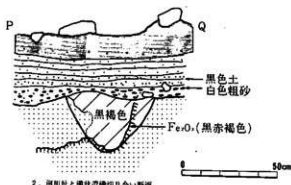
環1は長径およそ14.4cm、短径およそ11cmの楕円状を呈しているが、もともとは円型であったものが、焼成の際にゆがんだと考えられる。内面には底部に段があり黒色の自然釉が発生している。外面にも口縁部に黒色自然釉が見られる。底部は口縁部に比べて著しく厚く、回転ヘラキリによっているかと思われる。他に須恵器の坏底部破片、須恵器大甕底部破片等がある。

土師器は器形もさだかでない小片が多いが中にロクロ成型による内黒の壺?の口縁がある。焼成は良く普通の土師器に比べてかなり硬質である。

次に石碓2枚がある。黒色の粘板岩製で画面とも研磨された面をもち、その上に擦痕がわずかに見られる。上部には角状の二本の突起がある。縄文時代の横型石碓に似ているが、二つの突起のある点が姿を異にしている。



1. 溝状遺構断面



2. 河川址と溝状遺構切り合い断面

図6 B地区溝状遺構断面(1:20)

また、このB地区の他の溝状遺構の中から、内面に炭化物の付着をもつ内耳鍋の口縁部の破片が出土している。



図7 B地区河川址壕内出土遺物1 (1:4) 2 (1:2)

6 人の足跡と推定される模様について (図8・9、写真41)

A地区の南東建物址10の東10m程の所に、遺跡中で一番土の厚い所があり、当時としては凹地をなしていたと推定される部分の第四層(黄褐色土層)上部に、人の足形模様の黒色土が対をなして存在していた。

この黒色土は、第2層下部のものだから、第3層(漸移層)をつらぬいて第4層中に数cm~十数cm入っており、図の如く第4層の表面ではアメーバー状に列をなして分布しているが、掘り進むと左右対をなした足形模様となる。

一番はっきりと残っている左足形模様については長さ約25cm、幅11cmである。はっきりと対をなしている6対について間隔を実測すると23~24cmとなり、それより東の深い所では26~29cmとなっている。なお足跡模様に付随して直径2~3cmの模様も存在し、垂直に入っていた。

層位の状態は、この場所以外の所では柱状図に示す如く、各土層は水平に分布し、上下の逆転はみられない。

なお、足形の黒色土が、第四層の中で前述した如く中で広がっている点、はっきりと規則性のある点、アメーバー形模様は足を抜いたとき周囲の土圧によって、できたと考えられる点などから、人為的なものと断定できる。これが足跡とすれば、杖を突きながらドブ田で、田踏みをした跡ではないかと推定される。

時代は断定できないが、現土土面から65~73cmの所にあるので、現代のものでないことは間違いなく「住居址群のいずれかの時代のものである」と推定される。

(森 義直)

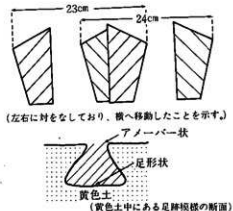


図8 人の足跡と推定される模様模式図

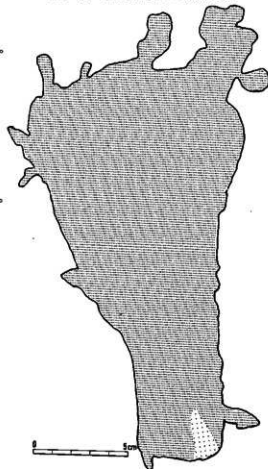


図9 人の足跡と推定される模様トレース (1:2)

7 発掘区域外表層の遺物(図10、写真71-1)

借馬遺跡の緊急発掘調査は、前年度調査区域を含めて改めて概観すると、調査区域が当時ここにあったと推定される村落の範囲の、おそらく三分の一にも及ばなかったのではないかと考えられる。短期間のうちに実施されてしまう大規模な圃場整備事業の進行は、調査団の力の及び得ないどころであって、未調査部分があったのではないかと考えられることは、まことに残念なことである。

圃場整備事業の進行にともなう、調査区域外からも遺物が出土したようであり、地域の人々の中には、遺物を懸命に採集された人もいた。ただ、その出土状況とか出土地点などについては明らかでないことは仕方ないことである。また、区域内から出土した表層の遺物についても掘方採集に努めたが、この項ではそうした遺物の主なものをあげておきたい。

台付甕(1)は弥生式最終末とされる。更級郡上山田町の「御屋敷式土器」に相当するものと考えられ、借馬遺跡では鹿島川の氾濫による礫層の下部から出土したようである。

器高26.8cm、口径15.0cm、胴径21.8cm、台部の高さ5.8cm、底径8.6cmの大ききで、やや下部の長い丸い形で、口縁部の断面はS字状を呈し、外面の段に2カ所、米粒大の横に溝状に凹凸のある押型がついている。意図的につけたものか、偶然なのか、何による押型かは不明である。

口縁部は横ナデによって仕上げているが、肩の部分は横方向のハケメの上を斜方向のハケメを重ねて調整している。胴部は上方を斜方向、下方を縦、台部は斜方向のハケメである。

内面には底から上に向かってナデた指痕を肩の部分に残す。色調は口縁部が褐色、あとはほぼ全面暗褐色を呈する。

全体に薄手軽量で念入りに作られた器であると言ってよい。

須恵器大甕(2)の口縁部は調査区域のずっと西方からの出土のようで、大ききまるい胴をもつ、口径およそ30cmの器である。頸部は強く外反し、口縁部は「く」の字状を呈する。頸部の上から三分一の所には段があり、下から三分一の部分には二本の条線、さらに段と条線の間には髹漆の波状文が見られるが、波頭と波頭の間隔は非常に狭く約5mmにすぎない。

施文具は極めて目のこまかい5本の櫛のようである。表面には平行タタキメがあり、所々に異物の付着がある。内面にはこまかいログロメがある他、タタキメはない。

素地土はよく精選されており、焼成は良好で、頸部内面と表面肩の部分には、やや黒ずんだ緑色の自然釉がかかっている。

紡錘車(3)は褐色の滑石製で、截頭円錐形を呈し中央に径約7mmの真円ではない孔がけられている。大ききは下部の径3.8cm、上部の径2.5cm、厚さ2cmで、下部と側面には研磨の折の条痕がついている。側面の条痕は縦方向である。使用された時期については詳ししない。

土鍾(4)は約半分程の破片であるが、土師質、紡錘形で、原状は長さおよそ6cm強であったかとみられる。中心には径約5mmの孔がけられている。褐色を呈し胎土は精選されている。土鍾は他にも出土しており、借馬遺跡に住んだ人々の生業の一端を物語るものとして興味深い。

木筒、中綱、青木の仁科三湖の周辺や湖棚からは、かなり多くの土鍾が発見されているが、大きささまざまなものがあり、形にも細長いものから太めのものまで種類があるもののその編年はまだなされていない。おそらく縄文時代から現代にいたるまでのものがあるかと思われるが、時代的な特色は明でない。

(5)は使用目的も、時期もわからない遺物であるが、礫石状土製品と仮称しておく。土師質、褐色で、表面には指紋が残されている。

径2cm、断面はレンズ状で厚さ8mmである。用途や製作年代等については後考にまちたい。

その他の表層からの出土品としては、灰釉、天目釉、鉛釉、緑釉等の施釉陶器片が僅か見られる。いずれも平安から中、近世にかけてのものである。

(藤崎 健一郎)

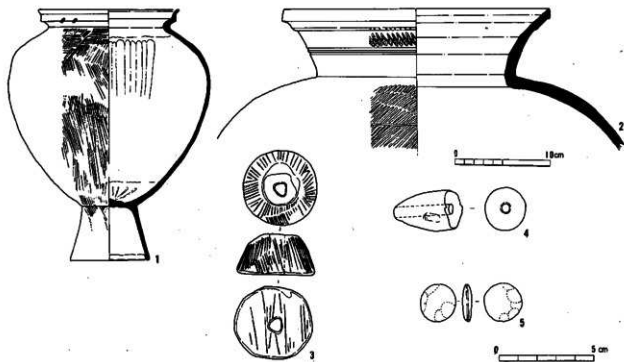


図10 発掘区域外表層の遺物 1, 2 (1:4) 3, 4, 5, 6 (1:2)

第IV章 まとめ

1 竪穴住居址

現代の借馬集落の東、農具川流域に古代から中世にかけてあった村—借馬遺跡—の範囲は、昭和54・55年度の調査面積合計25,250㎡、それに56年度調査予定のC地点の調査面積、8,000㎡をあわせても、おそらく三分の一を出ないだろうと思われる。調査の手が及び得なかったあたりからも、さまざまな遺物が出土しているからである。

しかし、検出された60軒の竪穴住居址と30に近い建物址が同時にあったのでは勿論なく、時代とともに村の中心部を移しながらも、長い間、村落があったと考えるのである。

さらに、独立柱の住居の耐用年数や、柱の根が腐ってしまって住めなくなった場合、その場所で柱のみを取り替えて建て直しをしたのではなく、住み捨てて移転をしているらしいことなどから、時期を同じくして存在した家数は、時代によって消長はあるものの、おそらく10軒は出ないだろうと思われる。その変遷の具体的な姿については、今後の研究に待ちたい。

なお移転するに当っては、当時の村人たちは家財道具の目ばしいものを持ち去ることは当たり前であろうが、その大切なものの中に、カマドを構築するのに都合のいい細長い石（このあたりで矢沢石と呼ばれる石。西方約4kmの矢沢に産する安山岩で、柱状節理によって細長く割れたものが、転石となり役がとれたもの）を加え、持ち去っている。遠いところまで行って拾ってきた苦勞を考えると当然であろう。

住居の問題としては、竪穴住居と地上の建物址との関係についてもふれておきたい。

55年度の調査の段階で、私たちは竪穴住居から、地上住居への変遷の過度的なものがあるのではないかと理解したが、その後の調査によって、地上住居への移行はさらにおくれており（その時期は未だ解明できない）、現時点では両者は同時に存在し、その使用目的にちがいがあったのだと考えている。建物址の場合、生活用具の出土を一点も見ないことから、おそらく椀倉のようなものであるかと思われ、米などの貯蔵について湿気を防ぐために、高い床が設けられていたのではあるまいか。また建物址の中にも太い柱を使った頑丈な建物もあれば、柱の細い簡略らしく見えるものもある。想像されることは、前者は椀倉、後者は農具などを入れる物置のようなものであったかも知れない。

住居のことで、家の中にしつらえられたカマドの問題がある。

弥生時代の竪穴住居址は、みな床面に炉をもっているわけであるが、借馬遺跡での所見では、5Cの住居址は唯一の埋竈炉をもつものを除き、大多数が屋内に炉を持たず、またカマドも備えていないことである。

6Cに入ると、ここのばあいはいは北あるいは東にカマドを築くようになる。

5Cの住居址の中にも、何も施設的なものはないが、炭化物が僅かに集中しているところを持つものも、全然そのような気配さえもない住居址もある。従って家の中で火を用いなかったわけではないが、その址はいかにも僅少である。施設がないから、小さな火を焚くか、おきを持ちこんだかわからないが、暖

をとることはできても、煮炊きには不便であったろう。この時期、台所にあたるような場所は、寝起きする場所とは様を異にしてあったのではないだろうかとも考えられる。そのように考えるとき、5Cの住居址に接するようにして存在する大きなピットが、それに当るのではないかと想像されるのであるが、未だ確証を得ていない。4Cの住居址の調査がなされ、さらに例証を得てこの問題が解決されればと思っている。

さらに住居址の問題では、規模の大きなものの存在することの意味や、出土品の内容による、村落内での地位関係の考察など、多くの例証を得、時間をかけて考究されなければならないことが多い。

次は、借馬遺跡における須恵器使用の開始時期のことである。

現段階での所見では、5C中には未だ使用されておらず、6C後半になって初めてあらわれる。我が国に須恵器焼成の技術が伝来したのは、5C前葉とされるから、約150年程をへて、このあたりの人にも手にしたと一応は理解されるのである。この時期が借馬だけのものか、あるいは安曇全域がまずこんな所かは、全然わからないが、今後明にして行きたいものであるし、さらにその産地や流通形態なども知りたいと思う。

今回の発掘で期待していたことに、村人たちの墓地の検出と、水田あとの検出であったが、それらしいものをついに見出すことができなかった。

村の支配者の墓は、おそらく古墳という形をとって、東山の山中にあるのではないかと考えており、今後の作業により見出される可能性は大きい。しかしその他の庶民の墓は、集落の周辺に何らの標識もなく存在するものと考えられ、注意をしていたがわからなかった。今後の調査にまちたい。

水田も必ずあったと考えられるが、その検出は、期間と労力に規制されない、より精密な調査が必要なのかも知れない。

(篠崎 健一郎)

2 建物址

今回の調査でA地区にて23、同B地区にて1の建物址が検出された。同時に竪穴住居址が多数発見され、両遺構は関係の深いものであることが判明したが、年代上の前後関係が問題とされたのである。これについて、建物址の6・8・10・15・19・20・27からそれぞれ併出の遺物があり、それによってほぼ年代の推察を行うことが出来た。

併出の遺物は土師器のみであるが、建物址の柱を抜取った後に偶然にも落ち込んだと見た方がよいのではないかと思う。

従って年代上余り間を経てのことは考えられず、この地方に須恵器の普及される以前が一応の対象となり、恐らく6C中葉頃を下限とすることは如何なるものであろうか。これに関連して、A地区で検出された竪穴住居址も、5C～6Cの遺構が約半数を占めるなどから、この年代を推定したいと思う。

次に併出遺物のない建物址も17あるのであるが、これもこの地域の遺構の大部分が、5C～10Cであるのでこれらの年代に求められるものであろうと思う。

建物址の用途は重要な問題であり、早急な結論は慎まなければならないが、今回の調査で印象の強い点について述べることにしたい。

従来こうした掘立柱のみの遺構は、即高床式建築の建物を想像し、論じられた感があるようであるが、表面的にはそう考えられても遺構の規模によっては、平屋としか考えられないものもあるのである。建物址の6・10・11・13・14・15・16・17・18・19・21・25などは、一応堅固な構造であったと見られ、高床式で上

第IV章 まとめ

部に相当な重量の掛ることが考慮されたことが見られるが、建物址の5・7・8・9・12・20・22・23・24・26・27については比較的貧弱な構造である。こうした建物は平屋のままで使用された感が強いのである。この中で建物址8は前記の如く古い遺構の方に入ると思われるが、こうして古くから平屋構造の小屋を使用する所であったのである。一方で竪穴住居址と高床式の建築物（倉庫）があって、これら三つの建築物がセットになっていた所に、この遺跡の性格が見出されるものとする。以上の見方から、平屋と考えられる建物は、この地方で農作物の収納など種々の用途に利用される所の、毛小屋と称されるものが想像されるのである。

(原 田 曠)

表3 カマド施設を持つ墓穴住居址一覧

(土器器体数は完形品・半形品及び計画可能なもののみ)

住居址名	墓 区										簡易水溝部	農具川原農工事地区	B 地区	
	11 住	12 住	14 住	16 住	17 住	18 住	20 住	27 住	33 住	38 住				39 住
時期	8c?	8c	8c	7c	8c?	7c	9c~10c	5c	6c~7c	6c?	5c~6c	9c~11c?	10c~11c	8c?
平面形	隅丸方形 (500×600)	隅丸方形 (380×350)	隅丸方形 (620×550)	隅丸方形 (290×250)	隅丸方形 (530×510)	隅丸方形 (300×400)	隅丸方形 (480×400)	隅丸方形 (510×470)	隅丸方形 (690×350)	隅丸方形 (一辺 370)	隅丸方形 (一辺 450)	隅丸方形 (300×280)	隅丸方形 (470×430)	隅丸方形 (440×400)
カマド位置 (東北より)	N 15°E	N 58°E	N 30°W	N 115°W	N 32°W	N 9°W	N 32°E	N 32°W	N 38°W	N 10°E	N 21°W	N 25°W	N 64°E	N 38°W
カマド形	石積粘土 北壁はぼ中央	石積粘土 東壁はぼ中央	石積粘土? 北壁はぼ中央	粘土小石 西壁中央より やや南	粘土小石 北壁はぼ中央	粘土を積つのみ 北壁はぼ中央	石積粘土 東壁はぼ中央	石積粘土? 北壁はぼ中央	石積粘土? 北壁はぼ中央	粘土を積つのみ 北壁はぼ中央	石積粘土? 北壁はぼ中央	石積粘土? 北壁はぼ中央	粘土を積つのみ 東壁はぼ中央	石積粘土 北壁はぼ中央
主柱穴	4	?	1	なし	3	4	なし	?	?	?	2?	?	2本?ト2?	なし
備考	北壁におか電断 用材出土 灰層? 1		焼けた骨片多 量に出土	河川は2を切っ ている	河川は2を切っ ている 火床? 灰化物 多量に出土 一部は焼?		焼物より南東 4分の1程度 原土層中に開 いている	東半分は焼石 P 282を切っ ている	焼物は2と重 なり	39壁に切られ 41壁を切られ 隙間本壁により 南半分は焼 物	38-40-41壁 を切 り	壁石により全 面 埋る		P 3-4・5に 切られる
土器	杯									1	3			
土器	高杯	1	2					1			1			
土器	壺	1	9	2	1	2	5	1	1	2	3			1
土器	壺					小形壺1								
土器	杯		1	1	1			1	1				1	
土器	高杯			1	1								1	
土器	壺		1											
土器	杯		5	1	1		1	1					2	
土器	壺													
土器	壺		1											1
鉄製品		刀子? 1				刀子 1						刀子 1		
その他		磁石 1			磁石 1			缸ガラスが 残っている 磁石1				磁石 1	白瓷 1	

表5 建築物一覽

番 号	位 置	建 物			構 造			開 係 出 土 遺 物	備 考
		S-N方向m	E-W方向m	長軸方向(東北)	縦間柱間寸法(心々) m	桁行柱間寸法(心々) m			
A 5	南端西側	3	2.9-3.2	N 37° W	1間 2.9-3	1間 3	P 125 土師杯口縁		
A 6	南端中央	5.1-5.3	3.4-3.8	N 40° W	2間 1.7-2	2間 2.6-2.7			
A 7	南端中央	2.8-3	2.5-2.6	N 34° W	1間 2.5-2.6	2間 1.4-1.5			
A 8	南端中央	2.2-2.3	2.4-2.6	N 50° E	1間 2.3-2.4	2間 1.2-1.3	P 85 土師小片		
A 9	南 端	2.8-3	2.7	N 19° E	北2間 1.3-1.4 南1間 2.7	西3間 0.6-1.4 東2間 1.5			
A 10	南 端	4.7	3.5	N 0°	2間 1.8	3間 1.5-1.6	P 48 土師小片		
A 11	南 端	4.7	2.7-2.8	N 25° E	北2間 1.2-1.4 南1間 2.8	3間 1.6-1.7			
A 12	南 端	2.2-2.3	2.1-2.2	N 31° W	1間 2.1-2.3	2間 1.1-1.2			
A 13	南端中央	2.1-2.3	2.4	N 36° E	1間 2-2.1	1間 2.4			
A 14	南端中央	3.9	4	N 0°	2間 1.7-2	2間 1.9-2			
A 15	中部西側	3.4	3.4	N 34° E	1間 3.2-3.4	2間 1.6-1.7	P 192 P193 P196 P197 P199 土師小片		
A 16	中部中央	2.9-3	3.8-4	N 59° E	2間 1.4	北2間 1.5-2.1 南3間 1-1.8			
A 17	北端東端	3.4	3.3-3.5	N 40° W	2間 1.6-1.7	2間 1.7			
A 18	北端東端	1.5-1.6	1.5	N 55° E	1間 1.4-1.5	2間 0.7-0.8			
A 19	北端中央	4.5-4.7	1.8-2.4	N 0°	1間 1.8-2.2	3間 1.4-1.6	P 310 土師小片		
A 20	北 端	3.8	3.1	N 15° W	1間 3.1	2間 1.8-1.9	P 286 土師壺(84-1)		
A 21	中部西側	2.2-2.5	2.1-2.3	N 26° W	1間 2-2.4	2間 1-1.2			
A 22	中部西側	3.4	4.8-5.3	N 73° E	1間 3.3	2間 2.6-2.8	P 689 P373 P376 P377 土師小片		
A 23	中部中央	2-2.2	2.3-2.5	N 64° E	1間 2-2.2	北1間 2.5 南2間 1-1.2			
A 24	北端中央	2.7	2.3-2.4	N 25° W	1間 2.4	1間 2.6			
A 25	北端中央	4.8	6.8	N 49° E	2間 2.4	西4間 1.5-2 東5間 1.2-1.5			
A 26	北端西側	2.8	2.7-2.8	N 15° W	1間 2.7	2間 1.3-1.4	P 421 土師壺口縁 P 689 土師壺片・蓋片・片 P 627 土師壺 P 400 土師壺(4 2-1-2-5)		
A 27	北端西側	3.4	2.8	N 17° W	1間 2.8-3	2間 1.8-1.9			
B1(29)	北端西端	2.2	1.5	N 18° W	1間 1.5	2間 1-1.1		其側に前の柱穴 4 28号位置と切合	

表6 竪穴住居址出土器土器一覽

図番号	出土地点・層位	器種	器形	法				色		幾形上の特徴	備考
				口径	腹径	底径	器高	外面	内面		
76-1	11住 I	土師	小形壺	(12.2)	(13.9)	-	-	赤褐色	黒灰色	外面ナデ, 口縁内外ロコナデ	内面一部黒色部
76-2	11住 I	土師	罎?	(13.0)	-	(7.5)	7.0	朱褐色	白褐色	内面ヘラミガキ 口縁部に条線	
76-3	11住 カマド	土師	甕	-	-	(7.9)	-	明褐色	明褐色	内面ハケメ	
78-1	12住 I	土師	甕	-	(22.5)	(11.5)	-	明褐色	明褐色	ロココ壺形(反時計回り)底部回転ヘラキリ	木の葉底
78-2	12住 I	須恵	杯	(13.7)	-	(5.0)	4.5	灰色	灰色	ロココ壺形(時計回り)底部手打ちヘラケズリ	
78-3	12住 I	須恵	杯	(13.5)	-	(5.5)	(4.4)	茶灰色	茶灰色	ロココ壺形 底部ヘラケズリ	
78-4	12住 I	須恵	杯	(13.6)	-	(4.0)	4.4	灰色	灰色	ロココ壺形 底部ヘラケズリ	
78-5	12住 I	須恵	杯	(15.4)	-	(7.1)	3.6	茶灰色	茶灰色	ロココ壺形 底部ヘラケズリ	
78-6	12住 I	須恵	壺	-	-	(8.7)	-	灰色	灰色	外面平行タタキメ一部自然釉内面ナデ	
48-1	13住 P1	土師	甕	11.9	(38.7)	(6.4)	(36.4)	灰黄褐色	黒灰色	外面ヘラ切の後ナデ内面ナデ口縁部内外ロコナデ	木の葉底
48-2	13住 床	土師	甕	(17.2)	-	-	-	茶褐色	茶褐色	口縁部内外ロココナデ外面製部へ肩部右ナメ方向ハケメ	
48-3	13住 床	土師	甕	(7.2)	-	-	-	茶褐色	茶褐色	外面製部へ肩部右ナメ方向ハケメ	
48-4	13住 床	土師	部台	-	-	9.8	-	赤褐色	茶褐色	3孔赤色地影	
48-5	13住 II	土師	高杯	-	-	13.8	-	茶褐色	茶褐色	4孔外面ヘラミガキの後タテ方向ハケメ 内面ロココ方向を主としハケメ	
80-1 ? 80-15	14住	表7 14号住居址出土器観察表による									
12-1	15住 I	土師	甕	16.0	23.4	5.7	24.9	茶褐色	茶褐色	外面ナメ方向からタテ方向にヘラミガキ 口縁内外ロコナデ	木の葉底
12-2	15住 I	土師	甕	12.6	22.0	5.3	24.7	茶褐色	茶褐色	外面タテ方向にナゲ口縁内外ロココナデ内面上部オサメの後ナデ	
12-3	15住 I	土師	甕	12.1	19.9	4.4	22.7	暗褐色	暗褐色	製部内外ロコナデ 口縁部内外ロコナデ	
12-4	15住 I	土師	甕	-	-	6.3	-	暗褐色	暗褐色	製部内外ロコナデ	
12-5	15住 I	土師	小形壺	15.0	15.0	6.0	15.0	暗褐色	暗褐色	口縁部内外ロコナデ 製部内外オサメ	
12-6	15住 I	土師	小形壺	12.6	(14.3)	4.0	13.8	暗褐色	暗褐色	製部外面ハケ状工具でナデ	
12-7	15住 I	土師	大形罎	-	13.2	-	13.4	灰褐色	灰褐色	内面ヘラミガキ, ヘラケズリ口縁部内外ロコナデ 外面上部と下部ナゲ中央部ハケメ	
12-8	15住 I	土師	杯	16.5	-	3.2	8.0	灰褐色	灰褐色	内面上部へ中央部ロコナデ 下部ヘラケズリ 外面中央部へ下部ヘラケズリの底へラミガキ 内面ヘラミガキ中央部へ下部ヘラミガキ	
67-1	16住 I	土師	甕	(17.4)	-	-	-	白褐色	白褐色	内外ナデ	木の葉底
67-2	16住 I	土師	甕	-	-	(6.0)	-	暗褐色	暗褐色		
67-3	16住 雑土	須恵	蓋	-	-	(11.8)	3.8	白灰色	白灰色	縁部条線	
82-1	17住 床	土師	甕	(20.0)	-	-	-	茶褐色	茶褐色	内外ナデ	木の葉底
82-2	17住 I	須恵	甕	11.5	-	-	3.8	灰色	灰色	ロココ壺形(反時計回り)回転ヘラキリ	
69-1	18住 床	土師	甕	23.8	-	-	-	褐色	褐色	内外ヘラミガキ	木の葉底
69-2	18住 床	土師	甕	19.6	-	-	-	明褐色	明褐色	内外タテ方向を主としたハケメ	
69-3	18住 床	土師	小形壺	9.2	12.2	-	11.0	赤褐色	黒褐色	外面ナゲ口縁内外ロコナデ	
71-1	19住 床	土師	甕	(11.1)	-	-	-	暗褐色	暗褐色	外面ナゲ口縁内外ロコナデ	木の葉底
71-2	19住 I	須恵	甕	-	(16.6)	-	-	灰色	灰色	ロココ壺形	

図番号	出土地点・層位	器種	器形	法 量 色 調						整 形 上 の 特 徴	備 考
				口径	底径	底径	器高	外 面	内 面		
87-1	20住 床	土 師	甕	(21.2)	(20.9)	-	-	暗褐色	茶褐色	外面タテ方向ヘラケズリ内面タテ方向にハケム確認できる	
87-2	20住 床	土 師	甕	(24.1)	(22.5)	-	-	明褐色	明褐色	外面タテ方向ヘラケズリ内面タテ方向にハケムが確認できる	
87-3	20住 床	土 師	甕	(24.0)	-	-	-	茶褐色	茶褐色	外面タテ方向ハケム内面ヨコから右ナメ下方方向にハケム	
87-4	20住 床	土 師	甕	(16.0)	-	-	-	茶褐色	茶褐色	外面タテ方向ハケム一部ヨコナデ内面口縁ヨコ方向にハケム以下ナデ	
87-5	20住 床	土 師	甕	-	-	(8.5)	-	茶褐色	茶褐色	外面タテ方向ハケム	
87-6	20住 床	須 恵	蓋	(18.8)	-	-	-	暗灰色	暗灰色	ヨコ型形 回転ヘラケリ	
87-7	20住 床	須 恵	坏	(13.9)	-	-	4.4	灰 色	灰 色	ヨコ型形(時計回り)底部回転ホケリ	
17-1	24住 I	土 師	壺	19.0	-	-	-	暗褐色	暗褐色	内外ヨコ方向ヘラヒガキ	有段口縁
17-2	24住 I	土 師	甕	16.5	-	-	-	茶褐色	茶褐色	口縁内外ヨコによるヨコナデ	
17-3	24住 床	土 師	甕	13.7	(16.0)	-	-	灰黒色	灰黒色	口縁内外ヨコナデで厚手	
17-4	24住 床	土 師	甕	-	(21.0)	-	-	暗褐色	暗褐色	内外ヨコを主としてハケム 外面中央部〜下部にかけてヘラケズリ	伊?に用いられていたもの
14-1	25住 F	土 師	坏	17.0	-	3.1	6.1	明褐色	明褐色	内外ヘラケズリ 外面中央〜下部ヘラケズリ(上方細く下方は大きくケズル)	
14-2	25住 床	土 師	壺	-	7.2	1.6	-	明褐色	明褐色	内外ナデ	
14-3	25住 II	土 師	器台	-	-	(11.7)	-	赤褐色	赤褐色	外面接合部から下方ヘラヒガキ	二重孔 上3孔下(3孔)
19-1	26住 P6	土 師	壺	16.7	24.6	6.7	27.3	黄黒褐色	黒灰色	頸部外面タテ方向ハケム内面ヨコ方向ハケム	
19-2	26住 床	土 師	壺	-	22.5	6.0	-	黄褐色	黄褐色	頸部外面タテ方向ヘラケズリ胴部内面ヨコ方向を主としたハケム	
19-3	26住 床	土 師	甕	12.1	(21.0)	-	-	茶褐色	茶褐色	口縁内外ヨコヨコナデ	
19-4	26住 床	土 師	甕	18.7	27.5	-	-	黄褐色	黄褐色	内外羽毛状工具によるナデ	
19-5	26住 I	土 師	甕	(13.8)	-	-	-	暗褐色	暗褐色	口縁内外ヨコによるヨコナデ 胴部内面ヘラ状工具によるヨコナデ	
19-6	26住 I	土 師	甕	(14.0)	-	-	-	黄褐色	黄褐色	口縁内外ヨコナデ	
19-7	26住 -	土 師	小形甕	-	8.3	4.8	-	黄褐色	黄褐色	口縁内外ヨコナデ 他ナデ	
19-8	26住 床	土 師	高 坏	(16.8)	-	-	-	明褐色	明褐色		
20-9	26住 II	土 師	坏	11.6	-	-	5.0	黄褐色	黄褐色	内外ヨコナデ〜ナデ	
20-10	26住 床	土 師	坏	9.6	-	-	6.1	黄褐色	黄褐色	内外ヨコナデ〜ナデ	
20-11	26住 床	土 師	坏	6.7	-	-	5.1	黄褐色	黄褐色	内外ヨコナデ〜ナデ	
20-12	26住 P5	土 師	坏	11.3	-	-	5.7	黄褐色	黄褐色	内外ナデ	
20-13	26住 伊?	土 師	高 坏	-	-	12.5	-	明褐色	明褐色	外面タテ方向ヘラケズリの後 タテ方向ハケム	3孔
20-14	26住 II	土 師	器台	-	-	13.2	-	明褐色	明褐色	内外ホケム	3孔
49-1	27住 床	黒 色	坏	12.3	-	-	4.8	黄褐色	黒 色	外面ナデ	
22-1	29住 床	土 師	甕	15.9	-	-	-	茶褐色	茶褐色	口縁内外ヨコヨコナデ内面胴部ヨコ方向ハケム	
24-1	30住 床	土 師	甕	15.7	(23.5)	4.6	(25.4)	暗褐色	暗褐色	外面タテ方向を主としたハケム	
24-2	30住 床	土 師	甕	10.3	22.0	5.5	27.1	茶褐色	茶褐色	外面ヘラ状工具によるナデ	
24-3	30住 床	土 師	壺	15.0	-	-	-	明褐色	明褐色	外面にハケムが確認できる頸部ヨコナデ	
24-4	30住 床	土 師	甕	16.1	-	-	-	茶褐色	茶褐色		
24-5	30住 P5	土 師	壺	(13.0)	-	-	-	黄褐色	黄褐色	内外ヨコナデ頸部に段を有し段の先にヘラでタテに線を入れる	

図番号	出土地点・層位	器種	器形	注				色		整形上の特徴	備考
				口径	底径	器高	外面	内面			
24-6	30住 I	土師	瓶?	-	-	30.0	-	茶褐色	茶褐色	底部に孔が1つある	
24-7	30住 床	土師	杯	(11.5)	-	-	-	赤褐色	赤褐色	ココ方向ヘラミガキ	
24-8	30住 床	土師	高杯	8.5	-	-	-	明褐色	明褐色	杯底に段を有し脚部との接合部より下方にヘラケズリ	3孔
26-1	31住 -	土師	壺	15.7	-	-	-	黒褐色	黒灰色	口縁内外ヨコナデ	
26-2	31住 カベ	土師	高杯	14.9	-	-	-	明褐色	明褐色		
73-1	33住 床	須恵	杯	9.4	-	-	4.0	灰色	灰色	コッコ形(時計回り)下部回転ヘラケズリ	
73-2	33住 床	黒色	杯	12.0	-	-	4.9	黒色	黒色	外面上部ヨコナデ下部手持ヘラケズリ(右へ左)内面ヘラミガキ	炭化物付着
51-1	34住 口	土師	壺	13.8	-	-	-	茶褐色	茶褐色	口縁内外コッコヨコナデ	
51-2	34住 口	土師	高杯	14.7	-	-	-	明褐色	明褐色	内外ヘラミガキ	近年脚部欠損の後接合部研削
53-1	35住 床	土師	壺	11.7	14.0	-	-	暗褐色	暗褐色	外置右ナメ方向ヘラミガキが確認できる	
29-1	36住 床	土師	直頸壺	13.8	(24.2)	-	-	茶褐色	茶褐色	口縁部タテ方向ヘラケズリ内面ナデ	
29-2	36住 床	土師	壺	15.1	-	-	-	黄褐色	黄褐色	外面タテ方向カキ内面ヤム指痕あり	
29-3	36住 床	土師	杯	8.0	-	4.8	4.9	茶褐色	茶褐色	外ナデ口縁内外ヨコナデ 内面ヘラ状工具によるナデ	
29-4	36住 床	土師	壺	10.7	10.3	4.5	8.4	灰褐色	灰褐色	ナデ 口縁内外ヨコナデ 内面ヘラ状工具によるナデ	
29-5	36住 床	土師	壺	10.7	10.8	-	8.1	灰褐色	灰褐色	外面ナデ内面底部コビによるナデ	
30-1	37住 床	土師	壺	17.0	-	-	-	暗黄褐色	暗黄褐色		
30-2	37住 床	土師	小形壺	12.0	11.6	4.5	12.0	暗褐色	暗褐色	口縁内外ヨコナデ 内面下方ヘラ状工具によるナデ	
30-3	37住 床	土師	壺	(9.4)	8.8	-	10.4	暗褐色	暗褐色	口縁内外ヨコナデ 外面中央部から下部はヘラケズリ内面はヤム下部はヘラケズリ	
30-4	37住 床	土師	壺	9.6	8.5	-	8.4	茶褐色	茶褐色	口縁内外ヨコナデ 外置脚部ナメ方向のナデ内面中央部ヘラミガキ下部ヘラケズリ	
30-5	37住 床	土師	壺	9.0	9.3	-	10.2	暗褐色	暗褐色	口縁内外ヨコナデ外面中央部ナデ内面中央部ナデ下部ヘラケズリ	
30-6	37住 床	土師	壺	(10.3)	-	-	(10.9)	黄褐色	黄褐色		
30-7	37住 床	土師	高杯	-	-	-	-	暗褐色	暗褐色	外面ヘラミガキ内面巻き上げ縁目のまま整形なし	
39-1	39住 I	土師	壺	(16.4)	-	-	-	茶褐色	茶褐色	口縁内外横ナデ外面研削タテ方向にナデ	
39-2	39住 I	土師	壺	(14.0)	-	-	-	暗茶褐色	黒褐色		
39-3	39住 カマド	土師	壺	-	-	6.5	-	明茶褐色	明茶褐色	内外面ヘラケズリの段ナデ	
39-4	39住 カマド	土師	杯	(17.0)	-	-	-	明茶褐色	明茶褐色	内外面ヘラミガキ段を有する	
39-5	39住 カマド	黒色	杯	12.8	-	-	5.0	黄褐色	黒色	外面ヘラミガキ	
39-6	39住 カマド	黒色	杯	16.2	-	-	4.5	黄褐色	黒色	外面ヘラミガキ	
56-1	41住 床	土師	無頸壺	8.0	19.2	-	-	黄褐色	黄褐色	内外面にヘラミガキが確認できる	
58-1	42住 床	黒色	杯	12.0	-	-	5.2	茶褐色	黒色	内外面ヘラミガキ	
58-2	42住 床	土師	壺	-	(10.8)	-	-	黒褐色	黒褐色	内外面ヘラミガキ	
60-1	43住 床	土師	高杯	18.5	-	-	-	赤褐色	赤褐色	外面ヨコナデ方向のヘラミガキ 内面ナメ方向ヘラミガキヘラミガキ	
60-2	43住 床	土師	高杯	16.8	-	-	-	赤褐色	赤褐色	外面上部ヨコ中央部ナメ下部タテヘラミガキ 内面ヨコアバタヘラミガキ	
60-3	43住 床	土師	高杯	18.2	-	-	-	赤褐色	赤褐色	外面タテ方向内面タテへ右ナメ下方ヘラミガキ	
60-4	43住 II	土師	壺	-	7.4	2.0	-	淡茶褐色	淡茶褐色		

図番号	出土地点・層位	器種	器形	法 量				色 調		整 形 上 の 特 徴	備 考
				口徑	腹徑	底徑	器高	外 面	内 面		
60-5	43住 床	土師	高 杯	-	-	-	-	黄褐色	黄褐色	外面タテ方向にヘラミガキの後タテ方向にハケム 内面オヤエ	
60-6	43住 床	土師	高 杯	-	-	11.2	-	茶褐色	茶褐色	外面タテ方向にヘラミガキ内面ヘラケズリとヨコナデ	
60-7	43住 床	土師	高 杯	-	-	13.5	-	赤褐色	赤褐色		
9-1 ? 9-6	45住	表8 45号住居址出土土器調査表による									
32-1	46住 -	土師	高 杯	(18.9)	-	-	-	茶褐色	茶褐色	外面ヘラ状工具によるナデ	
32-2	46住 床	土師	高 杯	(19.1)	-	-	-	明黄褐色	明黄褐色	外面横ナデの後ヘラミガキ 内面ヨコ方向のナデ	
32-3	46住 口	土師	高 杯	-	-	-	-	黄褐色	黄褐色	外面タテ方向ナデ 内面ヘラ状工具によるヨコナデ	
32-4	46住 床	土師	高 杯	-	-	-	-	赤褐色	赤褐色	外面タテ方向ヘラミガキ内面上部ヘラミガキ下部ヨコナデ	二重孔上4孔 下4孔
33-1	47住 床	土師	甕	-	-	5.2	-	明黄褐色	明黄褐色	内面底部ヘラケズリ	
35-1	48住 床	土師	甕	(15.4)	-	-	-	茶褐色	明茶褐色	口縁内外ヨコナデ内面ヨコナデヘケム	
35-2	48住 床	土師	埴	(9.4)	-	-	-	明黄褐色	明黄褐色	口縁内外ヨコナデ体部ヘラミガキ	
35-3	48住 床	土師	高 杯	(16.3)	-	-	-	黄褐色	黄褐色		
35-4	48住 床	土師	高 杯	(17.5)	-	-	-	明茶褐色	明茶褐色	口縁内外ヨコナデ外面ナメ方向ヘラケズリ 内面ヨコ方向ヘナデ	
37-1	49住 床	土師	甕	16.8	24.5	6.1	25.2	暗茶褐色	明茶褐色	口縁内外ヨコナデ外面腹部から体部にかけて右ナメ下方向ヘケム	
37-2	49住 I	土師	甕	(24.5)	-	-	-	黄褐色	茶褐色	口縁内外ヨコナデ	
37-3	49住 I	土師	甕	(21.1)	-	-	-	黄褐色	不 明	外面タテ方向ヘラケズリ 内面不明	有紋口縁
37-4	49住 床	土師	甕	(13.5)	-	-	-	黄褐色	黄褐色	口縁内外ヨコナデ	
37-5	49住 I	土師	埴	11.2	-	-	-	明黄褐色	明黄褐色	外面ナデ 内面ヘラミガキ	
37-6	49住 床	土師	埴	9.8	9.3	2.5	9.6	茶褐色	茶褐色	口縁内外ヨコナデ	
37-7	49住 床	土師	埴	11.4	7.5	2.5	6.6	赤褐色	赤褐色	ていねいなヘラミガキ 赤色彫形	
37-8	49住 I	土師	高 杯	(16.1)	-	-	-	明黄褐色	明黄褐色		
37-9	49住 I	土師	高 杯	-	-	(10.7)	-	明黄褐色	明黄褐色		
37-10	49住 II	土師	高 杯	-	-	-	-	黄褐色	黄褐色	外面タテ方向にヘラケズリ	
84-1	50住 床	土師	甕	(22.9)	(19.5)	-	-	茶褐色	明褐色	口縁内外ヨコナデ 内面ヘラ状工具によるヨコナデ	
84-2	50住 床	土師	甕	(15.0)	(12.2)	-	-	赤茶褐色	赤茶褐色	外面タテ方向にヘラ切り	
89-1	51住 I	白磁	杯	-	-	(7.7)	-	白灰色	白灰色	ヨコナ整形	
64-1	52住 ?	土師	甕	(18.3)	(25.4)	-	-	暗茶褐色	暗茶褐色	外面ヨコ方向ハケム 内面ヘラ状工具ヨコナデ	
39-1	53住 I	土師	甕	(17.6)	-	-	-	赤黄褐色	赤黄褐色	口縁内外ヨコナデ 外面ハケムが確認できる	
39-2	53住 I	土師	甕	(17.3)	-	-	-	黄褐色	黄褐色	口縁内外ヨコナデやや段がみられる	
39-3	53住 I	土師	埴	-	(9.2)	-	-	茶褐色	茶褐色	外面ヨコ方向にヘラケズリ	
39-4	53住 I	土師	高 杯	(19.5)	-	-	-	黄褐色	黄褐色	内外面ヘラケズリヨコ方向を主としている	
39-5	53住 I	土師	高 杯	(17.9)	-	-	-	明黄褐色	明黄褐色	外面右ナメ下方向にヘラミガキ	
39-6	53住 I	黒色	高 杯	(18.3)	-	-	-	暗黄褐色	暗黄褐色	内外面ともヨコ方向にヘラミガキ	

図番号	出土地点・層位	器種	器形	法 量				色 調		整 形 上 の 特 徴	備 考
				口径	底径	底径	器高	外 面	内 面		
39-7	53住 1	土 師	高 杯	(16.1)	-	-	-	明黄褐色	明黄褐色		
39-8	53住 1	土 師	高 杯	-	-	-	-	明黄褐色	明黄褐色	接合部より下方へヘラケズリ	
92-1	55住 1	土 師	甕	(19.7)	-	-	-	茶褐色	茶褐色	口縁内外面ロクワによるコナダ	
92-2	55住 床	土 師	甕	-	-	5.9	-	黄褐色	黄褐色	外面左ナナメ下方向にハケメ内面ナダ	
92-3	55住 口	須 恵	豆?	(21.4)	-	-	-	灰 色	灰 色	ロクワ整形	
92-4	55住 1	黒 色	高 杯	(16.0)	-	-	-	黄褐色	黒 色		
92-5	55住 口	須 恵	杯	(14.6)	-	(6.8)	(3.8)	明灰色	明灰色	ロクワ整形底部回転イトキリ	
92-6	55住 口	須 恵	杯	(8.5)	-	5.5	(3.0)	灰 色	灰 色	ロクワ整形底部回転イトキリの後付け高台	
40-1	56住 床	土 師	埴	8.4	8.5	-	8.8	茶褐色	茶褐色	内外面コナダ内面底部ヘラケズリ	
40-2	56住 床	陶 器	杯	-	-	(4.0)	-	灰 色	あめ色	ロクワ形成の後あめ釉	
43-1	57住 床	土 師	甕	13.6	-	-	-	明黄褐色	明黄褐色	外面ハタ状工具によるナダ 内面ココ方向ハケメ	
43-2	57住 床	土 師	小形甕	11.6	-	-	-	明黄褐色	明黄褐色	外面右ナナメ下方向ハケメ内面ヘラ状工具によるコナダ	
43-3	57住 床	土 師	高 杯	13.8	-	-	-	暗茶褐色	暗茶褐色		
43-4	57住 床	土 師	高 杯	10.2	-	11.6	8.2	茶褐色	茶褐色		
43-	57住 床	土 師	器 台	10.0	-	11.6	8.2	茶褐色	茶褐色	外面でいまいなヘラミガキ 内面ココ方向にハケメ	
43-	57住 床	土 師	杯	(12.1)	-	4.9	5.5	黄褐色	黄褐色	外面ナダ 内面ココ方向にハケメ	
43-	57住 床	土 師	杯	(11.6)	-	2.6	4.5	明茶褐色	明茶褐色	内外面ヘラミガキ 欠損面が多い	
46-1	59住 床	土 師	甕	-	23.5	-	-	暗黄褐色	暗黄褐色	外面右ナナメ下あるいは左ナナメ下方向ハケメ 内面斜方向を主としたハケメ	
46-2	59住 床	土 師	甕	(16.1)	-	-	-	暗黄褐色	暗黄褐色	外面ナダの後ハケメが確認できる内面タテ方向にヘラケズリ	
46-3	59住 床	土 師	高 杯	(14.1)	-	-	-	茶褐色	茶褐色	外面ココ方向にヘラミガキ 内面指原による調整痕	
46-4	59住 床	土 師	高 杯	-	-	10.6	-	暗黄褐色	暗黄褐色	外面ナダの後タテ方向にハケメ 内面ココ方向を主としたハケメ	
46-5	59住 床	土 師	高 杯	-	-	-	-	黄褐色	黄褐色	外面接合部からタテ方向にヘラケズリ	
46-6	59住 床	土 師	器 台	-	-	12.9	-	茶褐色	茶褐色	外面タテ方向にヘラケズリ	3孔
46-7	59住 床	土 師	器 台	-	-	13.7	-	茶褐色	茶褐色	外面タテ方向にヘラケズリ	3孔

表7 14号住居址出土土器調査表

地 点・層 位	器種・器形・法量(口径・底径・底径・器高)	色調(外面・内面)・胎土・成形	整 形		備 考
			外 面	内 面	
1 14号住居址 II層	黒色土器 口径 15.2cm 底径 — 底径 — 器高 —	外面：にぶい橙、内面：黒 混入材：少	口縁部はヘラミガキ(ヨコ)。胴部 以下は助部的でタチ中心	ヘラミガキ (口縁部はヨコ、胴部 以下は助部的でタチ中心)	
2 14号住居址 IV層	黒色土器 口径 14.6cm 底径 — 器高 4.5cm	外面：にぶい橙、内面：黒 混入材：石英、褐鉄鉱、黒色 鉱物 パミス?	口縁部付近を除きヘラケズリ、後 に全面ヘラミガキ。	ヘラミガキ。	
3 14号住居址 IV層	黒色土器 口径 (13.0cm) 底径 — 器高 —	外面：橙、内面：黒 混入材：少	ヨコナズ。	ヘラミガキ。	
4 14号住居址 II層	黒色土器 口径 — 底径 — 器高 —	外面：にぶい橙、内面：橙 混入材：長石、石英、褐鉄鉱	ヘラミガキ(タチ)。	杯部はヘラミガキ。胴部は、杯部 との接合部がナズ、以下はヘラケ ズリで工具のアタリ痕を残す。	
5 14号住居址	? 口径 — 底径 (10.0cm) 器高 —	外面：橙、内面：橙 混入材：褐鉄鉱、砂粒	ヘラミガキ。	全面ヘラケズリ。杯部との接合部 付近以外はその後ナズ。	
6 14号住居址 II層	須臾器 口径 11.6cm 底径 — 器高 3.4cm	外面：にぶい橙、内面：褐 灰色、混入材：長石、砂粒 底面：ヘラキリ後軽いケズリ	ロクロナズ。	ロクロナズ。	かえりの痕跡を残す。 底部にヘラ記号「X」。
7 14号住居址 II層	土 器 口径 (20.2cm) 底径 (19.5cm) 底径 7.3cm 器高 (30.0cm)	外面：褐黄橙 内面：淡黄橙 混入材：砂、褐鉄鉱 底面：木炭灰	口縁部～胴部はヨコナズ。胴部～ 底部はナズ(上～下)。	底部はハケメで逆時計回転。胴 部は工具を用いたナズ(ほぼ水平 方向)で逆時計回転。後に口縁部 のみヨコナズ。	胴部(真正面)に焼成後の穿 孔1ヶ所。
8 14号住居址 II層	土 師 器 口径 19.3cm 底径 18.0cm 底径 — 器高 —	外面：にぶい黄橙 内面：にぶい褐色 混入材：石英、水晶、砂	口縁部はハケメの後ヨコナズ。胴 部はヘラケズリで最位の帯状に上 から下へ行なう。	口縁部はヨコナズ。胴部はハケメ (ヨコ)及び工具による黒いナズ(ヨ コ)で、逆時計回転。	

No	地点・階位	器種・器形・法量(口径・底径・器高)	色調(外面・内面)胎土・成形	整 形			備 考
				外 面	内 面	面	
9	14号住居址 II階	土器 甕 口径 4.8cm 底径 — 器高 —	外面：黒褐色 内面：にぶい黄褐色 混入材：石英、水晶	胴部はヘラケズリで、下から上へ行なう。底部はヘラケズリ(中心から外側へ向かって)の後ナデ。	胴部はナデ。底部付近は荒いユビナデ。	外面に炭化物付着	
10	14号住居址 II階	土器 甕 口径 6.0cm 底径 — 器高 —	外面：にぶい黄褐色 内面：明黄褐色 混入材：石英、砂粒	ナデ(タチ)。	胴部はヨココナデ。底部付近はいていねいなナデ。	外面に炭化物付着。	
11	14号住居址 II階	土器 甕 口径 (20.9cm) 底径 — 器高 —	外面：にぶい赤褐色 内面：にぶい赤褐色 混入材：金雲母、石英	口縁部はヨココナデ。胴部はナデでヨココナデの順。	口縁部はヨココナデ。胴部は工具によるナデで、逆時計回転(底部から上方へらせん状に行なう可能性あり)。		
12	14号住居址 II階	土器 甕 口径 15.8cm 底径 15.6cm 底径 7.3cm 器高 21.2cm	外面：にぶい黄褐色 内面：にぶい赤褐色 混入材：金雲母、褐鉄鉱	胴部はハケメ(タチ)の後ナデ(タチ)で上半部ナデがていねい。底部はヘラで荒いナデ。口縁部は胴部のハケメの後ヨココナデ。	口縁部はヨココナデ。胴部はハケメ(ヨコ)で逆時計回転(上・下の順は不定)。底部はナデ又はユビナデ。		
13	14号住居址カマド横	土器 甕 口径 19.3cm 底径 20.3cm 底径 6.8cm 器高 34.4cm	外面：黄褐色。内面：緑 混入材：少(長石)	口縁部はヨココナデ。胴部は軽いケズリ後ナデ(タチや右傾)又はハケメ(タチ)を加え、ハケメの後にナデを加える。	口縁部はヨココナデ。胴部はヨココナデ(ヨコ)が中心だが、タチもある)。		
14	14号住居址 II階	土器 甕 口径 (17.4cm) 底径 (15.2cm) 底径 — 器高 —	外面：明黄褐色 内面：にぶい黄褐色 混入材：石英、長石	口縁部はハケメ(ヨコ)の後ヨココナデ(胴部のハケメの後)。胴部はハケメ(タチ)。	口縁部はケズリ、ハケメ(ヨコ)の後ヨココナデ(胴部のハケメの後)。胴部はオヤエ、ケズリの後ハケメ(タチ)で逆時計回転。		
15	14号住居址 II階	土器 甕 口径 (18.2cm) 底径 — 器高 —	外面：にぶい緑。内面：緑 混入材：砂、褐鉄鉱	口縁部はヨココナデ。胴部はヘラ状工具による荒いナデ。	ヨココナデ。	外面に炭化物付着。	

表8 45号住居出土土器調査表

地点・部位	器種・形制・数量(口徑・底徑・口径・器高)	色澤(外面・内面)・胎土・成形	鑿形		文	備考
			外	内		
1 45号住居址 陶器戸周溝内	壺 口径 30.0cm 底徑 25.5cm 器高 33.0cm	外底：緑 胎土：赤系、茶黒	胎土より下はヘラミガキ(右ノ下から左ノ方迄)入り、底等が凹陥部、右半分は上方に凹陥部をなすらしい。文様はハケケノメの上に細線状。	ナデ(ヨコ)だが割合が多い。		胎土を以て外の外面は全面赤色塗彩。
2 45号住居址 陶器戸周溝内	壺 口径 33.6cm 底徑 9.1cm 器高 33.0cm	外面：明褐色 胎土：石灰、赤系、灰石	胎土下半付迄までヘラミガキ(ヨコ)。底部近くではヘラミガキ(タテ)。	ナデだが割合高。		胴部の胎土部以上の外面は赤色塗彩。
3 45号住居址 P 7	壺 口径 15.2cm 底徑 11.0cm 器高 11.0cm	外面：明褐色 胎土：石灰、赤系、砂	口縁部はヨコナデ。胴部以下はハケケノメの後ヘラミガキ(ヨコナデ)あり。	口縁部はヨコナデ。胴部以下はオサエ。		
4 45号住居址 陶器戸周溝内	壺 口径 3.8cm 底徑 3.8cm	外面：明褐色 胎土：砂、褐色土、灰石	ヘラミガキ。	ナデ。		外面は全面赤色塗彩。
5 45号住居址 P 7 陶器戸周溝内	高杯 口径 8.1cm 底徑 7.0cm	外面：? 内面：? 胎土：赤系、灰石	ヘラミガキ(ヨコ)。	ヘラミガキ(ヨコ)。		外面・内面とも全面赤色塗彩。
6 45号住居址灰底 No.2	高杯 口径 12.0cm 底徑 11.0cm	外面：? 内面：? 胎土：砂、褐色土	体部との接合部にはヘラミガキ(ヨコ)。胎土はヘラミガキ(タテ)をその後縁部にヘラミガキ(ヨコ)を加える。胎土は2層1編で5単位。胎土部穿孔。	胎土はヘラミガキ(ヨコ)で胎土をして塗り付け面。某部はハケケノメ(ヨコ)の後ヨコナデ。		胎土部が2ヶ所に2層ずつ。胎土部が胎土部比某部穿孔2ヶ所あり。外面は全面赤色塗彩。

表9 45号住居出土土器片断品調査表

地点・部位	長さcm	幅cm	最大厚cm	重量g	素材	形制	製作方法		備考
							打込火	焼	
1 陶器 内底	5.1	3.5	0.5	16.5	陶器	丸方形	打込火	焼	素材は赤色塗彩 素材は胎土部塗彩文をも5、33と同一個体か?
2 陶器 内底	4.7	3.9	0.4	12.5	陶器	丸方形	打込火	焼	素材は胎土部塗彩文をも5 素材はハケケノメをもつ
3 陶器 内底	3.1	-	0.5	10.5	陶器	丸方形	打込火	焼	素材は胎土部塗彩文をも5 素材はハケケノメをもつ
4 陶器 内底	3.7	2.4	0.5	8.0	陶器	不整方形	打込火	焼	素材は赤色塗彩
5 陶器 内底	3.1	2.5	0.5	6.5	陶器	不整五角形	打込火	焼	素材は赤色塗彩
6 陶器 内底	-	-	0.4	4.0	陶器	不整四角形?	打込火	焼	素材は赤色塗彩
7 陶器 内底	-	2.4	0.4	4.0	陶器	不整四角形?	打込火	焼	素材は赤色塗彩
8 陶器 内底	-	-	0.4	4.0	陶器	不整四角形?	打込火	焼	素材は赤色塗彩
9 陶器 内底	3.4	-	-	4.0	陶器	不整四角形?	打込火	焼	素材は赤色塗彩
10 陶器 内底	-	-	-	4.0	陶器	不整四角形?	打込火	焼	素材は赤色塗彩
11 陶器 内底	-	-	-	4.0	陶器	不整四角形?	打込火	焼	素材は赤色塗彩
12 陶器 内底	-	-	-	4.0	陶器	不整四角形?	打込火	焼	素材は赤色塗彩
13 陶器 内底	4.3	2.9	0.5	9.5	陶器	不整方形	打込火	焼	素材は赤色塗彩
14 陶器 内底	4.0	7.0	0.6	22.5	陶器	半円形	打込火	焼	素材は赤・黒色とも赤色塗彩
15 陶器 内底	4.6	3.5	0.6	9.5	陶器	半円形	打込火	焼	素材は赤・黒色とも赤色塗彩
16 陶器 内底	2.3	4.6	0.6	9.5	陶器	半円形	打込火	焼	素材は赤・黒色とも赤色塗彩
17 陶器 内底	3.0	5.7	0.5	10.5	陶器	半円形	打込火	焼	素材は赤・黒色とも赤色塗彩
18 陶器 内底	3.0	5.7	0.5	10.5	陶器	半円形	打込火	焼	素材は赤・黒色とも赤色塗彩
19 陶器 内底	2.4	4.2	0.5	6.0	陶器	半円形	打込火	焼	素材は赤・黒色とも赤色塗彩
20 陶器 内底	2.6	5.0	0.4	9.5	陶器	半円形	打込火	焼	素材は赤・黒色とも赤色塗彩
21 陶器 内底	2.6	5.0	0.4	9.5	陶器	半円形	打込火	焼	素材は赤・黒色とも赤色塗彩
22 陶器 内底	3.0	4.8	0.5	9.5	陶器	半円形	打込火	焼	素材は赤・黒色とも赤色塗彩

№	地点・層位	長さ	幅	厚	最大厚	重量	素材	形状	製作方法	備	考
23	Ⅱ層	3.0	5.2	0.5	12.0	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一研磨、一磨蝕い研磨	素材は赤色磁彩	
24	Ⅱ層内	2.5	4.0	0.5	6.0	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤色磁彩	
25	Ⅱ層	2.7	—	—	—	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤色磁彩	
26	Ⅱ層	—	—	—	—	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
27	Ⅱ層	—	—	—	—	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
28	Ⅱ層	—	—	—	—	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
29	Ⅱ層	—	—	—	—	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
30	Ⅱ層	3.3	3.6	0.5	—	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
31	Ⅱ層	3.5	6.7	0.8	21.5	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
32	Ⅱ層	3.2	4.5	0.5	—	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
33	Ⅱ層	3.8	—	—	—	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
34	Ⅱ層	2.3	—	—	—	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
35	Ⅱ層	2.6	2.3	0.6	8.0	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
36	Ⅱ層	2.6	4.8	0.5	7.5	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
37	Ⅱ層	2.8	—	—	—	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
38	Ⅱ層	1.9	2.0	0.4	6.0	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
39	Ⅱ層	3.2	2.8	0.5	2.5	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	
40	Ⅱ層	2.5	1.5	0.5	—	—	硬・腐葉	半円形	打5次身一磨蝕い研磨	素材は赤・黒面とも赤色磁彩	

土器片製品……土器片の断面を打5次身、磨蝕い研磨をほすたもので、半円形・楕円形・扇丸形等の形状を呈す。製作方法は土器片断に類似するが、形状は断面に於いて異なり、底部づけは保層をぞるを得ないため、土器片製品と区別して書く。(図10)

表 10 建物 20・27 出土土器断片表

№	地点・層位	形状・器形・枚数・破片 器・破片・磁彩・磁彩・磁彩	土器器 口径(口)	土器器 底径(底)	土器器 底径(底)	土器器 底径(底)	土器器 底径(底)	土器器 底径(底)	土器器 底径(底)	形		備	考
										外	内		
4-1	建物 20 P286	土器器 口径(口) 3.0cm 底径(底) 5.6cm 底径(底) 5.2cm	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	口縁部一断面上半はハケメ(チナ)・ヨコで風化。断面下半一断面はチナ。	ハケメ(チナ)を赤土に左上よりが多いで、逆時計回転頭(底面から上へ、らせん状に加えるらしい)。	
2-1	建物 27 P429	土器器 口径(口) 3.0cm 底径(底) 5.6cm 底径(底) 5.2cm	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	口縁部はヨコチナ。体面はチナ。ヨコチナの痕跡チナ。断面の接合部はチナ。断面はヨコチナ(深層はヨコチナが付く)。	口縁部はヨコチナ。体面はチナ。断面の接合部はチナ。断面はヨコチナ(深層はヨコチナが付く)。	透孔があるが、数は不明。
2-2	建物 27 P429	土器器 口径(口) 3.0cm 底径(底) 5.6cm 底径(底) 5.2cm	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	断面上半はチナエの痕ハケメ(チナ)。断面下半はハケメ(チナ)の痕跡工器片のナゲ(ヨコチナ)。	断面上半はチナエの痕ハケメ(チナ)。断面下半はハケメ(チナ)の痕跡工器片のナゲ(ヨコチナ)。	透孔があるが、数は不明。
2-3	建物 27 P427	土器器 口径(口) 3.0cm 底径(底) 5.6cm 底径(底) 5.2cm	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	断面上半はチナエの痕ハケメ(チナ)。断面下半はハケメ(チナ)の痕跡工器片のナゲ(ヨコチナ)。	断面上半はチナエの痕ハケメ(チナ)。断面下半はハケメ(チナ)の痕跡工器片のナゲ(ヨコチナ)。	
2-4	建物 27 P429	土器器 口径(口) 3.0cm 底径(底) 5.6cm 底径(底) 5.2cm	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	断面上半はヨコチナ。下半はチナ。	断面上半はヨコチナ。下半はチナ。	
2-5	建物 27 P400	土器器 口径(口) 3.0cm 底径(底) 5.6cm 底径(底) 5.2cm	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	外周: 灰 内周: 灰 底径: 灰	断面は下方のハケメ(チナ)の痕跡上方のハケメ(ヨコチナ)。断面はヨコチナ。断面は工器片によるチナ(ヨコチナ)。断面はチナエの痕跡上方はヨコチナ。下方はチナ。	断面は下方のハケメ(チナ)の痕跡上方のハケメ(ヨコチナ)。断面はヨコチナ。断面は工器片によるチナ(ヨコチナ)。断面はチナエの痕跡上方はヨコチナ。下方はチナ。	

表 11 堅穴住居址内出土石器類一覧

図番号	出土地点・層位	長さcm	幅cm	厚さcm	重さg	欠損部	石質	備	考
78-8	12住 床	11.7	9.3	3.5	512		砂岩	砥石	
48-6	13住 床	9.0	6.9	5.6	529		矢沢山石岩	磨石	
69-5	18住 床	17.0	13.2	5.5	776		流紋岩	砥石	
24-10	30住 床	23.8	16.0	4.0	3710		汚質砂岩	平石	
24-9	30住 床	9.4	7.2	6.3	663		矢沢山石岩	磨石	
26-3	31住 床	12.5	4.9	0.5	68		結晶片岩	打製石斧	
26-4	31住 床	6.2	3.3	0.8	25		燧岩	スタレイバー	
	33住 床	3.3	2.2	0.8	10		砂岩	紅ガラがぬらされている	
55-7	39住 床	7.9	3.5	2.7	155		石英斑岩	砥石	
	43住 床	16.5	5.1	3.8	456		石英斑岩?	使用痕有り	
62-1	44住 床	1.8	2.6	1.1	7		黒曜石	石核	
	46住 床	9.3	1.6	1.0	23		粘板岩	砥石?	
37-14	49住 床	6.5	2.9	1.0	31		粘板岩	砥石	
37-12	49住 床	1.1	0.6	0.4	1		礫	装飾用玉 片穴穿孔	
	59住 床	8.7	4.8	2.6	170		安山岩	磨石? 有機物付着	

表 12 堅穴住居址内出土鉄器類一覧

図番号	出土地点・層位	製品名	遺存状態	現存計測数値				備	考
				長さcm	幅cm	厚さcm	重さg		
78-9	12住 I	?	?	3.5	1.0	0.9	2.5		
12-9	15住 I	刀子	身のみ刃先欠損	5.0	1.2	0.7	5.0		
69-4	18住 II	刀子	身	8.0	1.5	0.8	11.0		
55-8	39住 I	刀子	刃先欠損	4.7	1.0	0.7	2.5		
37-13	49住 I	?	?	5.5	1.2	0.7	6.0		



第 V 章 トチガ原遺跡立ち合い調査

第1節 位置と環境

1 位置と環境 (I-図2)

トチガ原は大町市大字平借馬の東方約1kmの地点にあり、借馬遺跡B地区からは東北に約250mの所である。ここは東方一帯に起伏する中山山地が迫り、その中の一山脚が南に伸びた先端で、西方に向けた扇状地形が、鹿島川と農具川とによって造られた沖積層と交わる線上で北に山を負い南の眺望が広い環境の所である。この付近には遺跡が多く、今回の調査地点の北東に接した山沿いに、縄文早期以降の遺物を出す所があり、東方の羽黒山上に縄文前期末の遺跡が前見され、北方約1kmのコボレ沢遺跡では、縄文早期から各時代に至る遺物が出土している。周辺の山地は低い山と浅い谷とが重なり合い、豊富な湧水が所々に見られるなどから、古代からの生活環境は恵まれていたとも考えられる。(原田 曠)

第2節 調査区の設定と調査の経過

1 発掘区の設定

トチガ原遺跡は、借馬遺跡B地区の東約250mほどの崖上に広がる縄文時代早期の集落址であるが、本年度平地区農業基盤整備事業に伴う農具川河川改良工事により、遺跡の西角、東西150m、南北20mが工事のため破壊されるので、その間を立ち合い確認調査した。その結果、遺跡の予想分布地域をやや外ずれて崖縁下に約5m四方の赤褐色の落ち込みと遺物の散乱が確認できたので、その間を発掘区として設定した。その後2度にわたる立ち合い調査を実施したが、遺構や遺物はみあたらなかった。

2 発掘調査の経過

トチガ原遺跡は、借馬遺跡B地区の東約250mの距離にある縄文早期の遺跡である。立地は東山山麓のなだらかな段丘上にあつて、すぐ足もとから水田1枚が続きその端は農具川である。この地区も55年度農具川改良工事地区に該当し、段丘すれすれに河川が着け替えられるため、立ち合い調査の対象地区に指定されていた。

工事は年あけに着工される予定のため、12月19日段丘下の水田の土上が約3000㎡にわたって除去されたので作業に立ち合った。水田下からは住居址と思われる黒色の落ち込み1ヵ所のほか、石楯、棒状石斧、打製石斧、黒曜石などをはじめ、多数の土器片(水1式)が出土した。

この結果にもとづいて、12月22・23日の両日、発掘調査を実施した。発掘調査は全て人手にたより、発

第V章 トチガ原遺跡立ち合い調査

掘面積は約200㎡であった。

さらに、この地点より100m東南に、段丘の張出した地形が続いており、この地点では農具川改良工事の法面が段丘へ約数mくい込む計画となっているため、昭和56年1月19日張出し部分約30mの間について、幅2mのトレンチ5本を入れ、上土を除去し下層の状況を見たが、遺構らしい落込みも、一片の土器片もみられなかった。

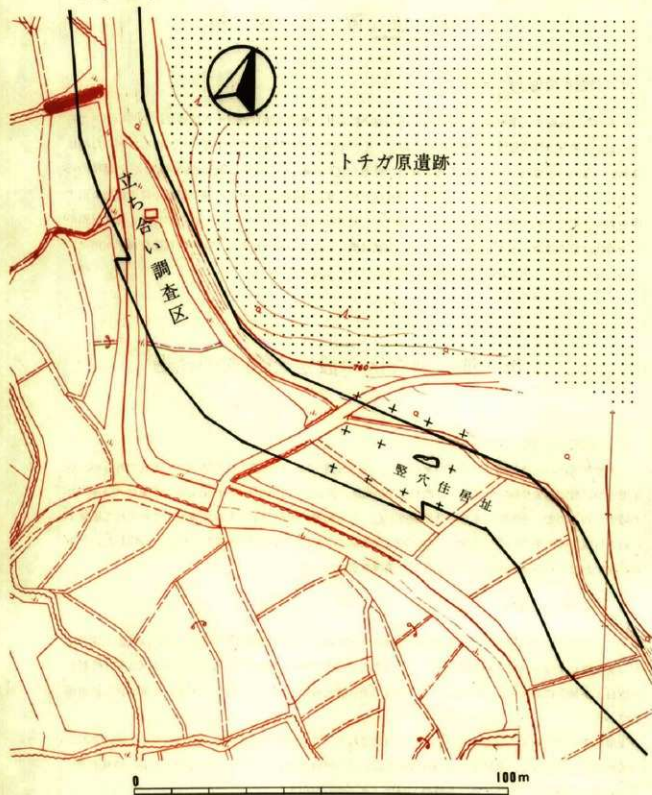


図1 トチガ原遺跡立ち合い調査区設定図と遺構 (1:1,000)

第3節 遺構と遺物

1 竪穴住居址

遺構 この遺構は、水田の造成によって上部の土層が攪拌されており、1層は砂質黒色土で酸化した鉄分の浸透した硬い部分であり現在までの水田の床土層である。この層から若干の土器片が発見され、立ち合い調査で確認されたのである。次にその範囲を推定して、順次上から土を削って見た所、1層である所の砂を含み黒色土が東から西へ深く堆積し、厚さ10cmから25cm程となり、西端は礫層で遮断されていた。この層から多数の土器片と石器が小範囲にわたり散布していたさらにその下に黄褐色土に黒色土が含まれた硬い層が7cm程の厚さに堆積しており、土器片と石器片がやはり検出され、その下から、幅1m、長さ2m、深さ1.2mの卵形をしたピットが発見され、ここからも土器片が少量検出された。又、東と南に土層の変化がありこの調査経過から、この遺構は土器の型式などから見て、縄文文化晩期末の住居関係の跡ではないかと考えられたのである。

竪穴式住居は、中にピットまで設けて、食糧などが貯蔵されたことが想像される。その後農具川が荒れた際この住居にも多量の砂礫が流れ込み、西側の大半を破壊されたと考えられるもので、遺構全体を検出するにはいたらなかった。しかし、多くの土器や石器が残されているので、遺構として完全な竪穴の住居址とはいえないまでも、この時代の文化を知る興味深い資料となるものであろう。

2 竪穴住居址出土遺物

(1) 土器

検出された土器は大別して精製土器と粗製土器に分かれる。精製土器(9・10)は、深鉢形・浅鉢形・白付鉢形・碗形などの器形で、5mm以内の器厚をとるものが大部分を占め、胎土は深鉢形が黄白色、浅鉢形が赤褐色及び暗褐色、碗形が黄褐色を呈する。文様は碗形が無文の他は深鉢形と浅鉢形に文様がある。

深鉢形は平縁又は低い山形口縁で、口縁部外面下に浅い溝を2条又は3条めぐらしたものが大部分である。内外面ナデが行われる。

浅鉢形は口縁外面下に浮線網状文をめぐらし、又は細い沈線部を2条めぐらしたものなどがある。この器形

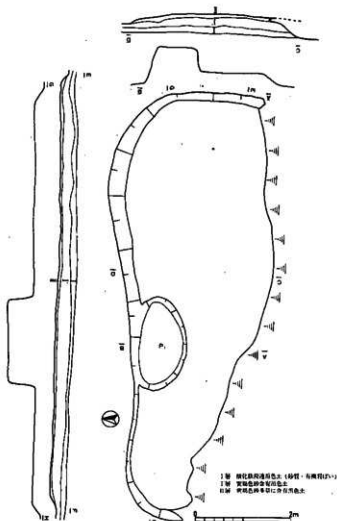


図2 トカガ原遺跡竪穴住居址(1:80)

の仕上げは特に入念である。

粗製土器には深鉢形と甕形(5)があり、器厚は甕形が5mm前後であるが、深鉢形は1cm前後あり、丈夫なつくりとなっている。胎土は黄褐色をとするものが大部分を占めており、内外両面に煤の附着しているものが多いのは、食物調理上これらの土器が火にかけられたことを証明するものといえる。

深鉢形土器の口縁は外反するか、外方に肥大した形をとり、そこに刺突文か針条文を描き、櫛状具にて胴部に縦に条線を下ろすものや、波状口縁の外面下をくびれる形にするもの(10)と(11)などが特に見られる形で、又、底部はどっしりとした平底で、厚い底部の裏面には、網代底のあるもの9、木葉底のあるもの2、その他10となっていた。網代底は浅いものが多く、底部の完形品でのものはないので、その痕跡は察知する程度である。

出土土器の年代について、トチガ原の壑穴址から検出された土器は、一口にいえば、中部山岳地帯における縄文式晩期末の文化の中にあつたといえるものと考えられる。その特徴は、浮線網状文を有する浅鉢形土器が、長野県小諸市水出土の土器とほぼ同じく、又、粗製の深鉢形土器が口縁部肥大で施文され、胴部に条線文の描かれることなどは、西日本の条痕土器の手法そのままであり、無文土器の相当量の存在と共に、これらは縄文式文化の終末を現した土器の代表的な形である。これらの文化に続いて直後に弥生式中期の文化がこの地方にも入つたのであり、その意味では極めて重要な資料として考えられるのではないかと思うものである。

(2) 石器類

壑穴址より検出された石器は、打製石斧17、磨製石斧1、石鏃4、その他の石器、剥片3がある。

打製石斧は短ざく形と呼ばれるものが多く、大きさは長さ8cmから17cmに及ぶものがあり、石質は1層から出土したもので、1・5・9・10・12・14・19が砂質泥岩、3が砂岩、4・7・8・13・18・26が絹雲母岩、17が黒雲母岩、6が結晶片岩、20が安山岩、11が硬砂岩であり、II層出土のものは、1・2が粘板岩、3・4が砂質泥岩、5が安山岩である。又、磨製石斧は、I層の出土で2がそれであるが棒状石斧又は遠州式石斧と呼ばれるもので、先端が欠失している。変質砂岩である。

石鏃は黒曜石でつくられ、精巧にできている。

この遺構のように打製石斧の多出するのは、縄文晩期の生業が、狩猟と漁撈の他に、土に対する労働と生産に関係のあるものに、順次ウエイトがかかってきたことが考えられよう。それは稲作以前における所の、畑の耕起であるかも知れないし、その実体は現在では推察の域を出ないといえる。住居の低地への進出などから、この文化は弥生式文化直前の様相を物語るものと考えたい。

(原田 肇)

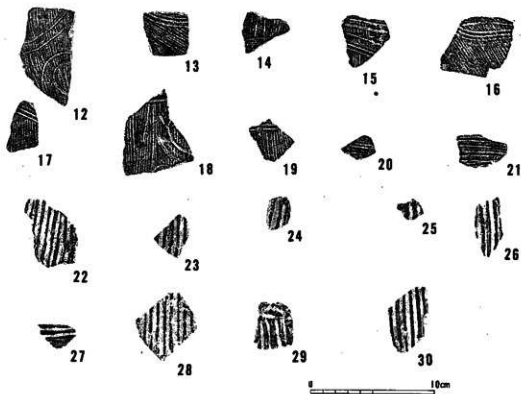
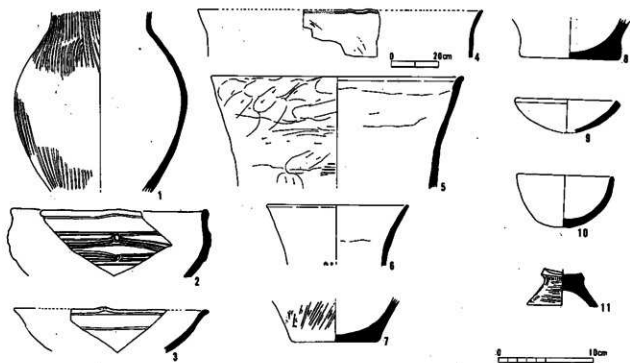


图4 整穴住居址出土土器拓影图(1:3)

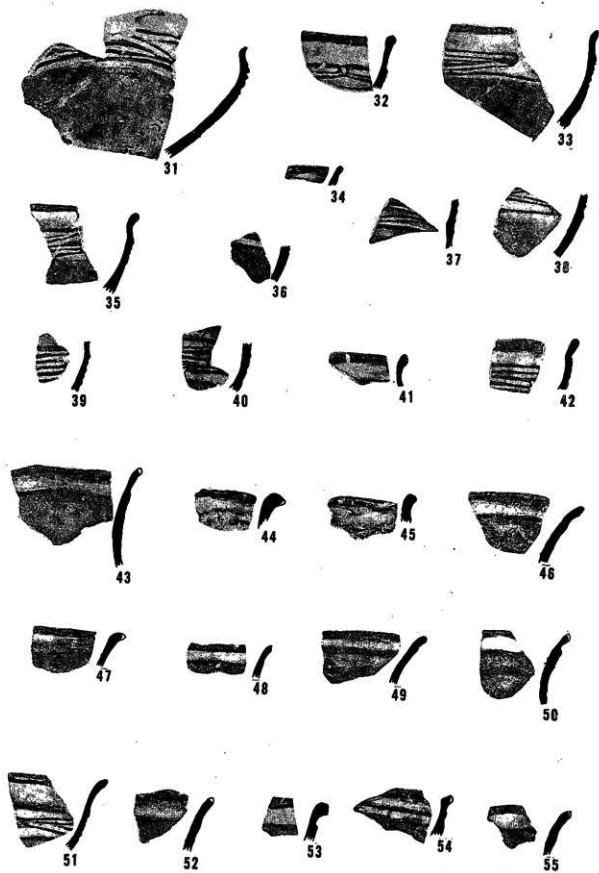


图5 暨穴住居址出土土器拓影图 (1:3)

0 10cm

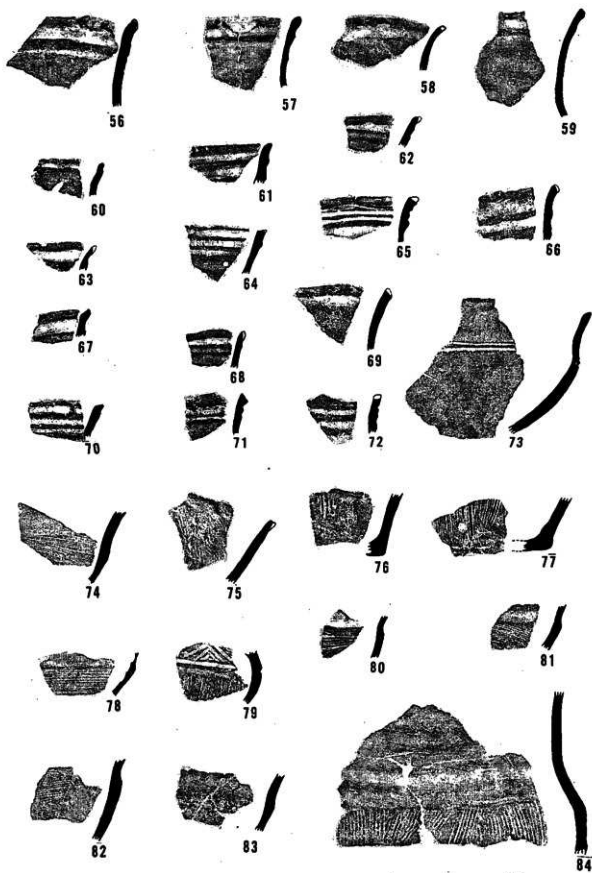


图6 竖穴住居址出土土器拓影图(1:3)

0 10cm

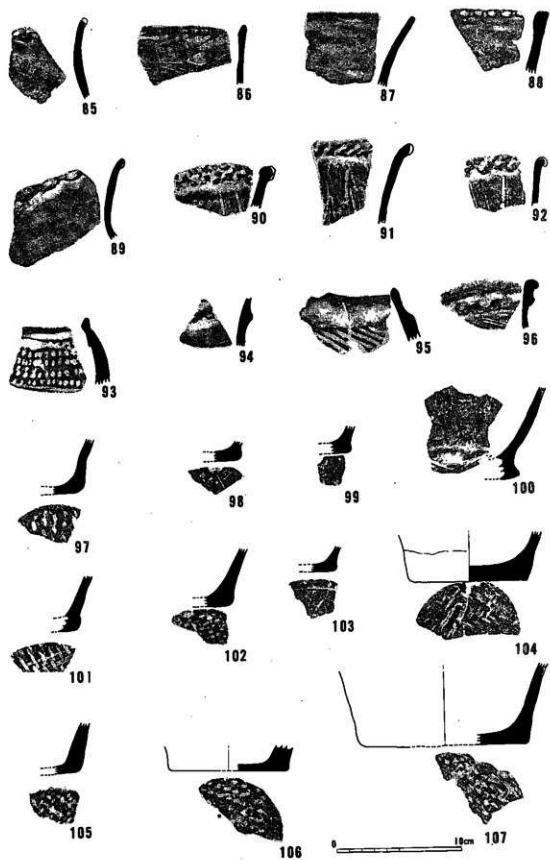


图7 塋穴住居址出土土器拓影图(1:3)

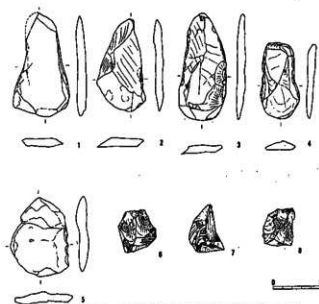


图8 墅穴住居址II层内出土石器类 (1:4)

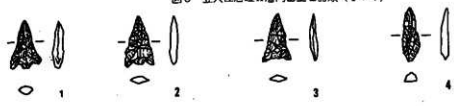


图9 墅穴住居址I层内出土石器 (1:1.5)

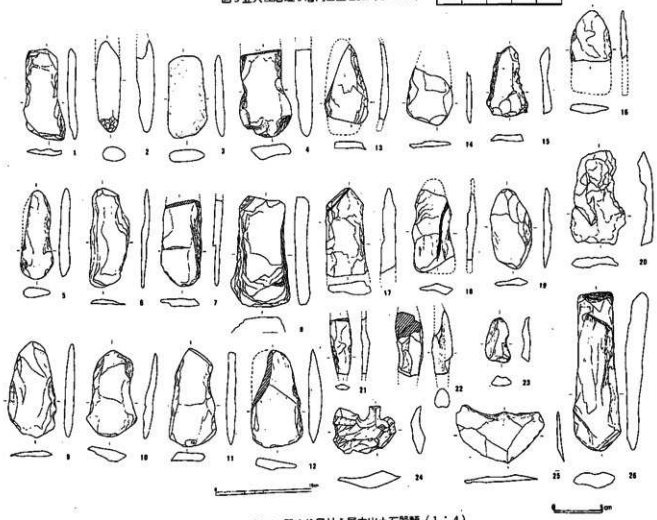


图10 墅穴住居址I层内出土石器类 (1:4)

表3 竈穴住居址出土図示石器類一覽

図番号	器種	形態	長さ (cm)	幅 (cm)	最大厚 (cm)	重さ (g)	石質	破損部位	備考
5-1	打製石斧	円刃分銅形	(10.7)	6.0	1.1	(86)	粘板岩	頭部の一部	
5-2	打製石斧	斜刃挽形	9.5	5.2	1.5	70	粘板岩	完形	
5-3	打製石斧	円刃短冊形	10.9	4.9	1.0	70	砂質泥岩	完形	
5-4	打製石斧	円刃分銅形	7.7	4.2	1.2	50	砂質泥岩	完形	
5-5	打製石斧	円刃短冊形	8.1	6.1	1.6	75	安山岩	完形?	
5-6	剥片	-	4.4	4.0	1.2	19	黒曜石	-	
5-7	剥片	-	5.0	3.5	1.4	16	黒曜石	-	
5-8	剥片	-	3.8	3.4	0.9	12	黒曜石	-	
6-1	石鏃	有茎凸基	(1.9)	1.3	0.9	(4)	黒曜石	脚一部欠損	
6-2	石鏃	有茎凸基	2.0	1.1	0.3	3	黒曜石	完形	
6-3	石鏃	無茎凹基	1.8	1.2	0.3	3	黒曜石	完形	
6-4	石鏃?		2.1	0.7	0.3	2	チャート	完形	
7-1	打製石斧	斜刃分銅形	9.7	4.4	1.2	71	砂質泥岩	完形	
7-2	磨製石斧	遠州式	(9.6)	2.6	2.1	(95)	粘板岩	頭部~胴部	
7-3	打製石斧	斜刃短冊形	8.6	4.1	1.2	74	砂岩	完形	
7-4	打製石斧	円刃分銅形	(9.3)	5.4	2.3	(160)	絹雲母片岩	頭部~胴部	
7-5	打製石斧	円刃短冊形	9.2	(3.3)	1.4	(56)	砂質泥岩	頭部~片側辺部	
7-6	打製石斧	円刃短冊形	10.3	4.2	0.7	50	結晶片岩	完形	
7-7	打製石斧	斜刃短冊形	(8.9)	4.2	1.4	(76)	絹雲母片岩	頭部~胴部	
7-8	打製石斧	円刃分銅形	11.4	6.2	6.1	182	絹雲母片岩	完形	
7-9	打製石斧	円刃挽形	10.0	5.0	1.0	64	砂質泥岩	完形	
7-10	打製石斧	円刃分銅形	9.0	5.3	1.3	75	砂質泥岩	完形	
7-11	打製石斧	円刃挽形	10.3	4.9	1.4	100	硬砂岩	完形	
7-12	打製石斧	円刃短冊形	10.2	(5.4)	1.5	(95)	砂質泥岩	頭部~片側辺部	
7-13	打製石斧	?短冊形	(8.4)	4.6	1.0	(34)	絹雲母片岩	頭部~片側辺部 胴部~刀部	
7-14	打製石斧	斜刃短冊形?	(6.3)	4.8	0.7	(25)	砂質泥岩	頭部~胴部	
7-15	打製石斧	直刃分銅形	7.4	4.3	1.0	42	粘板岩		化工途中?
7-16	打製石斧	?短冊形	(5.4)	4.3	0.9	(34)	砂質粘板岩	胴部~刀部	
7-17	打製石斧	?短冊形	(9.4)	4.3	2.4	(121)	絹雲母片岩	刀部	
7-18	打製石斧	?短冊形	(8.6)	4.4	1.6	(62)	絹雲母片岩	頭部 刀部	
7-19	打製石斧	斜刃挽形	8.4	4.4	0.9	34	砂質泥岩	完形	
7-20	打製石斧	直刃分銅形	9.8	5.6	1.6	88	安山岩		化工途中?
7-21	?	-	(5.7)	2.2	1.1	(24)	緑色火成岩		使用痕部有り
7-22	石棒?	-	(6.6)	2.2	2.2	(54)	表石質		
7-23	剥片	-	4.6	2.1	1.1	1.9	粘板岩		
7-24	石匙	-	5.0	6.6	1.8	50	泥質砂岩		化工途中?
7-25	剥片	-	6.4	9.2	0.6	39	砂岩		使用痕部無し
7-26	打製石斧	円刃分銅形	16.4	5.0	2.2	243	絹雲母片岩	完形	

表1 竪穴住居址出土土器一覽

整 形	器 形	出 土 部 分	個 数
精 製 土 器	深鉢形土器	口 縁 部	31
		底 部	5
		そ の 他	4
	浅鉢形土器	口 縁 部	15
		そ の 他	6
	台付鉢形土器	台 部	1
	碗形土器		2
そ の 他		3	
粗 製 土 器	深鉢形土器	口 縁 部	30
		底 部	21
		そ の 他	5
	甕形土器	口 縁 部	1
		胴 部	14
そ の 他		20	

表2 竪穴住居址出土図示土器一覽

番号	器 形	層 位	口 径	腹 径	底 径	器 高	色 調	整 形 上 の 特 徴	備 考
1	盆 形	I	-	(18.4)	-	-	黒褐色	櫛目状施文具によるタテ方向の条痕文	
2	浅鉢形	P ₁	(21.0)	(21.5)	-	-	暗褐色	浮線網状文	
3	浅鉢形	I	(20.5)	-	-	-	黄褐色		
4	深鉢形	II	(30.1)	-	-	-	茶褐色	口縁部沈線	
5	深鉢形	I	(26.7)	-	-	-	灰黄褐色	口縁部研磨	
6	深鉢形	I	(15.0)	-	-	-	灰黄褐色	ヘラ状工具で研磨	
7	深鉢形	I	-	-	(9.0)	-	茶褐色	櫛目状施文具による条痕文	
8	深鉢形	II	-	-	(10.5)	-	茶褐色	ヘラ状工具で研磨	
9	皿	II	11.2	-	-	3.5	茶褐色		
10	碗	I	10.3	-	-	5.5	灰黄褐色	ヘラ状工具で研磨	
11	台付鉢	I	-	-	7.5	-	暗褐色	櫛目状施文具による条痕文	

1. 信馬遺跡A地区北
部全景(北方より)





1. 借馬遺跡A地区北部全景及び農具川
河川改良工事状況(南方より)

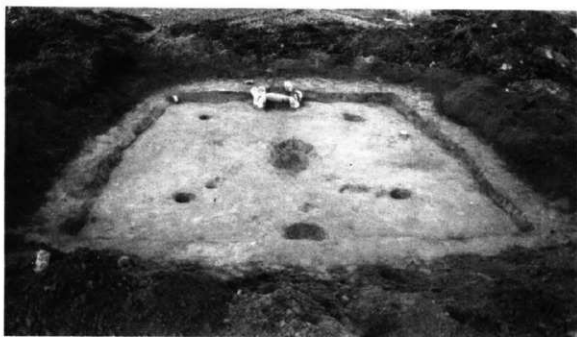


2. 借馬遺跡遠景
(南方より)



3. 借馬遺跡近景
(南方より)

1. 11号住居址
(南方より)



2. 3・4.
11号住居址カマド

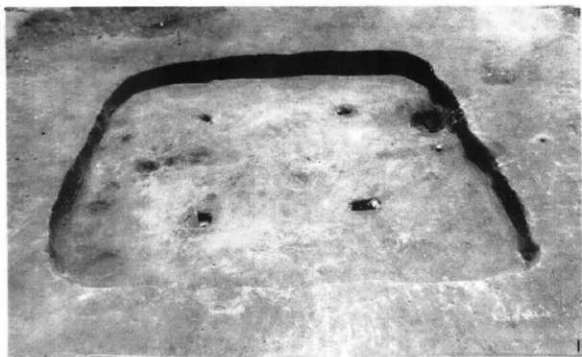


5. 11号住居址土器出土状況



6. 12号住居址
(西方より)



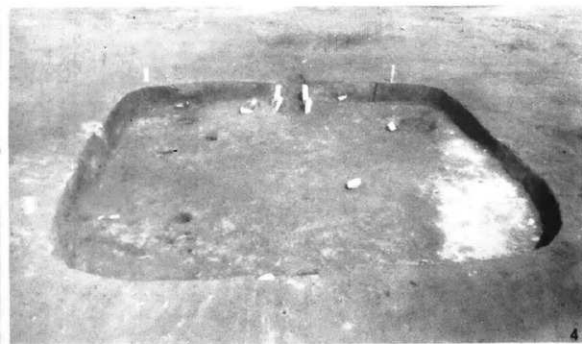


1. 13号住居址
(北方より)



2. 13号住居址
P₄内土器出土状況

3. 13号住居址
土器出土状況



4. 14号住居址
(南方より)



5. 6. 14号住居址
カマド

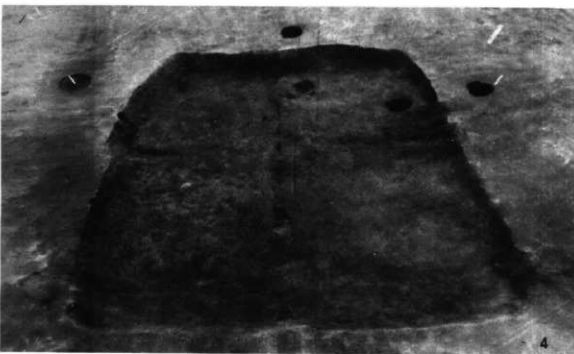
1. 14号住居址
骨片出土状況



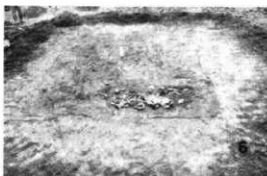
2. 3. 14号住居址
土器出土状況

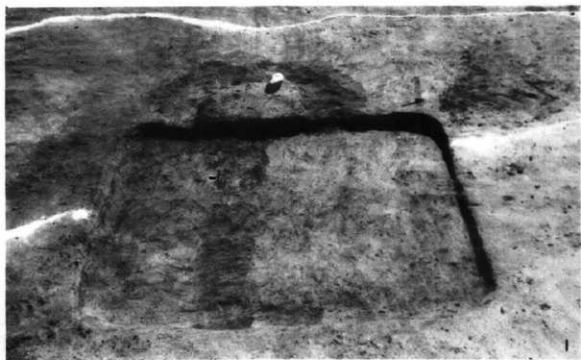


4. 15号住居址
(東方より)



5. 6. 15号住居址
土器出土状況

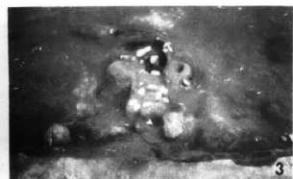




1. 16号住居址
(東方より)



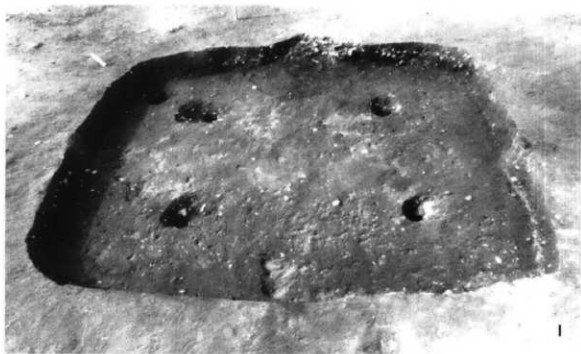
2. 17号住居址
(南方より)



3. 4. 5.
17号住居址
カマド



1. 18号住居址
(南方より)



2. 18号住居址
土器出土状況



3. 19号住居址
(東方より)





1. 20号住居址
(東方より)



2. 21号住居址
(東方より)



3. 22号住居址
(東方より)

1. 24号住居址
(東方より)



2. 24号住居址
礫流入状況
(南方より)

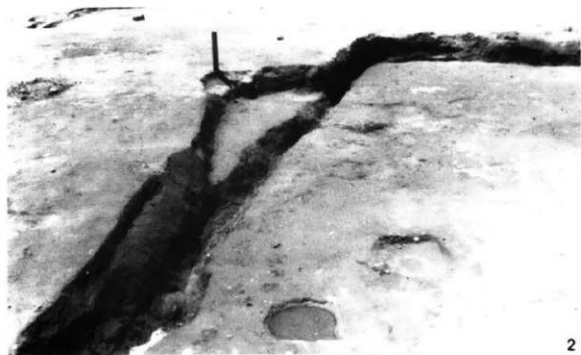


3. 24号住居址
埋裏材(?)址





1. 23、25号住居址
(北方より)



2. 23号住居址
(東方より)



3. 25号住居址
(東方より)

1. 26, 27号住居址
(東方より)



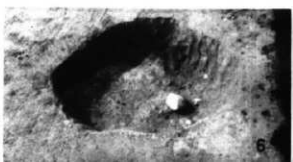
2. 26号住居址
(北方より)



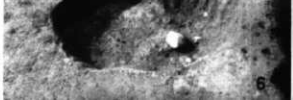
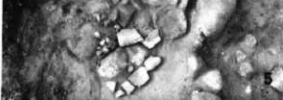
3. 26号住居址
炉(?)址

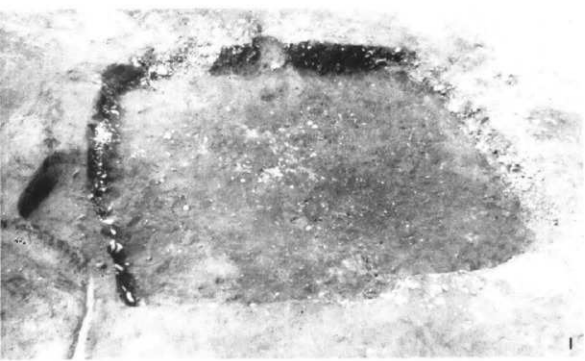


4. 5.
26号住居址
土器出土状況



6. 26号住居址切り合
いピット P282





1. 27号住居址とP₂₈₂
(南方より)

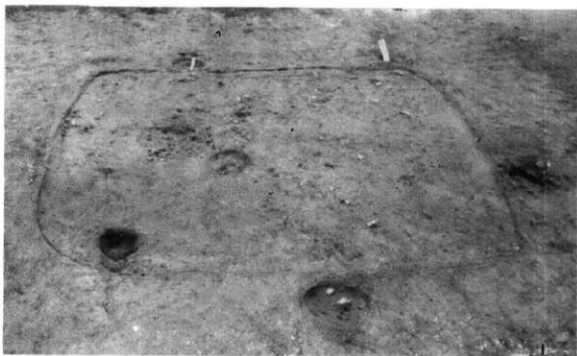


2. 27号住居址集石状況
(北西方より)



3. 28号住居址
(東方より)

1. 29号住居址
(東方より)

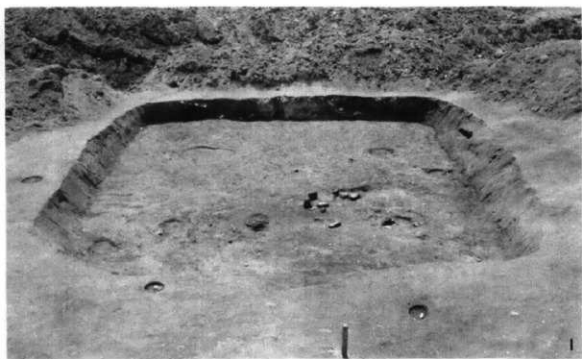


2. 30号住居址
(西方より)



3. 4. 5. 6.
30号住居址遺物出土状況





1. 31号住居址
(東方より)

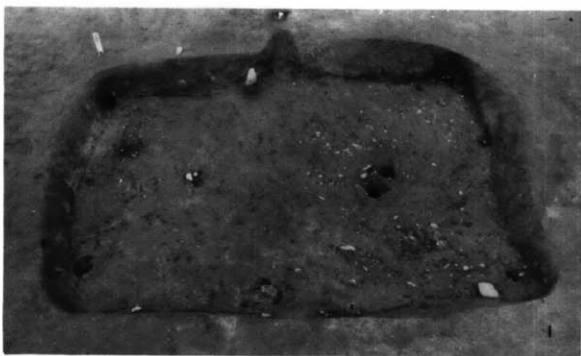


2. 32号住居址
(南方より)



3. 32号住居址
集石状況(南方より)

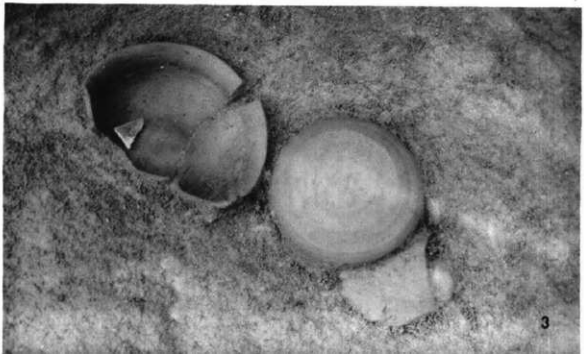
1. 33号住居址
(南方より)

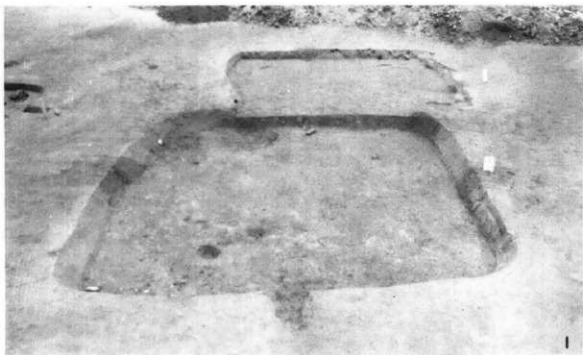


2. 33号住居址カマド

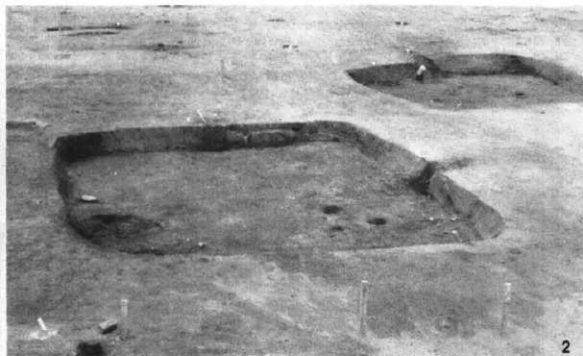


3. 33号住居址
土器出土状況





1. 34、35号住居址
(東方より)



2. 34号住居址
(南方より)



3. 34号住居址
埋裏(?)址

1. 35号住居址
(西方より)



2. 36, 37号住居址
(北方より)

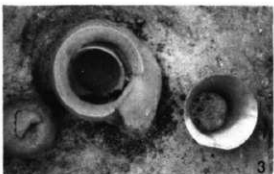


3. 36号住居址
(東方より)





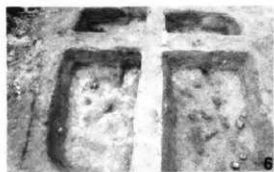
1. 2.
36号住居址
土器出土状況



3. 同上壺口縁をとり
のぞいたところ
4. 36号住居址
集石状況

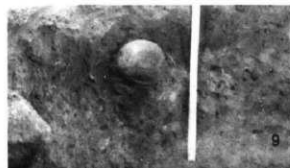


5. 37号住居址
(西方より)



6. 37号住居址炭化物
土器出土状況
(南方より)

7. 8. 9.
37号住居址土器出
土状況



1. 借馬遺跡北西角簡
易水路部全景
(東方より)



2. 38, 39, 40, 41号
住居址 (東方より)

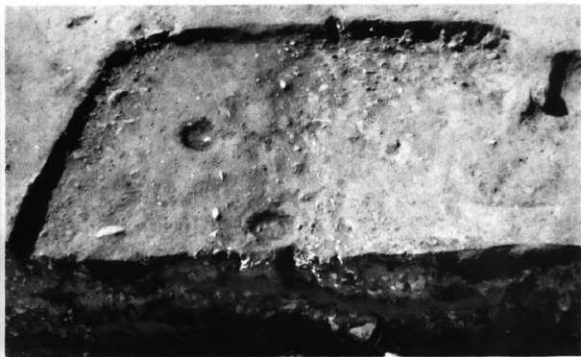


3. 38号住居址
(東方より)

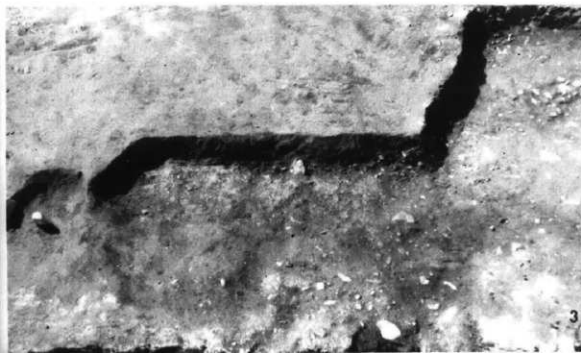




1. 39号住居址
(西方より)



2. 40号住居址
(南方より)



3. 41号住居址
(南方より)

1. 42, 43号住居址
(東方より)



2. 42号住居址
(東方より)



3. 43号住居址
(東方より)





1. 42, 43号住居址切り
り合いピットP439
(東方より)



2. 43号住居址切り
り合いピットP440
(南方より)



3. 43号住居址切り
り合いピットP441
(東方より)



1. 借馬遺跡農具川河
川改良工事地区
G.66=O L.22付近
(東方より)

2. 44号住居址
(東方より)

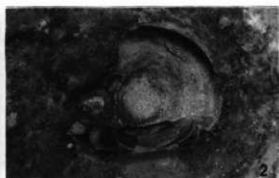


3. 45号住居址
(東方より)





1. 45号住居址
礎流入状況
(西方より)



2. 4. 45号住居址
埋壺炉

3. 45号住居址
土器出土状況



5. 45号住居址
集石状況



6. 46, 47号住居址
(北方より)

1. 46号住居址
(東方より)



2. 47号住居址
(西方より)



3. 48号住居址
(東方より)





1. 49号住居址
(西方より)



2. 49号住居址
土器出土状況



3. 借馬遺跡農具川河
川改良工事地区
G.46=40 R10付近
全景(東方より)